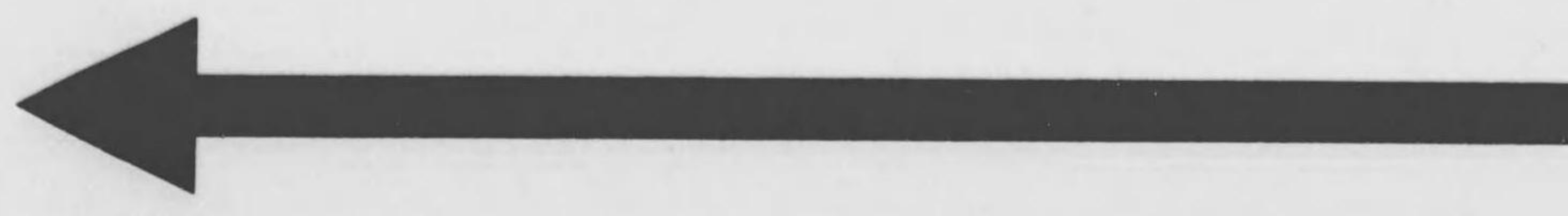




2



始



353

28₃



353-283



國譯密教

論

輝
大正



11. 5. 15

内交

國譯密教論釋第四

目次

一、國譯大毘盧遮那成佛經疏

二十卷ノ内

自卷第十一、至卷第二十……………

吉祥田慈舟國譯……………一

一、國譯大毘盧遮那經供養次第法疏上下二卷……………

吉祥田慈舟國譯……………五六七

國譯密教論釋第四目次終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十一

沙門一行阿闍梨記

（二）悉地出現品第六

「その時に世尊また諸の大衆會を觀じて、一切の願を満足せんと欲するが爲の故に、また三世無量門決定智圓滿の法句を説きたまふ」とは、大衆を觀察したまふこと因縁なきに非ず。先づ佛心を以て彼の衆生の種・相・體・性、何れの法を受くるに堪へ、何れの種を以て利益を得べしと觀察したまふ。是の如く觀じ已りて、當に知るべし、彼の法門に於て悟入することを得べきが故に、此れを説かんと欲するが爲の故に、先づ機を觀じたまふなりと。三世無量決定智門とは、謂はく一念に於て三世の中に、無量無礙なる智門なり。佛、種種の方便を以て此の妙法を説きたまふ。一切衆生、各所應の智門に隨ひて、決定することを得、その門無量なり、故に無量門と言ふなり。佛、大衆會を觀じたまふ、此の普門法界趣入の門を説きて、各本縁に隨ひて決定を得しめんと欲するが爲の故に、決定智門と名く、法句とは、謂はく先づ事に觸れ事に從ひ

（一）已下經の第三卷悉地出現品の文を釋す如來の剛手の第三間に於て世間の果相を益へ、今品に於て世間の果を益し、又眞有修証の方便を對せんとして先づ悉地の行はるる法界より流出することを明す。

一三 觀脫

（二）會して此法門を以て上の譬説に會合してと云ふ意なり。

（三）避部（イ）の字なり。これ勝生嚴の梵名なり。

四

れに由りて生じ、我れに依りて住すと。此の世間も亦虚空に於て、恩徳を念じて之を報いんことを求めず。此の念を作さず、此の空の力の故に、我れをして是の如くの安穩を得しむと。何を以ての故に、虚空は造作の行ありと見ざるが故に、報を念せざるなり。故に次に（三）會して、「此の清淨の法も亦是の如し、三有をして餘なくして、清淨にして生ず」と云ふは、合して云ふ、如上説く所の行も亦空に同じ、三有の障を除きて、餘あることなからしめ、能く清淨の法を生ず。謂はゆる法性清淨妙身の生なり。

次に「昔の勝生嚴は此れを修せしが故に、一切如來の行あることを得」と云ふは、更に古を引きて證とするなり。勝生とは先生を謂ふなり。先生とは先より是の法を覺る者を謂ふなり。若し此の法を覺れば、即ち無盡莊嚴なり。無盡莊嚴とは定慧神力妙嚴の藏なり。謂はく、過去の菩薩を勝生嚴と名く、此れ即ち佛子なり。即ち是れ先修行者なり、先生と言ふが如し。梵には（三）避部と云ふ、是れ久しからずして諸の財寶を満足す、法財を謂ふなり、即ち此の徳を以て身を嚴るなり。此の先覺の者、即ち會て是の如くの法を得たり、一切の諸佛も亦皆此の法を得たまへり。

次に「他句の有に非ず、得可きこと難し、世の遍明を作すこと世尊の如し」と云ふ

は、次の意に云はく、若し此れを離れて、更に餘の法句の中に於て、能く是の如く不思議法界の果を成すといはば、是の處あることなし。たとひ中に於て之を求むとも、亦得る理なし、水中に油を求むるに、是の處あることなきが如し。若し人能く此の自證を得ることは、他に非ず他に由らずして悟るの法なり。即ち能く世間を照明すること、日の之を照すが如し。亦佛出世の時、普く一切無明の世間の爲に、大明を作すが如し。

「極めて清淨なる修行の法を説きたまふ、深廣にして無盡なり、分別を離れたり」とは、佛此の極清淨の無分別離分別の甚深自證の法を説きたまふ。此の法は深廣にして思議す可からず、破壊す可からず、窮盡あることなし、即ち是れ法徳を歎ずる意なり。

（二）その時に毘盧遮那世尊、此の伽陀を説き已りて、金剛手等の一切の大衆を觀察して、執金剛に告げて言はく、善男子よ、各各に當に法界の神力（三）悉地流出の句を現すべし。若し衆生、是の如くの法を見れば、歡喜踊躍を發して、樂受の住を得べし」とは、佛の大衆を觀たまふこと、因縁なきに非ず、彼をして各各に説かしめんと欲するが爲

（二）此經は未會の文なり。
（三）已下に小亂脱ありたれども今は讀み易きやう改め置けり。

(二)前住心品を指す。

なり。神力とは亦是れ動用神變なり、此の神變は是れ廣の義なり、一より多を得、不思議法界自在神通の力より、悉地の句を流出するなり。此の流出をば名けて門とす、是れ梵音は多含なり、今此の中の意は流出を明す。謂はく、自證法界の佛心より流出する、無量の巧智の門なり。即ち是れ(三)前の如くの一一の菩薩金剛は、各是れ如來内證の徳、此れより現ずる法門なり。門とは法を傳へ衆生を攝する者ありて、彼の一類を引ききて、此の門より入りて、一切智智の地に到すなり。佛意は彼をして各々入實相の門を説かしむ。若し衆生ありて、彼の根性を種うる者は、當に喜悅を生じ、善根を發起して、即ち此の門より勝進の行を成して、如來安樂の行に住すべし。

(三)此際文も亦未會の經文なり。

(三)時に諸執金剛、毘盧遮那世尊の爲に禮を作すこと是の如し、法主教勅したまふ所に依るべし」とは、佛の所命に依りて、敢て違ふことあるにあらず。然れども如來は是れ法主なり、若し法主の前に於て各々に異説せば、則ち所應に非ず。是れ佛自ら説きて、一切をして聞かしめたまへと請ふなり。何を以ての故に、世尊、世尊の前に於て自ら説かば、是の如く通達する所の法に隨ひて、是れ宜しき所に非ず。此れは是れ廻文なり。

(二)これ亦未會の經文を譯す。

(二)時に諸の金剛、また佛に請ひて言はく、ただ願はくは世尊、我等を哀愍して、悉地を流出する句を示現したまへ。何を以ての故に、尊者薄伽梵の前に於て、通達する所の法を自ら宣示せんは、是れ宜しき所に非ず」とは、此の意は、云何か如來法王は尊勝無上にして、此の法の中に於て現前に通達し究うし、明かに見て餘あることなきを以ての故に、我等、佛の恩力に由りて、各々一門より、自の心量に隨ひて通達することを得たり。若し是の如くの大法主の前に於て、而も自ら稱説せば則ち所應に非ざるべし、此れは是れ慙愧謙退の意なり。是の如く陳ぶる意は、佛の自説を願ふなり。何を以ての故に、未來世の衆生の爲に、當に是の法に遇ひて大利益を得、佛知見を開きて、速かに如來安樂の行を成辨することを得べきが故に、是の如く説き已りぬ。

(三)此際文も亦未會の文なり。

(三)如來、金剛手等に告げて言はく、善哉、善哉、善男子よ、此の如來所説の法、毘奈耶の中に、一法を稱讚せり、謂はゆる有羞なり。若し有羞の善男子善女人、是の如くの法を見て速かに二事を生せん、謂はく、作す可からざる所を作さざると、衆に稱讚せらるるとなり」とは、佛の讚したまふ意は言はく、是の諸の善士は、所入の法門に於て、善く通達することを得と雖も、如來を仰敬し慙愧を生ずるを以ての故に、

からず。第二の法とは、戒を具するに由るが故に、常に人天の中に生ずることを得。此れは謂はく、未だ法身地を得ざる者、世生の生處に、常に人中天上にありて、障を離れ、佛を見、法を聞くことを得、此れ即ち大利なり。

二佛等釋尊等の如き生身佛が光を出し、即ち面門・白毫・頂相乃至下等一々の相の中に皆光を流す。此處に佛も亦然り。
三眞言 佛の心地無量法門の體なり。
四應度 まさに濟度すべきものを云ふ。

「善い哉、諦かに聽き善く之を思念せよ。我れ當に眞言の成就を流出する相應の句を宣説すべし」とは、此の善哉の中に二の仁者の義あり。謂はく、佛彼の賢善の徳を歎じて、而も戒めて之に告げて善く聽かしむるなり。流出とは、佛の光を出したまふが如きは、光に出處あり、謂はく面門・豪相・頂髻等の處なり。出して佛事を作すこと已に周竟し已りて、また還つて入る。此の流出の眞言も亦是の如し。當に知るべし、眞言の中より流出するなり、謂はく、悉地の果を流出するなりと。此の眞言はもと如來の自證の徳より、佛心地に於て出現して、無量の法門を作し、大いに佛事を作す。佛事を作し已りて、彼の應度の衆生をして、即ち此の門より佛法界に入しむ。故に流出と名く。

四此經文は未だ上の應度の衆生をして佛法界に入らしむる文を釋す

故に次に「此の流出する所の相應の句は、眞言門に菩提を修する諸の菩薩、速かに是の中に於て、當に眞言悉地の果を得べし」と言ふは、此の中の果とは、謂はく、

不思議一切智の果を得るなり。

二已下の經文に作成の徳を示す。その中の引文には三徳を明す。

次の初首に、「若し行者、漫荼羅を見て、尊に印可せられ、眞語を成就す」とは、此れより以下は、次第供養の法を明す。先づ漫荼羅を見ることを得、ただ見ることを得るのみに非ず、須らく師の爲に法を加して引入せらるべし、前の所説の如し。ただ入ることを得るのみに非ず、次第に修行すべし。法に隨ひて修行するが故に、阿闍梨の印可傳法を得。印可灌頂を得るが故に、次に眞言成就と云ふなり。

三世間持誦品上の世間成就品を指す。

復次に世間持誦品の中には、先づ圓明を觀す、中に還遠せる眞言字輪あり。念誦の時は、初の字より口中に入りて身中に流入す、猶は入息の如くして身分に周遍す。

三今の復次に世間持誦品以下の一段の文は、供養次第法用の大宗を明

此れは是れ如來の自在神力の加持したまふ所なり。是の如く念ずる者は、能く衆生は一切の業垢を除く。是の如く身に遍し已りて、また口より出でて尊の足下に入り、遍して本處に至る。是の如く一の字流入する時は、次の字を以て即ち相續し不斷にして、次第に連環するなり。若し初學の人、心散亂して是の如く成すこと能はざらんことを恐れば、當にただ種子の字を觀じて、前の如く之を作すべし。乃至心申習し已りて、漸く字を加へよ。此の一段を移して前の品の中に入るべし。

さんと欲ふが故に、上品の意を以て此釋をなす。或は此一段を悉く前品に屬する義もあり。故に古來より此一段亂脱を見る義と然らざる義と二義ありと知るべし。

(一) 經文には「能」の一字なし。
(二) 菩提心 作成就の人の二十種の徳の中第四なり。
(三) 深信等 この三徳は二十種の徳の中第五乃至第七の三徳なり。
(四) 調伏 二十種の徳の中第八の徳なり。調伏は戒なり。十善戒を持ち終に本性の尸羅に住することを得。
(五) 從縁 これ第九の徳なり。深く十縁生句の觀を修して、眞言行門の一切の所作は皆無自性なりと了知するを云ふ。

前に説くが如く、漫荼羅を見、又入ることを得已りて、諸の法事を作りし、乃至灌頂す。既に法を受くることを得て、法の如く修行して、善く眞言の中の次第法用を解して、明了にして疑ななければ、傳法に堪能にして、師の印可を得べし。經に尊と言ふは、即ち是れ師なり。

「又(一)能く(二)菩提心を發す」とは、謂はゆる、如來の自在の業を求め、普門を以て一切衆生を利益せんが爲の故に、此の行を行ふ、餘事の爲には非ざるなり。(三)深信・慈悲・慍慍あることなし」とは、謂はく、甚深廣大不思議の法に於て、決定正信にして、疑心あることなきなり。(四)又財法に於て心に慍慍なし。(五)大慈悲心を以て一切を哀愍し、常に利他の行を作して、自利を求めず。(六)調伏に住す」とは、謂はく、自ら六情の諸根を調ふ、此れ即ち性戒なり。「縁より生ずる所の法を能く善く分別す」とは、譬へば明鏡の現に衆色に對するに、明了に現前するが如し。是の如く等の法は鏡の中に先よりあるに由るにも非ず、色の外より來るに由るにも非ず、當に知るべし、二法和合して亦生ずること能はず、而も是の中に於て宛然として明了なり。執取す可からず、求得す可からず、而も亦有に非ず無に非ず、但し衆縁和合するによるが故に、見る可きこ

(二) 十喻 住心品に明す所の十縁生句を指す。即ち幻、陽炎、夢、影、乾闥婆城、響、水月、浮泡、虛空華、及び旋火輪これなり。論釋第三卷、一五二頁以下參照

(三) 禁戒 二十徳の中の第十徳なり

(四) 衆學 第十一徳なり

(五) 上中下等 蘇悉地經に廣く説けり。彼を披見すべし。

(六) 巧方便 第十二徳なり

とあるが如く、是の如く一切の法も、當に知るべし亦爾り。乃至(二)十喻みな能く通達すべし。是の如く觀じ已りて、眞言悉地の果に於て、亦是の如く之を觀す。此の悉地の相は、自ら持誦する者と、及び本尊と眞言と和合する因縁に由りて、則ち一切思議の事あり、法界の鏡像なり、取着す可からず、而も種種に成就せり。

(三)「禁戒を受持す」とは、即ち是れ持明の具戒なり。中に於て一一の法則みな善く受持すべし。是の因縁を以て三昧耶の法を犯さざれば、悉地成就を得るなり。「善く(四)衆學に住す」とは、即ち是れ眞言門の(五)上中下の法成就の相なり。一一の所應學の事、みな善く通達する、即ち是れ善く上中下の法の中に住するなり。「巧方便を具す」とは、即ち是れ如來の善權の用を體解するなり。眞言行を修する時の如きは、或は出家の二乗の法戒に於て違犯する所あれども。是の如くの迷執を生ずべからず。我れ此の事に由るが故に、是の戒を毀犯せり、當に惡趣に生ずべしと、心に惡作を懷きて、正修を防ぐ。何を以ての故に、如來のあらゆる方便は、唯だ是の如くの大事の因縁の爲なり。若し方便の諸乘の清淨戒を持せざるが爲の故に、眞言圓滿の行を妨ぐと云はば、此の理なし。是の故に行者もし犯すことあらん時には、當に是の念を生ずべし。

我れ今無上大乗を志求することは、普く一切有情を利せんがための故なり。事かねて遂げざるが故に、是の中に於て違犯する所あり。若し我れ果を逮得し成就し已りなば、當に悔過すべしと。此の善心は是れ犯戒の因縁に非ざるを以ての故に、犯戒と名けざるなり。

(二)勇猛 第十三
徳なり。此徳は先
に具縁品に於て、
諸徳を明す時、第
十三徳として勇
の菩提心を説け
り。當論釋第三卷
一九一頁參照。又
疏第四卷に弟子の
徳を明す所あり。
今は釋を此等の文
段にゆづるなり。
(三)時 第十四徳
を明す。
(三)好 第十五徳
なり。

(二)「勇猛」とは、義は前の師弟子の中に説けるが如し。(三)「時と非時とを知る」とは、眞言門の中の一一の次第法用、前を廻して後に着け、後を廻して前に着くことを得ざれ。先づ作すべき者をば先づ作し、後に作すべき者をば亦是の如くするを、即ち時と名く。乃至飲食睡眠種種の諸行に、各々時・非時の相あり。眞言行者の如きは、若し晝はかへつて睡眠して、通夜寝ねず。是の如く等の事は亦三昧耶に非ず、時に合ふに非ず。(三)「好みて惠捨を行ふ」とは、眞言行の菩薩は常に財法の施を以て、衆生を攝取して佛道に入らしむ。若し是の如く力に隨ひて作すこと能はざれば、即ち持明の戒を犯すなり。「心に怖畏なし」とは、若し衆生に在るに、諸の異解異見の衆生ありて、或は疑を斷じ、或は試みに深淺を問ふが故に、諮問する所あらん。その時に法に安住して、無畏の心・無取着の心を以て、問に隨ひて爲に説きて、正見の中に入ることを得

(二)眞言行 第十
七徳なり。これ精
進行なり。

(三)眞言 第十八
徳なり。

(三)坐禪 第十九
徳なり。
(四)作成就 第二
十徳なり。

しめて、心怯弱せざるなり。(二)「眞言行の法を勤修す」とは、修行門に於て終に中斷せず、停滯あることなし。若し中路に在りて倏ちに廢すれば、即ち精進の相に非ず、當に得べき者をば得ず、已に得たる者をば退失す、即ち道に於て碍あらしむ。是の故に行者一心に精進して、頭燃を救ふが如くせよ。精進して放逸せざるを以ての故に、乃至能く此の生に於て佛知見を得べし。何に況や諸餘の助道の法をや、爾らざれば三昧耶の法を犯す。(三)「眞言の實義に通達す」とは、上中下成就の中の甚深の意趣、一一の字の中の男女聲等を、所入の門より、乃ち成佛に至るまで、中に於て通塞の相善く分別して知る。爾る所以は、此の諸の眞言は、即ち是れ如來自證の徳なり。此れを以て法身を莊嚴して、諸の衆生をして、各々有縁の門より實相を見しむるが故に、若し一字に入る時は、即ち無量門の功德を具して、無二無別なり。「常に(三)坐禪を樂ひ、(四)作成就を樂ふ」とは、眞言門の中に於て、心の一境に住して散亂せざるなり。字を觀じ聲と本尊と種子とを觀するが如きは、隨ひて一事に於て、心、外縁せざれば、即ち能く大成就を得。若し心、散亂にあれば、たとひ無量劫の中を経て成就を欲求するとも、尙ほ不可得なり、何に況や一生に現に法利を得んや。

(二)以下、世尊、作成就の深き眞言、思議の法性を信ぜしめんが爲に、世間の喩を以て出世の法用を現はすなり。
 (三)如し、此二字、次下に引ける「亦自ら之を受用す」に續けて見るべし。
 (四)四大洲、須彌の四大洲なり。即ち南瞻部、東勝身、西牛貨、北俱盧の四洲なり。
 (五)隨洲、四大洲の側に各二洲を隨伴せり。よりて八中洲あり。一ニ遮木羅(猪牛)、二ニ袋羅(猪牛)、三ニ提提河(猪牛)、四ニ毗提河(猪牛)、五ニ舍提河(猪牛)、六ニ囉囉河(猪牛)、七ニ囉囉河(猪牛)、八ニ囉囉河(猪牛)なり。
 (六)初めより二、俱盧の隨洲なり。

(二)次に眞言成就の相を説く。或は疑ひて言ふものあらん、諸法實相無爲の法の中に、云何が是の如くの種種の事相あるかと。今彼を悟さんと欲するが故に、答へて言はく、此の事實に有り、疑を生ずべからずと。且く世事を取りて譬喩となす。「又秘密主、譬へば欲界に自在悦満意の明あり、乃至一切の欲處天子の(三)如し」とは、大乘の中に説くが如し。欲界に三十六處あり、謂はく、寒熱地獄に各八あり、共して十六となる。又(三)四大洲あり、此の四洲に又各二の(四)隨洲あり、合して十二洲、前に併せて二十八なり。及び六天、並に傍生と鬼となり、合して三十。此の自在天主、此の悦満意の明の力を以ての故に、種種の雜色の欲樂の具を現して、能く一時に於て此の三十六處に滿つ。又云はく「此れに於て迷醉して、衆妙の雜類を出し、乃至亦自ら之を受用す」とは、謂はゆる、一切の天子天女等の爲に、内外の有情無情の境を示現す。食味音樂等を現するが如きは、一一に現前し受用することを得可し。若し女色等の身を見しては、亦五欲自ら娛む可し、各々彼の心の欲する所に隨ひて、極妙の五欲の境に遇ふをもつての故に、心みな迷醉するなり。何に況や如來の眞言、普く色身を現し、佛事を作すこと能はざらんや。

(二)忙怛哩、七母、女天なり。第十卷、釋第三卷五七七頁、參照)

又善男子、摩醯首羅天王の如きは一の明あり、名けて勝意生明と曰ふ。此の眞言力を以ての故に、能く一時に於て大變化を作す、此の三千大千世界に遍して、現に一一の衆生の爲に、所愛樂の諸の利益の事を現じ、彼の受用に隨ひて皆實にして虚しからず。又淨居天の身及び彼の微妙受用の事を化す。經に説く所の如し。いかに況や如來の眞言力をや。且らく是の事を置く、世の幻者の尙は能く其の眞言を以て、種種の圖藥及び人畜等を示現するが如く、又阿修羅に自ら眞言ありて、能く其の身を化して帝釋に同じくし、三十三天の善法堂の上に坐して、一切の天をして皆疑懼を生せしむるが如く、又世人に眞言ありて、能く諸毒及び寒熱の衆患を攝むるが如し。又(三)忙怛哩天に自ら眞言あり、能く一切の人の爲に大疾疫を作し、乃至、世間に現に人ありて、眞言を以ての故に、火を變じて冷となし、水を變じて熱からしむることあり。いかに況や如來の自在神力を以て加持したまひたる眞言にして、法界に普周して大いに佛事を作さざらんや。是の故に當に信心を生じて、此の威徳力用、眞實にして虚しからざることを信すべきなり。彼の持誦者、未だ悉地を得ざるより以來、當に定めて此の事ありや、はた定めてなしやと心に疑ふべし。此の如くの不思議の果は、若し心量を以て

之を分別せんとせば、終に得る理なし、此の疑を除かんが爲に前の喩を説けり。然も此の眞言の威力は、眞言の中より出づるにもあらず、持誦者の處にあるにもあらず、亦彼の所加持者の身口に入るにもあらず、性相を推求するに了に不可得なれども、而も能く一切の事を作して、應に隨ひて曲成すとは、此れ即ち甚深の縁起なり。法性の衆縁に従ひて有なること、彼の水月鏡像の如くして不可思議の縁起なり。

「善男子よ、眞言加持力の故に、法爾にして生じて過越する所なし、三昧越えざるを以ての故に」とは、謂はゆる眞言の悉地は本よりこのかた成就せり。何を以ての故に、如來現に是の如く不思議の法を證したまふ。謂はゆる阿字の自體に本より以來、無量の自在力不思議力を具足せり、此の悉地の體は常住不變なり、但し行人自ら了知せざるに由るが故に、是の如くの果を得ざるなり。今此の行を以て其の身口意業を淨むるとき、若し能く法と相應すれば、即ち自ら成就す、諸法自爾にして終に虚しからず。此の不思議の果は衆縁の會する時、自ら當に生起すべし、大海の潮の終に時を失はざるが如し。又此の眞言は、自ら無始無終なり、若し始終あらば則ち窮盡あり、則ち是れ無常敗壞の法なり、云何ぞ如來自在力と名けんや。此の法體は三世を出過して

常に三世にあるを以て、是の故に三時の中に於て作す所の佛事、自然に常に休廢せず、期限を失はず。大海の水、若し白月の正しく圓なるときは、自然に鼓湧して期を失ふことなきが如し。

「甚深不思議縁生の理」とは、若し眞言の本體先より成就せずば、則ち感に隨ひて應じて期限を失はざること能はじ。若し眞言に是の力ありと雖も、而も行人の心行未だともに相應せずば、則ち亦彼をして加持顯現せしむること能はじ。然れども縁會するとき自ら成ずるが故に、彼れより來るにあらず、此れより去るにあらず、亦二處にも非ず、無性なれども而も能く縁會する時、亦悉地の果を成す、亦自然に之あるに非ずと知る。當に知るべし、即ち是れ甚深法界不思議の果は、縁より起りて常に自ら無性にして不可思議なりと。若し行人、修行すること斷たざるときは、必ず是れ極果、至理にかなふ。是の如くの至理は思量分別を以て能く了知す可からず、是れは前の喩を擧げて信を勸むるなり。

「是の故に善男子、不思議法性に隨順し通達して、眞言道を斷絶せざるべし」とは、此の眞言不思議の果は、既に分別して能く知るものにも非ず。亦力分に隨ふと有着行

(二) 膝文なり。但し經には善男子の次に「當」の一字あり、今はこれを略す。

(一) 喻 上の自在
 悦滿意等の喻なり
 (二) 不思議因 三
 密の因、即ち上の
 信力堅固を指す。
 (三) 不思議果 三
 身の果なり。即ち
 上の自然成佛を指
 す。
 (四) 譬文なり、但
 し經文には莊嚴清
 淨藏三昧とありて
 その下に「力」の字
 なし。
 (五) 已下の文は所持眞
 言の支分を明すな
 り。
 一、三、二、四、亂脫
 (五) 三世無礙力
 佛自証の智慧力な
 り。
 (六) 佛不思議力
 佛の化他の大總力
 なり。
 (七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (二十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (三十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (四十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (五十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (六十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (七十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (八十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十一) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十二) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十三) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十四) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十五) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十六) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十七) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十八) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (九十九) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。
 (一百) 此三昧 莊嚴
 清淨三昧を指す。

處と小對治行との而も能く取證するにも非ず。是の故にただ信力堅固なる者のみ、乃ち能く之に入る、故に先づ(一) 喻を擧げ、次に更に至理を明して、勸めて此の門に依りて、不思議の縁生の至理を觀じて、常に是の如くの不思議の法性に通達することを求めしむ。此の理に隨順して眞言の行を修して、間斷せしむることなければ、自然に成佛するなり。この眞言道は即ち是れ不可思議の法の生處なり。(二) 不思議の因に由るが故に、(三) 不思議の果を得るなり。
 (四) 「その時に世尊、また三世無礙力の依・如來加持不思議力の依・莊嚴清淨藏三昧力に住して」とは、(五) 三世無礙力を依とし、(六) 佛不思議力を依とす。これに二種の依あり。(七) この(七) 三昧は是れ不思議三世無礙加持力用の所依止の處なり。此の法體に依りて、能く如來不思議の業を成す、謂はゆる普く十方三世に遍して、并門を以て一切の衆生を利益して、皆畢竟して一切智智の地に住せしむ。此の如來不思議の依たる自證の法は、無量の定智の諸力を以て、自ら莊嚴し清淨ならしむるものなり、即ち是れ眞言の體なり。此れは是れ如來乘徳の藏なり、無盡の莊嚴缺減あることなく、具足し成就せる相なり。

(一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (二十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (三十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (四十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (五十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (六十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (七十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (八十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十一) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十二) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十三) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十四) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十五) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十六) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十七) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十八) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (九十九) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。
 (一百) 三摩鉢底 三
 昧なり、等至と譯
 す。

(一) 四大河 恒河、
 斯摩河、薄伽河、
 新都河を指す。
 (二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (二十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (三十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (四十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (五十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (六十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (七十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (八十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十一) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十二) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十三) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十四) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十五) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十六) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十七) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十八) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (九十九) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提
 (一百) 四字 阿耨多
 羅三藐三菩提。

「即時に世尊、(一) 三摩鉢底の中より、無盡界の無盡の語表を出して、法界力と無等力と正等覺の信解とに依りて、一音聲を以て四處に流出す」とは、謂はく、阿字より三字を出して(二) 四字を成す、此の四を合して(三) 一となして遍く一切處に布くなり、(四) 聲門より字を出して、また一切に遍するなり。普く一切法界に遍して、虚空と等しくして、至らざる所なし」とは、佛三昧に住したまふ時、この表業を生む。表とは標なり。この聲能く一切に遍す、謂はゆる諸佛の印成したまふ所なり。印とは即ち是れ標表の義なり、即ち是れ如來の語表なり。謂はく、如來信解の力(五) 解分に已に解す。によるなり。聲門とは聲を出す處を門と名く。この聲門は即ち是れ阿等の四字なり。この阿字よりして聲を出すを以ての故に門と名く。此の阿字は即ち是れ佛口なり、即ち是れ佛心なり、即ち是れ説者なり、即ち是れ聞者なり。法界に依る力と無等の力とは、而も平等の語表を生じ、無量の聲を出す。即ち是れ如來普門導利の語業の作用なり。如來の心より、この平等の妙音を出すを、分ちて四處とす。無熱大地より(六) 四大河を生じ、流注して竭くることなきが如く、この眞言の依處もまた是の如し。一の妙音を以て能く無盡法界を表し、展轉相生して窮已あることなし。此の四處とは、謂はく、(七) 四字、(八) 四德。

(二) 已下は第四頌の終りの「彼菩提心と第五頌の中」の句を初安住に至れば疑慮の意を生ぜず」の二句を釋す。

清閑の處を謂ふ。即ち是れ甚深禪定の窟なり、師子獸王も亦その中に住す。或は意の所樂の處とは、即ち是れ諸の法門に於て便宜の時に隨ひ、一一の門に隨ひて念を係けて行ず。謂はく六度なり、般若に説く所の如し、中に於て自意に隨ひて修するなり。

(一) 彼の菩提心を觀じて乃し初安住に至るまで、疑慮の意を生ぜず」とは、即ち心を以て自己の菩提心を觀するを謂ふ、此は是れ出世成就の正行なり。此れに住することを作して異縁あること無しとは、即ち是れ三昧なり、此の觀の中に於て常に自ら覺るが故に、一切の疑網漸く當に淨除すべし、乃至不疑の處に到りて、諸疑の生ぜざるは即ち是れ眞に菩提心に住するなり。その時に種種の相貌等あれども、疑慮を生ずること勿れ、即ち漸く眞實の如を見るなり。然も此の中に行ずる時に、略して二の地あり、一には非三摩呬多地、二には亦是れ三摩呬多地等引と譯すなり。未成就の時に於て、要す當に先づ成就の相あるべし、乃至成就せんと欲する時、亦成就せんと欲する相あり、此れ皆是れ非三摩呬多地なり。謂はく、初めて世間の成就を得る時、加持する所の藥物等に、皆不思議の力用あり、乃至能く佛刹に遊ぶ、是れ未成就の相なり。猶ほ此の現驗の不思議の事を得るに由るが故に、心に決定の信を得て更に増勝して等引地

に入ることを得。行者初めて出世間觀の方便を修する時、先づ本尊を觀せよ、畫像に依りて善觀し已りて、初めの時は目を閉ぢて明了なることを得、その後漸く眼を開きて亦見るに、顯現明了にして隱昧なることあることなし、此は是れ未等引なり。若し是の如くの事を得るを以ての故に、その心倍信樂を生ず、此の信に由るが故に、その心清淨にして、漸く當に取着せずして等心無二なるべし。此の無二も亦除こりて中邊差別の見あることなし、諸の心縁を除きて萬法平等なり、その時をば等至の相と名く。衆相の現ずる時、未だ成就せずと雖も、然も此れに由るが故に、能く漸く成ずることを得るを以ての故に、彼れを未等引地と爲すと云ふなり。私に謂はく、世間の未到地定の如し。

(一) 彼の一心を取るに隨ひて、心を以て心に置き、極淨の句を證して無垢なり。安んずること不動にして分別せざること鏡の如し、現前すること甚だ微細なり。若し彼れ常に觀察し修習して相應すれば、乃至本所尊と自身との像みな現る」とは、初めに本尊を觀するに、明了に現ずることを得已りなば、(三) 四字の中に於て、隨ひて其の一を取りて、本尊の心上に置き、此れは是れ經の中に心と相應すと云ふなり、謂はく、此の佛心の字を以て本尊の心上におくなり。心を取るとは佛心の字を取ると謂ふ、佛の心上に置くを與心と名く。 隨ひて一の眞言

(二) 已下は第五頌の後半二句及び第六頌第七頌の經文を釋して、これを釋す。

(三) 四字。我、我、我、我の四字なり

(二) 諸分別已下
は經文の妄執分別
を離ると云ふを釋
す。これ即ち住心
品に明す所の百六
十安心を超越する
義なり。

前に云へる三句は、菩提心を種子とし、大悲を根とし、方便を後とす、此の中には具
さに行法を説くなり。第二の句は、佛、心鏡の深き窟の中にいまし、乃至自形、本
尊となることを觀す。先づ本尊の心上に圓明の淨鏡あり、鏡の中に窟の狀あり、中に
本尊あり、即ち是れ眞に佛を見るなり。佛を見已りて、此の佛の心上にまた圓明の
圓淨なるあり。初めには此の極淨の心鏡甚だ微小なるを觀じ、後には漸く大にせよ。
面に對して宛然たるが故に現前と云ふ。淨きこと無比にして、中に種子の字あり、一
心に正しく此の種子の字を觀ぜよ、即ち是れ彼の字を誦するなり。此れより其の心を
見ることを得、又己身を見るに、本尊の體相の如くして佛心の中に在り。若し自の心
上の圓明を觀ずれば、亦是れ如來本尊、中にいます。是の如く展轉相現して、相妨礙
せず、平等清淨にして、諸の分別を離れたり、此れに劑りて、菩提の心を見ると名
く。初めの成佛の種子とす。此れを亦名けて一見一境とす、故に一落又と名く。此れ
は是れ出世の行の中の先承事の法なり。此の如く成する者は、是れ信地に入るなり。
更に菩提心の、次に攝意と云ふは、一より一十に至るも亦是の如く一なり、若しは一百
一千一萬等に至るも亦皆是れ一なり。多時に遍するを以ての故に、多時に至りて能く

自ら見るなり。梵音には即ち三摩呬多と云ふ、是れ等引の義なり、亦攝心一境の義に
も名く、即ち一心の義なり。

十一、亂脫十
(一) 以下は經文第
十一頌、第十二頌
を釋す。此の法則
を明す。先の第一
月は等引を修成し
て、今の第二月は
無作の供養を設け
るが故に、他の三
月が又他の三行な
り。又次に他の三
は自利、他の三は
功德に於て、執着
を離れ、所願悉く
成じて還つて自ら
に廻向するなり。
(二) 花嚴八十華
嚴經第二十五卷の
廻向品等の文を指
す。
(三) 他月とは、下
第三月の法を明す
なり。經の第十二
頌の下半を釋す。
(四) 兩月とは、他
月とを指す。正月
者、第三月に於て、
此の成就を作す。正
しく成就を作す。行
月の中に諸の利養
を捨て、十五日に
至るを滿月とす。

+ (一) 次に第二月に於て、塗香花等を奉りて、以て種種の衆生類を饒益することを作
せ、又また他月に於て諸の利養を捨棄せよ」とは、前の世間の行の中の如き、亦塗香
等の供養あり。此の中にまた説くことは、意前と殊異なり。此の中には已に等引を得
て、其の心清淨調柔なるを以て、事に隨ひて能く成す。一香を奉るに隨ひて、即ち能
く實の如く法界に遍滿して、普く一切衆生界に遍して、種種の利益を作す。事に隨ひ
て皆成ること、(二) 花嚴の廻向の中に廣く其の相を説けるが如し。香花の如きは、一切
の所作あるに隨ひて亦また是の如し。大いに佛事を作すことを成就せざることなし。
(三) 又他月とは、此の中に(四) 兩月の行ありて即ち初地に到る。更に問 諸の利養を棄捨す
とは、(五) 文を以て之を解す、即ち是れ(六) 八法の違順の事を捨つるなり。道を妨ぐる
が爲の故に。若し秘意を作さば、是れは此れ菩薩大いに善根を種うるを以て、此の報
盡く現れざることなくして、無量の法門・功德の寶を得。中に於て取着を生ずべから
ず。若し利養に取着することを生せば、則ち速に正位に入らず。故に須らく此の利養

これ入證の時なり。
十三、亂脫十一
途に準じて、文に
随つて釋するを云
ふ。

十六、亂脫十二
八法、住心品
に明す所の、違世
順世の八心を指
す。

十七、亂脫十三
十四、亂脫十三
十八、亂脫十四
十九、亂脫十四
二十、亂脫十四

二十一、亂脫十五
二十二、亂脫十五
二十三、亂脫十五

二十四、亂脫十六
二十五、亂脫十六
二十六、亂脫十六

を捨つべし。十五彼の時に行者また更に理の如く思惟すべし、即ち是れ菩提心より悲願を發すこと、理攝して起るが故に如理思惟と言ふなり。此の中の思惟の意は、謂はく、我れ當に是の如く理に應じて思惟して、自在を得んと謂ふべし。

十六時に彼れ瑜伽に於て思惟すること自在なり、一切無障にして諸の群生を安樂ならしめんと願ふ」とは、其即ち是れ決定の悲願を發すなり。云何が衆生同じく是の如くの覺性あれども、而も自ら了せずして大苦惱を受くるや。即ち大勇猛の心を生ず。要す當に無數の方便を以て之を成就し、必定して皆一切智地に到らしめ、彼の一切の垢障を除きて、餘あることなからしむべしと。

十七如來の稱讚したまふ所の圓果を成せんと樂欲す」とは、謂はく、如來無量の知見は、究竟して巧度の妙權を成就したまへり。若し此れを得ずば、云何が能く一大事の因縁を以て世に出てんや。是の如きは諸佛の稱歎したまふ所なり、彼の妙方便、我れ當に速に成すべし。

十八一切有情の衆の希願を満足し、理に應じて障蓋なく、而も是の攀緣を生ず」とは、是の如く障礙あることなく、是の如くの攀緣を以て、而も念誦すべし。其我が功

十九、亂脫十七
二十、亂脫十七
二十一、亂脫十七

二十二、亂脫十八
二十三、亂脫十八
二十四、亂脫十八

二十五、亂脫十九
二十六、亂脫十九
二十七、亂脫十九

徳力を以て、一切苦等の者を抜き、大悲の心を以て、一切衆生の希願する所を満すなり。彼の大苦を抜き、現樂を興ふること、亦能く成就す。何を以ての故に、行者の自心に垢障なきが故に、即ち大勢力ありて、又衆生の爲に、分に隨ひて障を除く。彼と我と障の因縁なきに由りて、即ち能く事に隨ひて成就す、此れ即ち普賢の行願なり。此の相云何、謂はく、是の如くの大悲の願を生ずるなり。

二十五、及び餘の無量の門、數數心に思惟して、廣大の悲願を發し、三種加持の句をもつて一切を想念して、心に眞言を持誦す」とは、此れ等の悲願に亦無量の種あり、初めの一月二月の持誦にも、亦是の如く願を發すと謂ふ可からず。但し初めの二月には

信解の心を以て作すに、然も未だ成ること能はず。第三月には所願皆成るが故に自他に廻向す。眞言行者若し意を得ん時は、事に随ひて作すこと是の如くせよ。頻りに大悲の水を以て其の心を洗ひ、漸く此の菩提心をして大勢力あらしめ、第十一地に至るより以來、漸漸に力用増長すること、皆此れに由りて圓滿するなり。初めの一月は菩提心なり、次の月は佛の形像を觀るを正覺の句と名く、第三は眞言に住して一切の相を離るるを、三月と名け、亦は三落又と名く。又廣大加持とは、謂はく、如來の加持神力は三句に由りて成ずることを得。今如來の事を行はんと欲するが故に、思ひて此の三句を想念するなり。

故に經に(一)我が功德力と、如來の加持力と、及び法界力と、衆生界に周遍せるを以て」とは、此の三句和合して廣大の加持力生ず。是の如く念じ已りて、此の句を誦念すべし、此の句は是れ一切の眞言心なり、三句の功德を取る。花等を取るに隨ひて心念を以て之を加持せよ。花には即ち花の眞言を以てし、香には香の眞言を以て之を加持するが如し。乃至一切の處に、苦を抜きて樂を與へ、佛に獻ずる等みな成ずる所なり。若し本眞言を用ひて之を加せざれば、(二)後の明妃を用ふるに亦成ず。(三)我が功

(二)已下經の第十
九頌の文を釋す
これ即ち三力加持
の義を明す文なり

(三)後の明妃以
下に説く所の虚空
藏明妃の眞言を指
す

(三)觀脱に依る。
本文は我功德力、
於衆生界、周遍
如來加持力等法
界也とあり

(二)經の第二十頌
を釋す

(二)虚空等力如
上の三力和合如
の行體、下の眞言
と相應する故に次
に虚空藏明妃の眞
言を説くなり。現
在の眞言の後に普
養の眞言の偈を誦
ず三力の偈を誦ず
るは即ち此意なり
(三)此の釋文は未
會の經文なり

徳力と如來の加持力と法界力とに等しきをもつて、衆生界に於て周遍す。

(一)よそ義利を念求し、皆悉く之を饒益す、彼の一切、理の如く念する所皆成就す」とは、理に住するに由るが故に、係念する所に隨ひて成ず、乃至苦を除けば、苦即ち除くる等なり。我が功德力を以ての故に、如來の加持力を以ての故に、法界平等の力を以ての故に、此の三縁合するを以ての故に、則ち能く不思議の業を成就す。此の如く作す者は當に知るべし、理に應ずるが故に當得如理と言ふ。

(三)虚空等力虚空藏明妃の眞言と相接次せり。(一)その時に如來また虚空等力虚空藏轉明妃の眞言を説きて曰はく」とは、虚空の破壊す可からず、一切能く勝つ者なきが如くなるが故に、虚空に等しき力と名く。又藏とは、人の大寶藏ありて所欲の者に施すに、自在に之を取りて貧乏を受けざるが如く、如來虚空の藏も亦また是の如し。一切の利樂衆生の事、みな中より出し、無量の法寶を自在に受用せしむるに、窮竭の相なきを虚空藏と名く。轉順明とは、轉順は能生の義なり、此の藏能く一切の佛事を生ずればなり。前に發す所の悲願の如し。謂はく、一花を以て供養する時の如きは、運心して一切の佛及び凡聖に遍じ、みな供養し已りて、即ち一切智智に廻向して、およそ

金剛の界を作すに由るが故に、諸の障者をして悉く皆迷惑し、敢て燒ます者無からしむ。既に障を離るゝことを得れば、則ち所成の藥物成就することを得。

(二) 已下に經の三頌半を釋す。正しく曼荼羅の相を明すなり。

(一) 經に「四方相ひ周匝せよ」と云ふは、此れに二義あり、謂はく、壇は正しく四方に作り、又金剛印も亦四方に作れ、亦正しく四方の面に當るなり。「一門及び通道あり、金剛互に連屬し、金剛結相應す」と云ふは、金剛結とは上の如く周匝して金剛をおき、みな股々相連ぬるは即ち是れ金剛結の義なり。一門並に縁をおく。縁とは即ち上一路の空處を開きて、「相應」とは、此の門、事に隨ひて相應するを謂ふ。上成就の門は東に向ひ、中成は北及び西に向ひ、下成の門は南に向ふなり。其の界の金剛互に連屬す、亦是れ金剛の義なり。「門門に二の守護あり、不可越と相向となり、乃至朱目にして奮怒形なり」とは、作成就の物の爲に最も守護をなす、此の守護門を以て要とす。即ち是れ(三)上に説く所の(三)威光難視と及び相向との守門者なり。一一の相を印とす。印は(四)下に在りて説く。二俱に赤白にして、極忿怒の形に作れ。隅角に輪羅焰光の印を慇懃に畫け」とは、即ち是れ獨股金剛なり。たゞし角處あれば皆之を置け、光焰あり。「中に妙金剛の座あり、方位正しく相直れり、其の上の大蓮華は八葉鬚髮敷けたり」とは、漫

(一) 上 普通眞言藏品の文を指す。(二) 威光難視 不可越の異名なり。(三) 下 畫印品を指す。

茶羅の最中に於て、十字の羯磨金剛座を置け、正しく四方ならしめよ。正しく四方の面に當りて之を作せ 彼の上に於て大蓮を作せ、八葉並に葉あり。金剛の上に在りて作れ 此れは即ち是れ金剛座なり、故に金剛同と言ふ。

(二) 以下經文一頌半を釋す。此れ壇處を護持し成就を淨むる法を明す。
一、六、二、亂脫一
四、三、亂脫二
五、亂脫三
六、亂脫四

(一) 當に金剛手金剛の慧印を結ぶべし」とは、當に即ち是れ金剛手の金剛五股の印を結ぶべし、故に金剛三昧慧の金剛印と云ふなり。「一切佛に稽首す」と云ふは、「彼の處に隨ひて藥物を作護し、作淨するなり。當に禮を作さん時は、上に説く所の如くすべし。廣大の悲願を以てすべし。三數々に堅く誓願して」とは、謂はく、自ら誓ひて心を選びて、弘く普く誓ひて己が爲にせず。乃ち一切衆生の爲の故に此の藥物を成す。願はくは加持力をもて、速に成就せしめたまへ、此れ成るを以ての故に、能く一切衆生を利せんとなり。「應に是の處を護持し、及び諸の藥物を淨むべし」とは、然も具さに多法あり、廣本には之あり。凡そ藥を取らん時は、須らく法用の次第を解すべし。求めて自ら探るに亦方軌あり、乃至作護作淨にみな次第法用及び洗等あり、此の中には未だ具せず、當に更に問ふべし。或は蘇悉地等通用す可し。

(二) 此の(三)夜に於て持誦すれば、清淨にして障礙なし」とは、「下中上の成相あり。

二、四、亂脫二

六、五、七、亂脫三

(一)一より一佛國より一佛國に至るを云ふ。

九、十二、亂脫四

(三)これ飛行自在の義を明す。

(三)金剛印 五股の印なり。

(四)護 加持の義なり。

(五)先成就仙 眞言已成就の諸徳なり。

(六)所生 有縁の處なり。
(七)これ運心を以て布施するを云ふ

四〇

二若し障なく成就を得る者は、上成ならば三の相轉することあり、謂はく、初夜には煖生じ、中夜には烟起り、五更には燄出づ。中成ならば二相あり、謂はく、燄出づるを除く。下成ならば一相あり、たゞ煖生ずるのみ。轉とは、少より多を得、煖より焰を得る等を謂ふ。六既に成すことを得已らば、眞言者自ら取り、大空に遊歩し」とは、七或は食し塗り點ずる等を以て、自在を得て諸佛の刹に遊ぶこと、二より一に至る。「壽に住して大威徳あり」とは、便ち具壽無量劫數にして、威光自在なることを得るなり。「生死に於て自在なり」とは、即ち生死に於て種々に自在なるが故に、是れを眞の佛子と名く、三世界の上を行くとは即ち是れ三物成じ已りて、(三)金剛印を以て自身を(四)護し、本尊を護し、物を護して、まさに之を取りて五分となせ、師と及び(五)先成就仙と、助伴と己身と及び佛となり。その物をば彼の所生に隨ひて、三寶の處に於て用ひよ。先成の物をば、若し仙來りて取ることあらば、當に之を與ふべし、來り取らずば、分ちて二分となし、一をば伴に與へ、一をば自ら取れ。師の物をば、若し師他方に在らば、當に之を掌りて來らんを待ちて之を與ふべし、若し師在らずば、彼の(七)所生に縁りて爲に功徳を作せ。刀等の分つべからざるをば、(七)亦心を標して分劑をな

(二)金剛 五股金剛印なり。

八、亂脫五

十一、十、亂脫六

十三、亂脫七了。

(三)此の如く上に陳べたるが如き藥等煖等の相ある地出現の相なり、但しこれ有相の事なる故に有分別と云ふなり。

(三)無染 義釋には無漏に作る。

(四)以下は建立道場及び藥物等の深旨を述ぶ。今際の方便波羅蜜多の多の字は經本には無し。

せ。初より末に至るまで、みな(二)金剛を用ひて、自ら護し物を護し、乃至取るなり。一世界の頂を行き、種々の色身を現す」と言ふは、謂はく、諸の衆生の爲に大佛事を作すなり。二其の藥を供養するに亦方法あり、謂はく、獻するなり。三經に「具徳吉祥者、展轉して供養せよ」と云ふは、成就を得已りて、持ちて十方に至り、意に隨ひて十方の佛に獻せよとなり。諸佛と及び阿闍梨と助伴とに、各分數の方法あり、當に更に之を問ふべし。三眞言の所成の物、是れを名けて悉地とす」とは、若し(三)此の如くの成就を得る者をば、是れを有分別の成就と名く。此の藥物等の事、猶ほ是れ成相の法なるを以ての故に、有分別成就と名くるなり。「分別の藥物を以て、無分別を成就す」とは、有分別に因りて無分別の成就を得るなり。此れ能く分別を以て因とす。此の有分別に依りて、無分別の果を得とは、無爲無相不思議(三)無染の果は、因成に非すと雖も、有分別を因として、然も此の無得無爲の果を成す。

(四)秘密主、一切世界の諸の現在等の如來應正等覺は、方便波羅蜜多を通過したまへり、彼の如來、一切の分別は本性空なりと知りて、方便波羅蜜多の力を以ての故に、無爲に於て有爲を以て表として、展轉相應して、衆生の爲に示現して法界に遍す」と

一、三、亂脫一

二、亂脫二

三、亂脫三

一、三、亂脫一

五、亂脫二

四、二、亂脫三

四二

は二、三謂はく、無爲の果なれども、有爲の方便を以て能く此の事を成ず、不可思議なり。二現在未來過去三世の佛、皆方便波羅蜜を通過したまふを以ての故に、此の法門を説く、三世の佛を擧ぐることは、同じく此れを以て入ることを明さんと欲ふなり。

■また此の有爲の方便を説くと雖も、然も即ち此の分別の法は本性常に空なりと了せり。是の如くの因縁起の法は、生滅斷常一異去來を離れたり。但し幻化の如くして中道に異ならず、若し此れを捨離して無爲の別體を求むれば、不可得なり、無爲の性は即ち有爲に異ならざるを以てなり。是の如くの甚深縁起の法を了達するが故に、能く此の有爲を以て、即ち無爲の果を成す。是の故に一切三世の如來は、方便力を以ての故に、法界を證すと雖も、而も能く此の無爲無作の本體の果より、有爲を以て諸の眷屬を作したまふ。大日如來の如きは、此の自證の德に於て、加持力を以ての故に。

■「無爲に於て有爲を以て表とす」とは、本性は所爲なけれども、所爲あるに因りて能く無爲を成す。■「展轉相應」とは、未だ持誦せざる時は、性本より不淨なり、持誦に由るが故に、便ち清淨なることを得て、能く衆生を度す。則ち不淨の身を現して、また他の爲に清淨の因縁を作すを、展轉相應と名く。■道つて無爲より有爲を生じて表

六、亂脫四

(一)法を見正等
覺心悉地の法を證
得するを云ふ。而
して行者此の悉地
の法を以て自ら娛
樂するが故に安樂
行に住すと云ふ。
(二)歡喜行者初
めて初歡喜地を證
得するなり。
(三)方便慧の方
便なり。
(四)以下深秘釋な
り。前の長壽五欲

とす。■故に十世界微塵の金剛菩薩を現して、一一に眞言門を以て衆生を引接して、皆無爲の果に至ることを得しめたまふ是れなり。■此の方便を以て法界に遍じて、普く一切衆生に應じて義利を得しむ。

■「法を見、安樂に住し、歡喜の心を發すことを得しむ、或は長壽を得、五欲に感戴して自ら娛樂し、佛世尊の爲に供養を作す、是の如くの句を證すること、一切世人の信ずること能はざる所なり、如來は此の義利を見たまふが故に、歡喜の心を以て、此の菩薩の眞言行道の次第法則を説く」とは、謂く、諸の如來方便を以ての故に、無爲界より加持力を以て衆生を捨てず、衆生に隨ひて衆行を修することを示現して、或は

(一)法を見、安樂行に住して、(二)歡喜の心を發さしむ。即ち法喜は初地なり。或は長壽を得とは、謂はく、無數劫に恒に佛の興り玉ふを視ることを得るなり。或は淨好の五欲を得て而も自ら娛樂し、又能く一切如來に供養す。此の事は(三)方便なき者は信ずること能はず。彼れ是の念を作さん、眞言の體は即ち法界に同じく、無爲無作なり、云何が能く是の事を成さん、若し是の事を生せば即ち是れ有相の分別なり、云何が理に應ぜんやと、是の故に毀を生ず。ツレリ■此の中に佛には祕密ありて解し難しと言ふは、是れ方便なき者

等は皆初地以上の
得益なり。隠語に
約して秘説を爲す
世間成就有相の悉
地には非ず。

(二) 利義 文字顯
倒す義利の意なり

(三) 餘菩薩 總じ
て顯乘の菩薩を指
す。若し別して云
は、權門の菩薩な
り。

(三) 十喻 住心品
に明す如し。論釋
第三卷百五十頁以
下參照。

(一) 以下は所成就
物を明す。
(二) 計都 幢の梵
名なり。
(三) 羯伽 刀なり
(四) 眞陀摩尼 如
意寶珠なり。
(五) 盧遮那 牛黃
なり。

(六) 此所成就物三
部に、通ずるが故
に佛部ならば中央
八葉花臺の中央に
大日如來を置き、
命剛部又は蓮華部
ならば即ち大日如
來を方隅に移し置
きて、その部の主
を中央に置くなり
(七) 幢 以下は經
文の計都を明す。
(八) 層形 仰月の
形なり。
(九) 跋折羅 金剛
杵なり。
(一〇) 刀 經の羯伽
を明す。
(一一) 傘 經の傘蓋
を明す。

を説くなり、故に解了すること能はず。然も此の中には、心自在なるを以て、説きて長壽とす、此の如くの壽量は即ち是れ如來法壽の命なり。五欲とは、四無量と及び菩提心とを謂ふ、一切の聖人は、此の現法を以て自ら娛樂す。如來を供養すとは、即ち是れ眞法を以て法身の佛を供養するなり。若し行者、佛の方便の甚深の縁生に依りて、世法の成就を得るとき、即ち此の中に於て本性空を觀ずるは、即ち是れ無爲の成就なり。是の如くの不思議の法は、凡夫は自ら信ずること能はざるのみ。然も諸佛如來及び菩薩等、此の(二)利義を見るが故に、此の眞言行の次第の道を説きたまふ、誘りて無しとす可からず。

「何を以ての故に、無量劫に於て、勤求して諸の苦行を修すれども、得ること能はざる所なり、而も眞言門に道を行ふ諸菩薩は、即ち此の生に於て獲得す」とは(三)餘の菩薩の如きは、無上道を求めんが爲の故に、難行苦行して頭燃をはらふが如くして、無量劫を経れども、なほ此の如くの成就を得ること能はず、此の眞言行者は若し方便を具すれば、一生に成就す可し。甚深緣起の(三)十喻の義を知るを以ての故に、眞言等を以て種々の成就を作さんと願へども、而も取着することなく、是の如くの法に異なら

ざるが故に、微妙速疾なり。

(一) 復次に秘密主、眞言門に菩薩の行を修する菩薩は、是の如くの(三)計都と(三)羯伽と傘蓋と、履履と(四)眞陀摩尼と及び安膳那藥と、(五)盧遮那等とを、三落又持して成就を作し、亦悉地を得」とは、次に所成の藥物を明す。謂はく、上の如く且く先づ一落又し、次の二月に持誦し已りて漫荼羅を作し、中に於て此の所成物を置きて念誦を作せ、更に三落又して方に成る。此の漫荼羅の神位等は、即ち大悲胎藏と同じきが故に、此の中には之を説かず。(六)但し成さんと欲する所の物を以て中に置き、大日如來を以て方隅に置き、(七)更に問(七)幢は竹を以て莖とし、淨壘を以て纏ひて、更に懸け垂る(八)こと一文以來なり、幡の狀の如くして、上に(八)層形を作り、其の上に(九)跋折羅をおく、(一〇)然るに刀は鏤を以て作り、骨を以て柄にせよ。(一一)傘は上中下の成あり、謂はく、金と銀と孔雀となり。(一二)鳥履は皮を以て作れ、先づ種々に薰洗し、極めて淨くして氣なからしめ、更に藥を以て之を治し、乃至火も焼くこと能はず、又極めて香しくして方に用にあてよ。(一三)如意は淨好の寶を取りて、之を幢の上に置き。(一四)眼藥は安膳那を用ひて作れ。此の膳那に二種あり、一には極めて軽く水に逆ひて上る、(一五)更に問

(一)鳥履 經の履
(二)如意 經の眞
(三)眼藥 經の安
(四)牛黃 經の虛
(五)蘇悉地 蘇悉
地經に金剛杵等
無量の成就物を説
けるを云ふ
(六)或は等 此れ
他人を加持して以
て驅使とするを明
す

(七)經に 以下は
作成就の人の徳を
明す

(一)牛黃ゴウワウとは更に無量の藥あり、空青と朱沙シュシャと雄と雌との黃等を謂ふ、みな成就す可し。又金剛杵等の無量の物亦成就す可し、大本に具さに方軌を説けり。(二)蘇悉地に亦次第あり。もし履鳥を成ずることを得ば、即ち之に乗りて佛刹に遊ぶこと無礙なる可し。眼藥等成就せん者は、即ち十方の佛刹を見、能く十方の佛刹に騰遊トウユす、餘は解しつ可し。又鳥獸の種々の形を畫作することあり、隨ひて其の一を取りて作法成じぬれば、即ち御して十方の刹に往くに堪へて自在なり。(三)或は法を以て童男女を加して、亦彼をして成就せしめ、以て供侍となし、即ち十方の刹に遊ぶ。西方に一人の成せるありて、五百人を引きて空に昇り去りて、去る所を知らず。此の法成就せるは即ち是れ持明仙なり。此の物は心の欲する所に隨ひて之を作れ。彼の持誦の時、境界を得て是の如く是の如くの物を作らしむ、或は運心して此の物を作る可し、亦成ずることを得。

(四)經に云はく、「秘密主、若し方便を具せる善男子善女人、樂ひ求むる所に隨ひて所作あれば、彼れ唯だ心自在にして成就を得」とは、世人は信ずること能はざる所を、彼の人は之を得。謂はく、信ず可きこと能はざる希奇の事をば、成就を作す人は皆能

(一)靈 しばらく
と云ふ義なり。古
ひは暫に通じて用
ひしなり

(二)上來は藥力の
成就を明せしが已
下は藥力の成就、
因縁を離れて法爾
自然なる義を明す

(三)自在喜 自在
天が喜悅するが故
に悉地を與ふと計
す。これ等は外道
の見なり

く之を得るなり。是の故に善男女方便を具すれば、欲求の物、但し自心自在にして、是の如く成就を得と云ふなり。彼れ自心自在にして唯だ是の如く成就と言ふは、意の欲する所に隨ひて、唯心の轉ずる所即ち成就するを謂ふ。唯とは唯だ自心のみを用ひて、餘縁に籍らざるを謂ふ。唯とは亦是れ(一)靈の義なり、纔に心に念を作せば、即ち成就するなり。

(二)「秘密主、諸を因果を樂欲する者は、秘密主、彼の愚夫の眞言と諸の眞言の相とを能く知る所に非ず」とは、若し人此の眞言行の中に於て、是の如くの念を作す、我れ今是の如くの因を行ひて、當に是の如くの果を得べしといはば、當に知るべし、此の如きは正説に非ず、唯だ是れ愚夫の虚妄の計なりと。何を以ての故に、諸の外道ありて説かく、一切の法は我より生ずと、若し是の如くば(三)自在喜ぶが故に即ち與へ、喜ばざるが故に與へずといはん、是の如く等の人は此の道を解すること能はず。則ち是れ萬物は皆因より生ずるなるべし、若し因より生せば、此の因は自性ありや、若し自性あらば則ち常見に墮せん。常法云何ぞ能く生ぜん、若し因滅して果生せば、則ち斷滅の法なり、云何ぞ能く生ぜんや。

經に、「因は作者に非ずと説けば、彼の果も則ち不生なり」と云ふは、いふ意は、因を明せば因は空なり、因既に空なり、何ぞ果あらんや。故に中論・智度の中に廣く破せり。當に知るべし、此の因は智を以て觀察するに、尙はその原を得ず、此の因は依なし、依なきは即ち是れ本來不生なり、本來不生の因何を能く果を生ぜん。故に知る、彼の果は本不生なりと。

經に、「此の因は因すら尙は空なり、云何が果あらんや」と云ふは、謂はく、因は實有に非ず、因既に眞實に非らざれば、終に實果を生ずること能はず、當に知るべし、果は本不生なりといふことを明す。又また是の因は本性空寂なり、當に知るべし、果の相も亦また是の如しと。若し是の縁起の法の中に於て、因ありと言はば、即ち是れ遍計所執なり、斷常一異に墮して中道に入らず、是の故に是の如くの眞言は、永く因業を離るるが故に、即ち是れ法界なりと證知す。不思議界なり

經に「當に知るべし、眞言の果は悉く因業を離れたり」と云ふは、則ち因は是れ有所作の法なり、因既に所作あり、當に知るべし、果も亦所作あるべしと、既に所作あらば、何ぞ能く眞實を成さん、當に知るべし、果は因業を離ると云ふことを明す。

經に「乃至身、無相三摩地を證觸す」と云ふは、言はく、此の因果等の相は、妄想の故に有り、正しく之を觀察するに、本より所住なし、無住の故に果體不生にして、即ち無爲に同じ。是の故に行者若し是の念を作して、我れ眞言を誦じ、眞言行を修して、當に果を成ずことを得べしといはば、徒らに自ら欺くのみ。若し此の眞言は縁より起ると雖も、實には無作なり、本より以來も是れ法界にして、無生無滅非淨非染なり、法體是の如し、云何が成を得んや。

經に「眞言者當に悉地は心より生ずることを得べし」と云ふは、當に知るべし、眞言行者、但し方便を以て自ら其の心を淨むるに、若し三業清淨なるときは、當に是の中に於て自ら明了なることを得て、而して自ら覺悟すべし。譬へば人ありて、夢中に種種の六度を修行して、佛國を淨む、覺めて見れば則ち成果の相なきが如し。但し是れ一念の無明の心中に、因果の萬行あるのみ。又暗室の中に寶藏あるが如きは、若し方便を以て火明燈を燃すときは、因縁の生滅は推するに不可得にして、本より空に同じと雖も、然れども亦明法任運に起れば、明の因縁を以て則ち寶藏を見る、此の寶藏は方便に因りて生ずるに非ず。眞言行を修することは、もと惑業を除遣して、當に法

哉、能く如來に是の如くの義を問へり」とは、即ち重ねて執金剛秘密主を歎じたまふことを明す。能く未來の修真言行者を哀愍するが爲の故に、此の如くの問を發すとすなり。「汝當に諦かに聽き、善く之を思念すべし、吾れ今演說せん」とは、此の意は都て會衆に語りて言たまはく、汝當に諦かに聽きて、善く思ひ之を念すべし、吾れ汝がために是の如くの事を説かんとすなり。「秘密主言さく、是の如し、世尊、願はくは聞かんと欲す」とは、如來は慈悲遍滿したまへり、斯の問を印順して、爲に解説したまへと云ふことを重ねて明す。

「佛、秘密主に告げたまはく、阿字門を以て成就を作せ」とは、即ち是れ正等覺の句の中に於て、成就の法を作すなり。「若しは僧の住する所の處に在り、若しは山窟の中、或は淨室に於てせよ」とは、隨意に欲し樂ふ所の處と及び秘釋とは、(一)上に已に之を出せるが如し。阿字を以て遍く一切支分に布き、三落又を持つ」とは、謂はく、心を以て此の阿字を布くなり、頂及び眼耳等より、乃至(二)内外の身分に遍するなり。又此の字を誦すること三落又すれば、即ち成る。又(三)彼の説に云はく、本尊と種子と及び圓明とを三とすと。字は圓明の中にあり、圓は本尊の心上にあり、一を觀じて成

(一)上上の具緣品及び世間成就品等を指す。

(二)内外内とは身内、外とは身外なり、本尊を指すか。

(三)彼説上の三月持師の釋を指す

一、三二、亂脫一

四、亂脫二

(一)此字 孔字を指す。

る時は、三皆自ら成る、一此の三境を緣するが故に三落又と名く。落又は是れ見の義なり、(二)此の三落又を誦し已りて、白月の十五日に至るを滿月とす、(三)文に依りて三落又を誦じ竟れ、次に滿月に於て、其の所有を盡して以て供養すべし」とは、此れは謂はく、白月十五日に成就の漫荼羅を作すなり。此の法を作す時、其の所有を盡して三寶に供養して、成就の法を作すべし。成就の法を作す時、亦(一)此の字を誦せよ。

秘説は前の如く知る可し

此の法を作さん時「乃至普賢菩薩・文殊師利菩薩・執金剛等、或は餘の聖天現前し、摩頂して唱へて言はく、善い哉行者」とは、此を解して言はく、或は餘の諸金剛とは、此れ定准す可からず、一尊來ることあるに隨ひて、成就を爲すなり。然も見る時に亦上中下の相あり、若し親しく見ること分明にして、目に對すると異なきを上成とす、若しただ聲現前して、示教利喜するを聞くを中成とす、若し夢に見る等を下成とす。又見る時明昧等の殊あれば、即ち有障無障等を知るなり。秘説は心を以て得可し。是の如く本尊等、現前して加被したまふ時、即ちまさに稽首し作禮して、闍伽水を奉るべし、此れ即ち香花の水なり、加ふるに五寶穀等を以てす、(二)上に之を説けるが如し。「即時に菩

(三)上 具緣品を指す。

れども阿訶の二字を以て今能くこれを代するなり。
一、亂脱二
三、亂脱三
四、亂脱四
五、亂脱五
六、亂脱六
七、亂脱七
八、亂脱八
九、亂脱九
十、亂脱十
十一、亂脱十一
十二、亂脱十二
十三、亂脱十三
十四、亂脱十四
十五、亂脱十五
十六、亂脱十六
十七、亂脱十七
十八、亂脱十八
十九、亂脱十九
二十、亂脱二十

此句は下の五十九頁第一行の五に入れて見るべし
一、亂脱
二、亂脱

(一) 佛又「金剛手に告げたまはく、諸の如來の意より生じて、業戲の行舞を作すとあり」とは、佛の心業より生じて、種種の戲行を作し、種種の戲舞の類の相を現じたまふ。即ち是れ普現色身、類に隨ひて六道の形等を作すなり。舞とは種種の神變幻作の事を謂ふ、事に隨ひて示現して、其類衆多なり、備さに言ふ可からず。三、四界を攝持す」とは地水火風界を謂ふ。此の身の内外の依正を現すと雖も、然れども此は是れ「心王を安住して虚空に同じ」、虚空は常に不動にして、一切を包容す。故に唯だ佛の心業より生じて心に隨ひて有なり、體は空に同じくして取る可からず。「見」とは種種の舞戲の相を謂ふ。「非見」とは涅槃の理を謂ふ。又見とは世間の果を謂ひ、非見とは菩提の果を謂ふ、此の類無量なり、故に廣大と云ふ。亦見とは三乗の修行の種種の法門、彼れの願ふ所に隨ひて満足せしむ。即ち是れ能く種種の可見・不可見の事を現するなり。乃至禪定智慧の法門衆多の實を願求するにも、亦類に隨ひて示現して之を賜與したまふ。猶ほ如意寶王の心の求むる所に隨ひて、一切施與するが如し。+ (三) 等引神通等をも起らしむ、三摩咽多は是れ等引の義なり。等引神通等をも起らしむ。三時に毘盧遮那佛、一切の大衆會を觀じ已りて、金剛手秘密主に告げて言はく「已に上に解せ。金剛手行舞して、一切成壞の果の廣大なるを作し、

亂脱五

亂脱六

亂脱七

亂脱八

亂脱一 以下は上と別の亂脱なり。

親り一切を與ふとは、舞は是れ戲なり。また普現色身、類に隨ひて曲成して、種種の應を作す。此れ眞實に非ず、但し幻の如きのみ。是の故に名けて如來の儂とす。猶ほ舞ふ者能く衆人の心を悅可し、種種の意解不同なりと雖も、皆心を悅ばしむるが如く、佛も亦是の如し。八、然も四界の色の所作に非ず、佛の心意に隨ひて生ず。心より生じ心より滅す、常法なりと雖も、能く縁に隨ひて生滅す。此れ與廢は縁に隨ふ、故に生滅の果と云ふ、即ち成壞を謂ふ。此の迹法界に遍して廣大無邊なり、故に廣大と云ふ。作し已りて遂に滅す、故に成壞と云ふ。廣大成壞とは、此の成は即ち是れ變轉の義なり。故壞とは然も此の成壞は即ち是れ如來の妙應なり。佛と法界と機感とよりして生ず、生ずと雖も不生なり、滅すと雖も不滅なり、即ち幻に同じくして法界に異ならざる故なり。猶ほ所作不實なり、故に名けて舞とす。三世の諸佛皆此の舞を作したまふ。親り一切を與ふとは、我れ親り先佛に於て此の法を授得す、今また親り汝に授く、故に一切親與と言ふ。親と言ふは、親り能く現前に一切願ふ所の果を授與するを謂ふ、此の義正しきなり。

先づ眞實の相を作せ」と言ふは、上に觀する所の種子眞言及び本尊の如きは、本

一、亂脱二
經の現文には「行者次第の如く」とあり。

三、亂脱三
此條文未會の文なり。

四、亂脱四
四角金剛に標を以て四方に横へて標の形に違るを云ふ。而して此四角金剛の中には阿字を安ずるなり。

尊を觀見するに由りて、見已れば即ち自身を轉じて本尊と作す。展轉相即して相妨礙せず。即ち是れ金剛の果・菩提の心を見る、故に先づ眞實の相を作せと名く。一、二、是の如く次第に住し」とは、前に住して觀ずる所の者に、心善に依りて住するを謂ふ。先に已に實相を見已りぬれば阿字なり。經に「先の如く正しく思念す」と云ふは、上の文に説く所の思惟の法の如くして念持するを謂ふ。

三、阿字を自己に作し、並に點を作して廣せよ、一切黃にして極悅意なり、四角金剛の標の中、諸佛の一切處光の字を思念し持誦せよ、此れ等の一切佛、自の當相を説く」とは、謂はく、阿字を觀じて深黃色に作さしむ、その色相端正嚴好にして、人をして悅意せしむ。自己の心に在け。又此の字を經に「並に點を廣くせよ」と云ふは、即ち是れ字の上に點を加ふる義なり、増加は即ち是れ廣なり。字の外に於て四角金剛標を作れ、此の欄三股金剛に同じく、股更互に相又へて之を作れ。中に於て字を置け、此の阿字を見已りて、即ち此の字を轉じて、毗盧遮那本尊の形と作せ、即ち是れ自身現に本尊の像に同なり、その像もつばら本印に依りて作す。此の佛の通身に光あり、此れ即ち菩提心の中に、見る所の實相の佛なり、猶ほ淨瑠璃の中に、内に眞金

の像を見るが如し、餘の心數の中の妄想に同するに非ず。當に知るべし、是の如く見る者は、即ち是れ心の實相の佛を見るなりと。此の成就を作す者、若し疑慮なければ、即ち能く普く一切衆生の爲に大饒益を作す。

二、經に「廣大の希有を具す」と云ふは、幻人具さに種々の異事あるが如し。諸大菩薩の心の欲する所に隨ひて、衆生を利する事の如きは、幻の水月の如くして萬類に應じて、皆成るを得しむ、此れ即ち如來如幻三昧の句なり。若し能く是の如く作す者は、無始の生より以來の惡業、及び三有逼迫の果、乃至無間の重業、現身に即滅す、何に況んや餘の者をや。當に要を以て之を言はば、三有の衆苦の果報みな滅す、何を以ての故に、持誦者已に三摩呬多地に住することを得るに由るが故に、若し是の如くの實相を觀ずれば苦を離るゝなり。

經に「若し彼の心に於て無上菩提心を觀ず」と云ふは、行者の自心の無上菩提心を觀ずるを謂ふ。心と云ふは即ち是れ無上大菩提心なり、若し斯の觀に住すれば、即ち能く身に意業を淨む。能く業を淨むるに由るが故に、淨と非淨との業離るゝなり。意は言はく、是の如く業生することあれば、淨不淨みな染すること能はず。

二、以下に具廣大希有等の十四句の文を釋す。但し引據の文は未會の文なり。

三、此次に上の五十六頁十二行の等引已下の文を移して見るべし。

一、三、亂脱一

二、亂脫二
亂脫三

(二)以下五字の秘
密眞言を説くなり
五字とは「唵、
阿、嚩、訶、

(三)味 五字明の
時は言説の義を有
する字を用ふべ
きに今は縛の義を
表はす字を以て
釋す、これ深意あ
るなり。
(四)上 訶字の義
は第七卷に釋せり
上とは彼文を指す

二經に「當業」と云ふは、當に此の淨心を生ずべき業を謂ふ。此の果みな汚るゝこと能はず、何を以ての故に、常に理と相應するが故に、譬へば蓮華の淤泥の中に生ずると雖も、彼れが爲に汚染せられざるが如し。是の如くの行者は即ち諸佛に同じ、何を以ての故に、能く一切の諸の如來を生ずるが故なり。此れは即ち是れ仁中の尊佛なり。意は云はく、纒かに菩提心を觀ずるとき、已に如來の果を得、況や身に現證して成佛するをや。

(二)復次に「時に毘盧遮那如來、又また降伏四魔金剛戲三昧に住して、四魔を降伏し、六趣を解脱し、一切智々を満足する金剛の字句を説きたまふ」とは、此の三昧に住して能く四魔を降伏し、能く六趣の煩惱業苦を除きて、解脱の樂を與へ、亦能く一切の凡聖のあらゆる希願を満足す。佛此の定に住して金剛句の眞言の義を説きたまふ。此の五字は即ち是れ四魔を降す眞言の句なり。阿は是れ行、謂はゆる本不生の行なり。傍の二點は是れ淨除の義なり。此の義を以て能く四魔を降伏し、一切の苦を除く。(三)味は是れ縛の義なり、上に加ふる晝は是れ無縛三昧なり、即ち不思議解脱なり。囉は是れ六根を淨むる義なり、六根淨に由るが故に無塵なり。訶の義は(四)上に已

(一)上 法字の義も亦上の第七卷の等虚空不可得の釋に見えたり。
(二)許 衆字の義は第十卷に聖觀音の眞言の下に釋せり。
(三)三解脱 法身、般若、解脱の三を指す。
(四)以下は念誦の法軌を明す。釋文は未會の文なり。
(五)上 上の四處流出の下の開敷眼の釋を指す。
一、亂脫一
二、亂脫二
三、亂脫三
四、亂脫四

六、亂脫五

に之を説けるが如し。法の義も(一)上に亦解する處あり。又(二)許に三義あり、即ち如來の(三)三解脱なり。修行して障を除くが故に、而も三解脱なり。(四)而も大空に住す、二欠とは大空なり。(五)佛此の眞言を説きたまふ時、金剛手及び普賢等、未曾有の開敷眼を得るが如し。一切の一切智を稽首して、是の如く説きて言はく「一切の一切智とは即ち諸法一如來なり。一切とは即ち此の中に梵音の意は、足らざる所なきを云ふ、即ち是れ府庫の義なり。言はく此の五字を以て庫として、能く一切の願を満すなり。二言はく、財富とは一切諸佛菩薩救世者なりとは、此れ一切佛菩薩救世者なり、緣覺聲聞害者とは、此れは聲聞の徳を歎ず、隨眠等を害するを謂ふ。又解して云はく、蘇囉多是是れ煩惱を害する者なり。「能く所行の地に逼して種々の神通を起し」とは、財富とは即ち是れ如來の法寶なり、一切衆生に給ふに猶ほ置しからざるを以て、是の如く無窮の大智寶藏なり、故に富財者と名く。法の財富能く一切に施すに由りて、此の眞言の門を説きたまふ。六上諸佛より下聲聞に及ぶまで、此の句に依りて、能く種々の神通を施作し、一切を利益せざることなし。故に其の行地に隨ひて、種々の神通力を現すと云ふなり。行地と言ふは、凡所行の處を謂ふ。偈に地山林を尋ぬるに逼く等しきもの

無しと云へるが如し。

彼れ無上智・佛智無上智を得と言ふは、但神通のみに非ず、亦此の句に由りて、一切の聖賢、智慧を成ずることを得、乃至同じく一切智々を成ずるなり。然も二乗の智も世間に對しては亦無上と名く、今更に佛無上者を明すが故に、重ねて之を言ふなり。先づ讚じ已りて後に、佛に此の五字の次第廣説を説きたまへと請ふなり。及び布想等の種々の類とは、言はざる所、此れ更に皆此の中に説きたまへと請ふなり。字を布し、字を想ひ、上中下の成就、色用の差別、種々の方便に於て、佛廣く爲に宣説したまへと皆請ふなり。種々の門の中に、此の法を成就し、進趣し、順行するを名けて教とす。此の教を自ら説きたまへと請ふとは、佛親り之を演説したまへと請ふなり。若し佛廣く此の法を説きたまふ。諸を大乘無上眞言行を行ぜん者、當に法を見ることを得べし、若し已に見ん者は亦皆歡喜すべし。見法は謂はく證得なり。當住とは謂はく、自ら見已りて、また諸の衆生に授くるなり。此の事を見るに由りて、自他俱に無上の法利を獲るが故に、佛廣く説きたまへと請ふ。本經に三千五百の偈あり、此の五字の義を説くなり。

一、三、亂脱一

二、四、亂脱二

(一)以下は五字門の法則を明す中に先づ阿字門を釋すなり。此章中の釋文も亦未會の文なり。

一、四、亂脱一

二、亂脱二

三、亂脱三

四、亂脱四

五、亂脱五

(二)内 自身の下分を指す。

(三)三股金剛を以て四方に圍繞するを云ふ。

六、亂脱六

八、亂脱七

(一)三摩薩多とは、正譯には是れ心を一境に住せしむるの義なり。佛金剛の句を説かんと欲して、普く大衆をして一心の境に住して聽かしむ。此の金剛眞言の成就の法を作さんと欲して、先づ金剛座を作さしむ。佛初めて成道せんと欲せし時、金剛道場に在す、また此の座を除き已りて、更に餘の座の能く勝れて此れを致すに堪ふるなきが如し。二時に大金剛、地より地際を盡すことを爲す。此の地際を以て下身を加持すとは、五阿字を説かんと欲するが爲なり。意は云はく、此の字最勝なり、五字第一なり。加持とは、今此の法を説かんと欲するが爲の故に、先以て自身を加持するなり。即ち下身とは、齋より以下を謂ふ。想ひて皆純金剛に作すなり。此れに内外あり、(二)内は謂はく、上に説く所の如し。外は謂はく、自身の坐處を想ひて、方金剛壇の中に在くなり、其の壇は已に上に説けるが如く、(三)方にして欄を標する者なり。大因陀羅と名くとは、此れは是れ金剛の中の極剛の者なり、能く金剛を破れども、金剛は彼れを破ること能はず、又是れ極黄色なり、此れ紫磨金色の如し、此れに阿字を想ひて之を爲すを金剛輪と名く、此の座の中に於て一切を思惟す、即ち是れ瑜伽の座なりとは、此は是れ修行應理者の坐處なり。即ち一切を思惟すとは、一切の事みな此の中に

思惟して之を作すを言ふ、事衆多なるを以て一切と云ふなり。右初めに阿字を座とすることを釋し竟る。

(二)以下行點の梵の義を釋す。

(二)次に長聲の阿を説く。此れ是の阿は第一命根なりとは、能く諸字を活すを以ての故に命と言ふ、若し阿字なければ諸字即ち生ぜざるが故に、第一命なり。此は是れ能く攝召する句なり。若し此の字を想へば能く攝召するなり。長の阿は即ち是れ行なり。若し阿字に觸るれば即ち一切の佛行を引くが故に、攝召と云ふなり。一切内外の法を攝召す、攝召とは是れ攝して己に屬せしめて、自在に受用する義なり。此の阿字門は能く一切如來の功德を攝召して、自身に歸せしめ、亦能く一切の行を満足するが故なり。

(三)以下は大空點の丸字の義を釋す

(三)次に暗字を説く。若し此の字を想へば能く攝して一切の毒及び病等の諸障を除く、内外の諸障みな能く攝して之を去つ。内障とは道を障ゆる種々の法を謂ふ、但し現前することあれば、皆能く滅除す。外障とは一切の外物の障を爲すを謂ふ、亦悉く能く除くなり。又諸毒諸病を除く。病は謂はく種々あり、皆能く之を除くなり。又能攝とは、乃至失心のもの即ち能く之を救ひて本心を得しむ。又此の字を以て能く心を

(二)金剛慧印。五股金剛印なり。

(三)四合。四方を云ふ。

一境に攝して、速かに三昧と相應するなり。若し此の字を想へば、如上の功德を得。一切能く與ふとは、言はく、與は即ち是れ其の所願を滿して、悉地の果を授くるなり。若し持誦者、一月の中に即ち(二)金剛慧印を結びて暗字を誦じ、一月の中に於て、日別三時に之を作せば、一切の無智の城破るゝなり。一切衆生は無明に嬰透せられて、(三)四合に堅固なること、猶ほ牢城の破壊す可からざるが如くなれども、此の字門を以て能く破壊するなり。

「不動堅固を得」とは、謂はく、天人阿修羅等の壞ること能はざる所なり。凡そ一切の増益の事、若し作さんと欲せば皆此の座に坐せよ。増益を亦は圓滿と名く、能く一切の所願を滿すを謂ふなり。若し秘釋せば、一月とは是れ一見なり、若し見法を得て初地に入れば、任運に一切の三昧陀羅尼等、及び諸の地位を増益するなり。若し此の増益の法を作さんと欲する時は、持誦の人、此の金剛壇の中に於て、佛三昧に住して身眞金色なりと想へ。光焰に威光の義あり、威光ありとは、即ち是れ兼ねて本尊の義を明す。梵音此の如し。即ち周匝して炎光あり、髻を以て冠と爲すとは、此れ即ち是れ大因陀羅なり。此の大金剛の堅は、即ち是れ佛智の義なり、能く一切を破りて、能

く除く者なし、此の佛、方金剛壇の中に在すと想ひて、意に隨ひて一切の成就物を作せ。

（二）上上の初夜
煖生等の事を指す

經に云はく、「金剛蓮華」等とは、謂はく、此れ等の一切の事、當に此の輪の中に於て作すべし。若し金剛を成就せん法には、五股をば純金を以て之を作りて、壇の中に置きて加持せよ。商佉等の上中下の成就、亦（二）上に説けるが如し、謂はく、皆此の阿字を持誦せよ。若し佛頂を成就せんと欲せば、眞金を以て佛頂を爲りて此の法を加せよ。若し成就することを得れば、即ち大日如來の身に同ず。或は別物を須ゆ可からず。但し自在を以て、佛身を作すと想ひて、之を加持す、若し成就すれば即ち佛身に同ず。若し金剛の成就を作さんには、持誦の者即ち金剛手菩薩に同ず。蓮華とは、金を以て八葉蓮華等を作りて、此の中にて持誦せよ、若し成すれば即ち觀音に同ず。刀とは、作すに亦法あり、若し成すれば即ち文殊童子に同ず。鵝とは作法若し成れば、即ち以て此れに乗りて、自身梵天の身と成る。外財を成就する中に於て、或は金、或は地地は伏藏を謂ふ、或は如意珠等を成就す。但し増益と相應する者、皆此の法を用ひて之を作せ、具さに上中下の法あり。大因陀羅觀と言ふは、謂はく、金輪の中に於て觀する

が故なり。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十一終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十一

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十二

沙門一行阿闍梨記

(二) 此品中の經は皆未會の文なり
 (三) 此一段は經の今說攝持法等の句を釋す。五大の布字門の下に於て別して諸障を攝持する攝持法は實に此の攝持法は實に此の障の義なるが故に遠離の義と相應す(三)前上の息障品を指す。
 一、三、亂脫一
 二、亂脫二
 (三) 阿 梵字なり
 四、亂脫三

(一) 悉地出現品第六の餘
 (二) 復次に凡そ加持の法は、(三)前に風等を加持するに、七點等を作せよと云ふが如きの法猶ほ未だ盡さず、此の中に具足して之れを明すべし。凡そ一切の障を爲し道を害する者、皆此の法を用ひて動かざらしむ。一切一境とは、一切をして心を住めて體らしむるなり。此の法を作すときは、先づ八峰の須彌山王を想へ。八峰とは四面に周匝して山峰を作すを謂ふ。八峰の上に於て蓮華を想へ、華の上に三股金剛あり、其の股は上に向ふ。(三)經に置彼頂と云ふは、是れ杵の上の頭なり。(三)上に向ひて此の上に(三)阿字を作すと想へ、光焰之を圍遶せり。是の如く想ひ已りなば、一切の障みな攝除せしむ。是の如く彼を攝して、一境に住して動くこと得ざらしむ。是れ不動尊には非ず、是れ定住の義なり、自在に意に隨ひて道を修するに無礙なり。又藥を成就する法あり、凡そ是の如く等、成就せんと欲する時は、具さに次第法用あり、今此の中にはた

(一) 加法は藥物を作すに孔字百八遍を誦じてこれを加持するなり
 (二) 自證 藥物を加持し畢りて成就の相あらば自ら飲むなり
 (三) 以下は字を釋明す。蓋し上に満足一切智々明に満して一切智々明に觀を作す中、身上來きて第一の梵字につきて明したれば、今第二の梵字につきて迷ぶるなり。その中先づ字體の三昧の點を釋すに、佛子應復聽已下の句につきて迷ぶるもの息災部の本尊なり。其佛本尊一切の息災部の本尊を九重月輪九識を表す。(六)上世間成就品の念誦の時眞言なる等、珠曼の如く指す。

だ略して大宗を明すのみ。藥を作す(一)加法は一百遍なり、凡そ百と言ふは皆八遍を加ふ。誦じ已りて(二)自證して飲み、或は以て人に與へよ、能く一切の病患を除き、乃至先業の病、亦能く之を除く。凡そ増益の事は、金剛黄色と相應するなり。

(三)次に縛字門を明す、即ち是れ上の嚙字、先づ其の體を明し、後に三昧の畫を兼ぬ。其の想法は、此の字を想ひて、純ら白色に作せ、猶ほ雪山及び牛乳等の鮮明皎潔なるが如し。先づ齋より以上に白蓮華の極白鮮明なるを作すと想ひて、縛字の純白色なるを白華の上にをくと想へ。成就し已りなば、即ち此の字を廻して、以て本尊と作すなり。此れは是れ息災の中に、最も第一たり。(四)其の佛本尊も亦寂然の像に作せ、極寂の儀にして寂定に住せり、純白無比にして、秋夜の月光に同じ。彼の漫荼羅は當に圓を重ねべし、猶ほ(五)九重の月輪の如く之を作せ。作すこと霏微たる白き雲霧の狀の如くして其の中に住す。此の法を作して成る時は、一切の煩惱の熱等、皆能く止息す。凡そ一切の息災相應は、皆此の中に作すなり。牛乳珠鬘同とは、此の字の中に(六)上の如く牛乳流水の、連滯して絶えざること、白珠の如くして下り、其の心に灌注すと想へ。或は自、或は他、若し此れを想ひて之を灌げば、一切の内外の熱惱、除か

(一) 扇底迦 息災の法を云ふ。
(二) 此圓形の中、四角なるは五字地輪、圓環なるは四角なるは五字地輪、三角なるは四角なるは五字地輪、半月なるは五字地輪なり。

(三) 地の地、金の地、水の地、火の地、風の地の地、何れも也の誤か、即ち、金剛なり、水なり、火なり、地なり、又云ふべきなり、又或説には地は體の義なりと云ふ。

(四) 次上の圓に地水火風の四輪の形を示せり、然るに第五の字虚空に決定せる形なきを故に今圖示せざるを明す。
(五) 種々、四輪一ならざるを云ふ。
(六) 免離、再治の經には出離に作れり。
(七) 藕、蓮なり。
(八) 以下に聞持、聰明、智慧を明す。

はこれ聞思修の三慧を擧ぐるなり。
(九) 智慧、觀解成就の智慧なり、即ち修慧を云ふ。
(一〇) 點、空點なり、即ち字を明す。
即ち字を明す。病等を除く速なり。何となれば空點は自在の義にして至らざる所なし。故に速疾成就の徳を具足するなり。
(一) 以下は字門持誦の相を説くなり。

(二) 不動明王は火生三昧に住する尊なるが故に今此尊を擧ぐ。然れども實に一切の降伏と相應する尊は皆之を通用すべきなり。
(三) 三品、息災、増益、降伏の三種法を云ふ。但し普通には不動明王は息災、降伏の二法についで修す。今は増益を加ふるなり。
(四) 不動尊は降伏の三昧にして而も

ざることなし。或は月の如く、或は水精淨月の光の如く、普くみな流注すと想へ。凡そ有らゆる一切の熱惱の患は、此れを以て之に注けば皆除くなり。一切の(一)扇底迦の法は、白色と相應す、此の中に作すなり。前の阿字は是れ金剛の漫荼羅なり、此の縛字をば水漫荼羅と名く。

(一) 金の地なり
○ 水の地なり
△ 火の地なり
◡ 風の地なり

こと、乳の如く流注して、能く一切の熱惱を除くなり、謂はく、内外の障は即ち是れ熱障なり、此れ悉く能く除くなり。(二) 免離とは此の苦患を脱るるを謂ふ。是の如く縁を一境に繋けて、蘇乳・珠鬘・及び(三)藕・水精、或は酪、或は水を成就す。是の如く等の物、その數衆多なり、心の欲する所に隨ひて作す者は、但寂災と相應して、皆成就を得。或は長壽を求むれば、久住すること無量なり。或は種種の身、端妙奇特の相を現す。或は最上と云ふは、是れ愛敬の中の最上なり、人をして愛敬せられしむ。(四) 或は聞持を求め、或は聰明を求め、或は(五)智慧を求め、及び諸病を息む、是の如く等をばみな成すことを得。若し此の縛字に(六)點を安すれば、然も病患等の事、内外の諸毒を

除きて、みな速かに成就す。此れは是れ息災吉祥の漫荼羅なり、然も攝除するに無量の事あるが故に等と云ふなり。

(一) 次に囉字の除障漫荼羅を説くべし、除障の中に於て、最も第一眞實の法とす。此の囉字は是れ赤中の赤、火中の火、焼中の焼なり。能く種種の煩惱業苦を焼滅するに由りて、乃至現に五無間罪を作れども、若し此の字門を修すれば、亦能く淨除して餘あること無からしむ。既に罪滅し已れば、則ち諸善功德を生ず。(二) 此の字門の所作は、不動明王と相應す、然も不動明王の句は、能く(三)三品の一切の事を作す。其の法は先づ上の如く心を一境に住めて、極赤の三角の漫荼羅を觀作して、極めて悦意ならしめよ。此の悦意の言は、鮮明妙整ならしむるを謂ふなり。又悦意とは、是れ心に當てて之を作せ、此れ秘語なり。周匝して鬘鬘を作せ、烈火の光焰の狀の如し、中に囉字を觀せよ、成し已りなば轉じて不動明王と作せ、(四)寂然の像に作れ、瞋に非ず笑に非ず、其の形寂然なり。又云はく、先づ不動明王を想へ、其の心上に於て三角を作せ、中に囉字あり、字成りなば廻して不動明王と作せ。除障の故に罪滅し、寂然の故に災を息む、即ち是れ罪滅し福生するの義なり。

息災を兼ねたるが故に、息災を表示せる寂然入定の形像に作るなり。
二、八曜、日、月、火、水、木、金、土、羅喉、計都の九曜にて日曜を除ける餘の八曜を指す。
三、亂脫一

二、亂脫二

(三)以下は頓字門成就の法を明す。

次に此成就是物とは、謂はく、此の三角の壇を指す。鉦羅と言ふは是れ執なり、日の屬なり。凡そ二八曜あり、みな執と名く。凡そ日等の諸執及び火天等は、同じく東南の隅にあり、作法大いに同じ。謂はく、須らく火の用之を作すべし、或は火を轉じて冷ならしむる等、皆此の中に作す。然も秘の意は、是れ日を作すが故に智火なり、日は亦是れ慧日なり。攝取とは、惡法難調の人を攝取して、みな柔順調伏せしむるなり。二義准するに二十八宿及び十。此の中に惡人を攝伏すとは、謂はく、能く煩惱を攝伏して、自在を得る人なり。及發怒とは、能く自他をして俱に成すことを得しむるなり。謂はく彼の怨等を發すなり。消枯支分とは、能く彼の身を枯渴して、堪能なる所無からしむるなり。一切の身分は三毒を本體とす、彼れを消渴して餘なからしむるなり。若し外相をもつて言はば、枯涸は即ち是れ龍池等を竭すなり。彼一切作とは、一切の降伏相應の事、みな此の中に作すなり、然も皆慈悲と相應す、彼等をして降伏し善調して、佛道の因縁を作すことを得しめんが爲の故なり。

(三)訶字第一眞實とは、此れは是れ風漫荼羅なり、風性は能く萬物を增益す。風生とは謂はく、是れに應じて風用の事を作すに、みなこの壇の中より出生するなり、亦是れこ

一、三、二、四、亂脫

一、五、七、六、二、亂脫一

四、三、八、亂脫二
十、亂脫三

(二)風輪尊、大日の化身なり。恐らく風天ならん。

六、十一、亂脫四

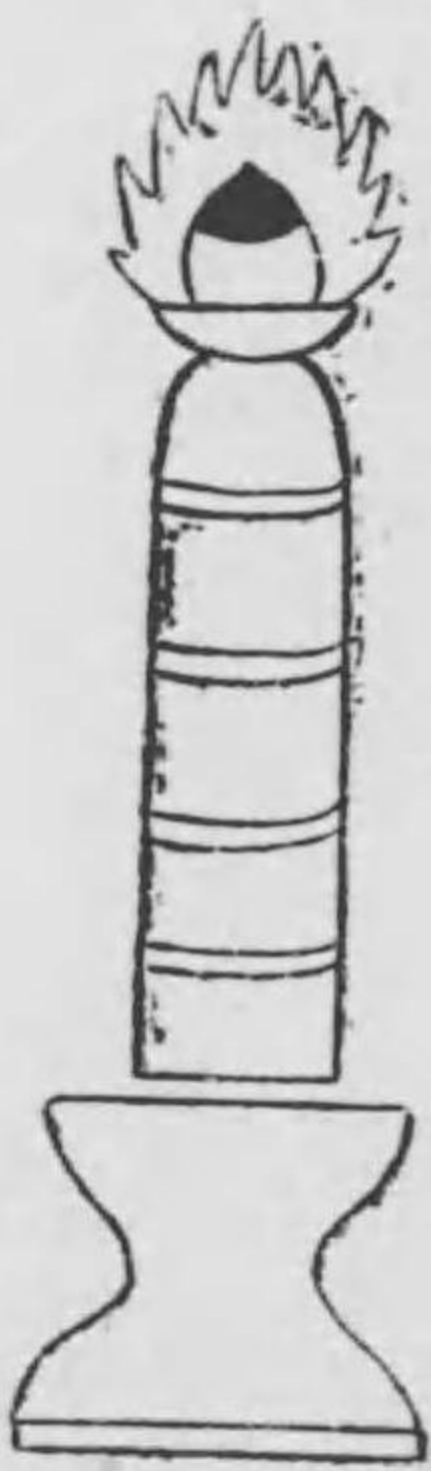
(三)神足、欲、精進、心、思惟の四神足を云ふ。これを又は四如意足とも云ふ。

の諸事を生ず。一、萬物を能く消耗して、變化すること無方なり、此の字の事用も亦爾なり。謂はく因業等の生、種種増長し滋茂する事、みな自在なることを得。若し上に點を安ければ、即ち能く彼の一切因業等の事を壊す。其の法は先づ本尊を想へ、
五其の額の上に於て、眉に連ねて半月形を作せ、
六中に於て含字を於け。先づ外作を想ひて、即ち廻して自身に作せ、
七其の半月に二大威徳威光の像あり、
八黒箬を外に逼出して、風の之を吹き動かす幟幟に作せ。惡とは、其の像を極忿怒の形に作すを謂ふ、
九云はく、此れは但是れ(一)風輪尊なり、降三世には非ず、其の像は亦深青色に作せ。
十即ち黒の類なり。若し此の成就を作すときは、能く一切衆生の爲に、種種の義利を作すなり。
十一次に成就とは、下に列ぬる所の物をば、風の中に於て作すを謂ふ、
十二即ち能く此の現身にみな成すことを得。謂はく、虚空に昇る(三)神足と、變化と及び天眼と天耳と、其の身を隱没するとなり。開とは阿修羅宮等を開くを謂ふ。下に念と云ふは、只是れ心を用ひて作すなり。此の五字はみな是れ心に成就壇を作すなり。亦事法を以て壇を作して、觀心と與に相應す可し。若し事相を以て壇を作して神足を修するが如きは、亦彼の中に於て坐して之を作せ、若しは藕等をも亦壇の中に置きて作すなり。中に白

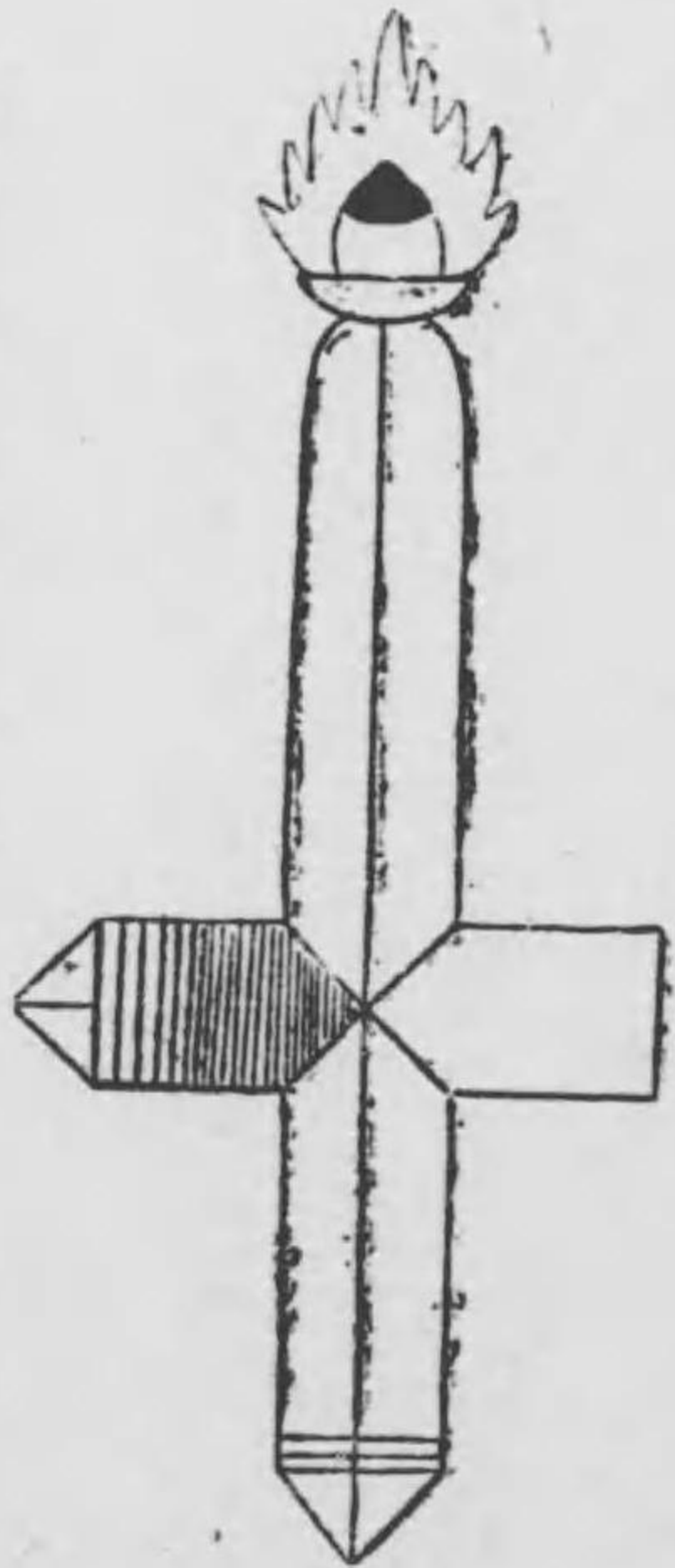
五、四、亂脫
（一）大徳 以下破
字門成就の法を説
くなり。
（二）尊 何尊を指
すか分明らかざれ
ども、多分、尊勝
佛頂を指すならん
ハ、亂脫
六、亂脫

乳流満すと想へ。むかし佛、道樹下に坐せしとき、此の字門によりて、天魔の無量の軍衆を降伏せり。持誦者も若し能く法の如く習行すれば、久しからずして即ち如來に同じく、現身に能く彼の軍を伏す。大名稱とは彼の魔を降す者なり。次に即ち訶字門に因りて、轉じて佉字を明す、訶は即ち因の義なり。因あるが故に、即ち業に隨ひて果を受くる相あり、然も此の第一義の中には、訶字門本より不生なり、不生なるを以ての故に因不可得なり、此の因すら尙ほ本よりこのかた不生なり、況や其の中に於て業果あらんや。是の如く觀する時は、因業と果との事、寂然として皆不可得なり。若し能く是の如く觀する者は、即ち如來に同じく、道樹に坐して魔を降伏す。此の因等不可得なるを以ての故に、即ち是れ其の相、猶ほ虚空の如し、空にしてまた空なるが故に。大徳世尊彼の色を説きたまふとは、虚空の色を説くを謂ふ。若し上に於て點を加ふれば、即ち欠字門に入る。此の欠字門に説く所の尊者を名けて尊とす、謂はく、尊中の尊は即ち大空なり。若し一切の器物を成就せんと欲せば、みな成就すること得るなり。其の名稱無量なり、具さに言ふ可からず。其の漫荼羅は方圓半月等の相なし、當に知るべし、虚空は無相にして、而も能く相を成就す。此の壇をば種

種の色に作る、空は種種の色相を現せばなり。慧刀印共作とは、謂はく、兼ねて刀印を以て之を護りて、成就することを作す。二若し刀を作らんには鑽鐵を用ひて作れ、一。索は線或は藕絲を用ひて作れ、其の輪は或は金を以てし、或は鑽を以て作れ。



利處下にあリ
ナラシヤ
那羅遮と名く



此れを沒羅藍
と名く。

此れ等の器甚だ多し、具さに載す可からず、別にあり。

如上の諸器、一事を作すに隨ひて、此の欠字を用ひて之を成就す。若し上中下の成就を得るとき、事に隨ひて用ひよ、乃至成就することを得れば、之を持して諸佛の國

士に遊歴するを以て、持明仙と名く。

(二)次に更に細しく五字の義を説く。若し此の理に住して、事に随ひて相應すれば、即ち能く一切の事を成辨す。是の故に佛大衆を觀じて、金剛手に告げて言はく、(三)是の眞言の菩薩の、菩薩の行を修せん者は、阿字を自の本色として、内外の一切を捨てて、一切の句義を得とは、阿字の本體本色と相應することを得るなり。本體の不生を體るときは金剛實相の身に同なり、若し此の相と相應すれば、即ち能く一切の法を捨てて、能妙等同なること、猶ほ瓦と金と齊しく觀するが如し。善く平等の觀に住するによるが故に、一切の三毒と罪業と悉く離る。若し是の如くする者は當に淨心を得べし、此の淨を得る者は、即ち諸佛牟尼の尊に同じく、普く能く一切衆生を利益し、百非を出過し、諸の過患を離る。

(三)次に囉字門を明す、若し能く此れと相應するとは、諸の法則を解す即ち是れ眞言の次第法則なり。即ち能く一切衆生の爲に、大利益の事を作す。先づ當に上の如く此の字を觀すべし、白きこと雪と乳との如くして、其の心に流注せしむ。若し流注して其の身に充滿すれば、(四)内外皆淨くして、(五)一切の見る者、即ち佛身に同じ。又其の身より流注して出て、

(二)以上は孔の義を説けり。以下は五字細觀の義を示すなり。(三)以下五字の義を説く。

(三)以下囉字の義を説く。(四)内外内とは正報、外とは依報を指すなり。(五)一切云云一切の見聞觸知の諸境界悉く佛體に同ずるを云ふ。

(二)或顯或秘と云ふ此の性を云ふ。大悲の性と云ふ。此の顯秘の釋の中に各顯秘の釋あり。五乘の中佛菩薩聲聞緣覺の四種人天の三昧は世間なり。故に今文に世出世的利用ありと云ふ。(三)以下囉字門を明す。(四)内外心色二法又は正依二報を指す。(五)次に等囉二字の合觀を明す。

一切衆生の身中に遍して、極めて淨滿ならしむ。又更に流注して大地に滿つ、當に知るべし、此れは即ち秘密の釋の中に於ては、是れ大慈悲の水なり。世間の極熱惱を觀ずるが故に之を利益す。或は飲み、或は觸るるに、或は衆患を除き、能く無上菩提に必定せしむ。有は能く是れ此の水、現に甘露に同じ。或は(二)顯、或は秘、二釋の中に於て、みな世出世の利用あり。無疑とは當に決定の信を生じて、疑はざるべきを謂ふ。

(三)次に囉字門點を加ふを明す。又前の如く之を觀せよ。皆寂赫然として、光明火輪の如し、周匝して光あり、(四)内外に遍して皆此の色となり、外に向ひて流出して、乃至他身をも照す。亦此れをして漸次に轉廣し、法界に遍して、能く一切衆生の種種の惡事を除き、欲樂する所に隨ひて之を滿足せしむ。亦能く諸の神變を作す。(五)次に行者、齋より以上に囉字を安き、齋の中には囉字を安きて、俱に神變を現す。囉より火を生じ、囉より水を生じて、寒熱等の患を除く、(三)乃至八大熱地獄の熱をも、能く囉字を以て清涼と作して、之を息滅す、(二)寒寒地獄をば、能く囉字を以て温煖と作して、之を息滅す。

(一)以下又二字の合觀を明す。
 (二)以下又二字の合觀なり。
 (三)因陀羅 地大の異名なり。
 (四)開 成の義なり。
 (五)色曼荼羅 風輪曼荼羅なり。
 (六)觀字門の觀に於て六根淨の益を明す中に意根淨を説くなり。但し今の文には六根の中眼鼻舌の三根は暫く略して明さず。
 (七)法華 法華經第六卷の法師功德品を指す。
 (八)經行云云 身淨を説くなり。
 (九)或は云云 耳根淨を説く但し耳字に約して説くは淨を爲すのみならず復阿字等を用ふる故に一字を用ふるに隨つて皆得と云ふなり。

(一)次に又下に囉字等を安き、標幢の上に訶字をあきて、能く自他の一切の罪苦を除く。(二)又上の如く大金剛輪を作せ、此は是れ剛中の剛なる者なり。彼の金剛大(三)因陀羅輪の中に於て、雙べて阿縛の二字を作して、龍方(四方)より即ち能く一切を攝伏す。風は能く一切處に遍して、或は(四)開き或は壞すとは、開は修羅宮及び一切の質礙の物を開くを謂ふ。壞は摧きて之を折毀するを謂ふ。種種の雜色の内外の業因より成れるもの、皆能く開壞するなり。(五)色漫荼羅とは、謂はく、本色に依らば、即ち是れ前に説く所の風壇なり。(六)心に摩觸すとは、謂はく、此の字圓明の中にありと想ひ、而も其の心中に當てて、能く意をして清淨なることを得しむ、即ち(七)法華に謂ふ所の意根淨なり。(八)經行の中に於て而も之を念誦し、此の字を觀じて輕舉を作せ。輕舉の相は、即ち能く身を舉げ空に昇りて、種種の神足を現すなり。(九)或は坐して、耳根の中に阿字ありと想へ、此の字出入するを以て、聲を聞くに即ち天耳根通を得了る。或は云はく、一字を用ふるに隨ひて皆得、或は此の文は是れ阿字の用なる可し。更に(一〇)意生身とは、此は是れ要を擧げて之を言はば、意の欲する所に隨ひてみな成る、もし意生身を得れば、念に隨ひて十方に至るなり。當に知るべし、如來に是の如くの自

(一〇)以下經の秘密主等の二句の釋なり。これ上の五字觀門の總結なり。

在方便ありて、能く無相離相の行の中に、而も普く色身を現じて、一切の佛事を成辨せしめたまふ。纔かに持誦する時、能く一切の生死の種子を壞して、菩提の種子を成就す。轉とは即ち是れ轉誦の轉なり。行者若し能く是の如く修行すれば、諸佛常に當に其の人の前に現れて、影の身に隨ふが如くして、其の願を滿たしたまふべし。行者既に所願を滿すことを得已りなば、即ち能く一切衆生を捨てずして、亦また常に其の前に現れて、而も其の願を滿たして、法喜を得しむ、故に「影像に同じく、一切の處に於て、一切衆生に隨順す」と云ふ。爾る所以は、此の如來、三平等地に住して、分別戲論あることなし、また一切の心境界の相を越度し、時方作業一切亦離るとは、時は三世に生滅するの時を謂ひ、方は方所を謂ひ、作は衆の業を謂ふ。萬像を現すと雖も、而も現るゝ所なきこと十喻に同じ、法と非法とみな遠離するが故に、是の如くの無盡莊嚴藏を得るによるが故に、能く普く一切に應ず。是の故に行者當にこの眞言の行無上の悉地を勤求すべし、謂はゆる如來の一切智智なり。當に知るべし、諸の成就の中に、最も其の上において、與等なく相比なし。此の一切智は眞言行に由りて生ずるが故に、當に勤めて之を學ぶべし。

(一) 諸佛刹 金剛法界宮を指す。
 (二) 亂脫 亂脫なり。
 (三) 私 一行禪師なり。
 (四) 法自在 牟尼大日如來を指す。此句は金剛剛地來に發問せんとし先づ如來を讚嘆することを明す。
 (五) 常寂土 法身自證の境界を明す。普賢觀經に明せる常寂光土の文を轉用せしなり。

む(一) 諸佛刹とは、即ち無餘の世界なり。(二) 私に謂はく、此の世界とは、即ち是れ淨心の土、常に毀壞することなき金剛の國土なり。
 美妙の音を發して、(三) 法自在牟尼を讚ずとは、微妙の音を發して、如來に問ひたてまつるを謂ふなり。讚法自在とは、世間の長者の財を具足して、乏短なる所なきが故に、能く意の欲する所に隨ひて、みな成辦することを得るが如く、如來も亦是の如し。諸法の王として、一切の法財具足せざることなきが故に、能く大事を辦ずること不可思議にして、一切みな辦じたまふ。牟尼とは寂嘿(じやくく)の義なり、(四) 常寂の土は微妙寂絶にして、幽深玄遠なり、言を以て之を説く可からず、是の如くの法界は、寂然にして大滅度の法なり、唯だ佛一人のみ究竟じて清淨なるが故に、牟尼と名く。

眞言と諸行とを説きたまへ、彼の行は不可得なりとは、謂はく、平等の三業は眞言の行なり、此の如來の行によりて、無上の大果報を成すことを得る者なり。この諸行をば、願はくは佛、我等の爲に説きたまへとなり。問の意に言はく、此の眞言と及び行とを、佛能く一切如來の功德、廣大甚深の事を成辦することを説きたまへ、要を以て之を言はば、無量無邊の未曾有の法、みな成就することを得しめたまへとなり。然も一切の法は阿字の門に入らざることなし、若し阿字に入るときは、即ち是れ本より

(一) 見聞 見は身密、聞は語密、證は意密にして、此句は三密成就の位なり。

一、三、亂脫

以來(この)本無なり、諸法は本不生なるが故に。若し法本不生ならば、即ちこの眞言すら尙ほ不可得なり、何に況や是の中に衆行を發起せんや。即ちこれ衆生無起にして、法として得可きことなけれども、而も一切の功德を具せり、即ち是れ不可思議の佛の境界なり、唯だ佛と佛とのみ乃ち能く之を知りたまふ、佛佛の自證なり。若し(一) 見聞して之を證する者は、即ち能く無量の方便を以て、衆生に示悟す。若し心自證せずば、則ち能く是の如くの事を籌量(ちゆうりやう)して、人の爲に説くに由なし。是の如くの不思議の不生不滅をば、云何が修行せんと。

二、四、亂脫

又此の行は何れの所より來り、去りて何れの所にか至るとは、意は、無生の行は如何が發趣せんと問ふなり。然る所以は、若し生滅の法は成就破壊の相ありと説く可し。今此の法は則ち是の如く等の相なし、云何が成就を得んと云ふ、此の義も亦甚深なり。(二) 眞言の本體は寂淨なり、云何が行を發さむ、願はくは佛我が爲に宣説したまへ。(三) 一切我が爲に説きたまへとは、意は言はく、惣じて我がために之を演説したまへとなり。謂はく、この希有無上の法を説きたまへとなり。

是の如くの甚深の法性は、猶ほ大海は萬流の歸趣する所なるが如し。此の萬法歸趣

して、正しく大般涅槃に順ずるは、即ち是れ發行の義なり。世間の大河の種々の色味、大海の中に入れば、皆同じく一色一味にして、差別あることなく、變ず可からざるが如く、如來の大海も亦是の如し、一切の萬法萬行、此の中に入れば、皆同一の不思議解脱味にして、差別あることなし。是の如く説き竟る。

(二)次に如來の答に、「摩訶薩の意處を説きて漫荼羅と名く」等とは、心處亦は心位とも名く可し、即ち此の衆生の自心の處は、即ち一切の佛の大悲胎藏漫荼羅なりと指す。所以は何にとなれば、一切衆生は即ち是れ華臺の藏なり、然るに(三)四種の煩惱常に自ら生ずるを以ての故に、彼れが爲に自ら覆蔽せらるゝが故に、明了に自ら覺知すること能はず。若し能く自ら心處を覺る者は、即ちこの心の自性常に淨なりと知る、是の如くの淨無垢處は、即ち是れ諸佛の大圓滿實相の地なり。是の故に佛の答の意に言はく、若し眞言の行と及び果とを知らんと欲せば、當に心處に於て之を求むべし。皆如是説とは、謂はく、十方三世の佛、亦皆是の如く説きたまふ、一道にして異なることなし、獨り我のみ是の如く説くには非ずとなり。眞言の諸の心處を彼れ識知するときは果を受くとは、果は諸佛の無上の菩提の果を謂ふ、受は證得するを謂ふなり。

(二)次に云云。如來の告勅を明す。曼荼羅の心地を明し、二には其字の觀行を明し、三には其字の方軌を明し、四には其字の方便を明し、五には其字の規則を明す。今はその中に此の文は再治の經文なり。
(三)四種煩惱、我癡、我見、我慢、我愛の四種煩惱。

佛の意は言はく、若し能く此の阿字門に入る者は、即ち能く心處を識る、若し此の處を知るときは、即ち眞言の果を得となり。

佛の意は又言はく、諸法は盡く心によりて有なり。人の眼に色を見るが如きは、眼根と色と對すれども、青黃赤白等を了知すること能はず。次に眼識即ち不定の慮を生ず、これ青黃なりやと。次に意識即ち分別し分析して、此れは是れ青黃赤白等の種種の衆相なりと言ふ、當に知るべし、たゞ心の分別に由りてのみ有なり。更に問へ

次に「決定の心を以て歡喜するをば、説きて内心處と名く」とは、此の心は梵に(二)只多と云ふ。是れ慮知の心なり。又次に(三)干栗太と云ふ。是れ慮知の心なり。是れ慮中の心なり。二乗の道に入るが如きは、亦先づ須らく決定の心を得べし、此の決定の心は即ち三昧なり。決定の心を得るによるが故に、心に悅樂を得、即ち是れ内心の自證現法の樂なり。定あるによるが故に、即ち實知見を生ず。然も三乘に各の定ありて、深淺不同なり、今此の中の意は言はく、此の心處の心中の心これ即ち阿栗太なり證すれば、即ち是れ如來の大決定の心なり、謂はく三昧なり此の定あるによるが故に、阿字門に入ることを得、阿字門に入るが故に、即ち能く眞言の行と果とを了知す、若し彼の行と果とを了知するときは、即ち是れ無上の大果を授得す。佛の意は言はく、心の定

(二)只多 緣慮の心なり、即ち八識に通じて皆能く緣す。
(三)干栗多 内圓心と譯す、心藏なり。第九識相應なり。

(二) 淨 漫茶 羅
 云ふ 無過 上味
 譯して 此れ 醜陋
 純一に して 汚穢
 此義 なる 故に 今
 此云 義なり 而して 淨
 衆生 皆本 淨の 苦切
 心地 具する 故に 淨
 羅と する なる 淨茶

八六
 に住するに由るが故に、一乘如實の見を究竟することを得て、即ち能く自ら是の事を
 知る、然らざれば聞くと雖も益なきが故に。此れより已下は正しく習定の初門を明す
 なり。如上の執金剛の所問に、此の眞言の心は何れの所よりか来る、去りて何れの處
 にか至る、云何が果を得るとは、今佛意の答へて言はく、夫れ眞言とは自心より發
 る。乃至眞言の行と及び果報とを識らんと欲せば、亦心よりして現る、此の心を出て
 外に別の法なし。所以は何にとなれば、此の漫茶羅をば之を名けて(一)淨とす、一切
 衆生の自心は本來清淨なるを以てなり。而も無明蔽覆するを以て、了知すること能は
 ず、若し此の心を淨むれば、即ち是れ漫茶羅處なり、餘處より来るにあらず。行と及
 び果報と皆亦是の如し、一切の萬法、乃至形色顯色等、萬類差別なること、心の分別
 によりて有なるにあらざることなきを以てなり。今此の阿字門も亦外より来るにあら
 ず、たゞ心より生ず、別の來處なし。所以は何にとなれば、方便ありて定を修するを
 以ての故に、その心漸く淨し、心淨きを以ての故に、阿字その中に現る。此の阿字は
 即ち是れ一切諸佛の心なり、心輪淨きによるが故に、能く阿字を現す。阿字門に入る
 に由るが故に、即ち是れ大果報の相を成す、故に知る、此の果も亦心に得、其れ實に

(二) 央 彌 央 彌
 羅の 略なり 央 彌
 出 家 離 外 道 之 歸
 經 あり 今 佛 說 け
 の 第 二 卷 の 文 意 を
 引 用 せ る なり

は人の能く授與する者なし、自ら覺了するに由りて之を得るなり。當に(一)央彌が不盜
 戒の義を引くべし。然も此の心源は微妙寂絶にして、名もなく相もなし、示現す可
 らず、何の方便を以てか能く見ることを得んや。今諸佛眞言行の菩薩を化せんが爲の
 故に、直に凡夫の心處の心に從ひて、方便を作したまふ、亦餘の對治の行等を作さ
 ず。この心の處は即ち是れ凡夫の肉心、最も中にあり、是れ汗栗駄心なり。將に學觀
 せん者は、亦この處に於て蓮華の形を思へ、所以は何にとなれば、一切衆生のこの心
 は、即ち是れ蓮華三昧の因なり、未だ開敷せしむること能はざるを以ての故に、諸の
 煩惱等の爲に纏繞せらる、所以に自ら其の心の如實の相を了すること能はざるなり。
 是の故に先づ當に此の心處を觀じて、八葉蓮華の觀を作して、諸葉を開敷して具足
 せしむべし。(三)この臺の上に於て、阿字を想ひてその中にかけ、此の字より無量の
 光を出す、その光四方に散じて合して鬘となること猶し花鬘の如し。之を鬘と謂ふ所
 以は、謂はく、多くの花を連ねて貫穿し、相續して斷えず、多くを合して一とするに
 由るが故に、名けて鬘とす。此れも亦是の如し、無量の光を合して、以て一光の鬘と
 す。何の故にか八葉を觀じて、多ならず少なからざること須ゆるや。此れに二義あり

一、三六、觀脫

二、亂脫
西南、東北、西北、東南、四隅なり。此の如く普賢、彌勒、文殊、觀音、四菩薩にして、これを四攝に配すれば、順次に布施、利語、愛語となるなり。

り、一には一切の凡夫の心處は、未だ自ら了すること能はずと雖も、然も其の上に自然に八瓣ありて、合蓮華の形の如し、今は但し此の心を觀照して、其れをして開敷せしむ、即ち是れ三昧觀するに而も且らく便なり。然もその理は、若し此の八葉の花を觀ずれば、即ち理と相應することを得。この八葉は即ち是れ四方四隅なり。四方は即ち是れ如來の四智なり。初の阿字門は即ち是れ菩提の心、次の暗字は即ち是れ無上菩提を成ず、次の阿長字は是れ菩提の行を行ふ、次の惡字は即ち是れ大涅槃なり。その餘の二四隅の葉は、即ち是れ四攝法なり。更にその相を問へ。先づ阿字門によりて菩提心を發す、即ち是れ眞言の來處なり。次に彼の果を知る、更に次第の意を問へ。次にはこれは字輪の五の阿字の義に由りて、大果報を成さんと欲するが故に、如來の行を修す、修行するを以ての故に、大涅槃を證することを得、大涅槃を證するが故に、能く心性見て、即ち此の心は法界の體なり、本よりこのかた常寂滅相なりと知るが故に、末後の嚵字門なり。三、藥具足すと云ふ所以は、亦その意あり、謂はく、この蓮華三昧の心、若し開敷する時は、無量の法門具足せざることなし、謂はく、六度・十八空・三十七品・禪定解脫・百八三昧門・五百陀羅尼門・是の如く等は、無量無邊にして具足せざることなし。當に知るべし、

四、亂脫
 八、亂脫

一切の法門は皆これ心によりて有なりと。念彼蓮華處於坐上とは、謂はく、彼の蓮臺の上に於て阿字を觀するが故に、坐上と名く。八、周遍普照明衆生類故とは、此の花鬘の光を觀するに、若し現前する時は、即ち此の心より寂照の光を生じて、普く一切衆生の類を照す。一切衆生にも亦是の如くの性あれども、但し無明の覆ふに由るが故に、自心の性を識らず、故に是の如くの自在の用を得ず。若し自ら心源を了する時は、亦能く是の如く色身を普く現じて、十方に教化すること、佛の如くして異なることなし。衆生と云ふは、謂はく、彼れ無明を以ての故に、業に乗じて生じて、即ち四生の報を受く、業に乗じて生ずるを以ての故に、衆生と名く。今彼の衆生を教へて盡く心の實相を識らしめ、彼の華臺を開きて、佛の知見を得しめんと欲するなり。知見とは、俗に心開け意解くと言ふが如き、此の意理あり。心開を以ての故に、即ち阿字門に入るなり。五、又坐上と言ふは、亦多くの意を含めり、或は花坐を言ひ、或は自身坐する時を言ふ、或は是れ大漫荼羅を成就する者なり。漫荼羅の中に此の觀行を作して、阿字門に入るときは、即ち能く光明を見、普く色身を現じて、種々の佛事を作すなり。然も行者初めて學觀せん時、心未だ純熟せずして、未だ現前することを得ず

六、亂脫

キ 亂脫
十 亂脫

ば、當に先づ妙蓮を畫作すべし、上に説く所の如く極めて微妙ならしめ、兼ねて阿字を置きて、常に現前に之を觀ぜよ、當に圓明の中に於て畫くべし。此の圓明はなほ圓淨の鏡の如し、その中に極めて深き阿字の圓光あり、中に於て諦觀すれば、久しくして即ち能く現前して分明に見ゆ。既に外處に於て見已りなば、廻して自心を觀せよ、圓明の中に於て阿字を觀ずべし、阿字の如く當に知るべし、麼等の諸字も例して解す可し。問へ行者内觀具足し純熟して、阿字を見ん時は、その光心中より四散して、普く十方一切佛刹に遍ず、この光頂より足に至るまで周匝して、行者の身を環繞すること、喩を以て言ふ可からず。問ふ、蓮華をのみ觀じて、餘花を觀せざるや。答ふ、これに亦意あり、世の蓮華の淤泥の中より出て、生處惡しと雖も、蓮華の體性清淨に妙色無比にして、諸垢の爲に染されざるが如く、凡夫も亦また是の如し、種々の不淨、三毒の過患、無量無邊なりと雖も、亦此の蓮華三昧の甚深の果實、みな其の中に生ず、+即ち是れ如來平等大慧の光なり。

千電の集會の如しとは、世間の一電の光の如きすら、尙ほ人の眼を映奪するを以ての故に、諦觀す可からず、況や無量の電光の聚集せんをや。これは光鬘四散して、威

猛熾盛なるの意を釋す。然もこの光心より遍照する時、即ち能く普く一切世界の一切衆生應度の者に遍じて、皆その前に現前す。その所喜見の身を以て、機に赴かひて妙法を演説して其れをして得度せしむること、みな實にして虚しからず。

世の明鏡の中に種種の形を現すが如きは、然も照らさざる所あつて、普く現すこと能はず、淨心の鏡は則ち是の如きにはあらず、十方に無礙にして圓かに法界を現す、但し借りて以て譬とすれども、然も實には比をなす可からざるなり。行者圓明の阿字を見る時、能く諸法に遍じて佛事を行ふ。然れども亦寂然にして動作する所なし、由は水月の器に隨ひて同じからざれども、一時に頓に能く現るゝが如し。然も智慧を以て之を觀するに、若し水性明かならざるときは、月も亦現れず、水澄淨なりと雖も月無くば現すこと能はじ。去來あることなけれども、現前し明白なること、たゞ縁合して有なるのみ。復次に月の出る時の如きは、能く四天下の萬物の類を成就して、みな益を得しむと雖も、然も亦此の念を作さず、能く普く萬物を照して之を生長すと。行者の自心を觀することも亦また是の如し、彼の水月の衆像を現するに同じ。

(三)此の品より以前には眞言の果を説きつ、この品より以後は、次第に修行入證の

(二)以下卅字門觀を明す。
(三)此品此品以前とは前の世間成就品及び悉地出現品を指し、此品以後とは今の成就悉地品を指すなり。

(二) 下別出 恐らくは經第七卷供養次第法を指すならん。

(三) 秘密觀法 丸字を以て一身全體に布して觀するなり。

方便を明すこと、これより首とす。この中にまた坐起威儀の衆多の秘法あり、(二)下に別に之を出す。この經は聖者の秘したまふ所なるが故に、明白に次第に説かず。如上に八葉及び阿字門觀するには、先づ淨除を用ひて、自心の華臺現るゝことを得。今彼れをして長養し滋茂して大果報を成さしめんと欲して、更に方便を以て嚙字門を觀ずることを明すなり。前には阿字門に入りて、心性を了知すと云ふと雖も、然も亦未だ究竟して現前することを得ず、是の故に更に嚙字門に入る、これは是れ三昧なり、將に用ひて菩提心を成就せんとす。世の蓮華の如きは水に依りて長ず、若し水なければ久しからずして枯朽す。行者の菩提心も亦また是の如し、若し三昧の水その心に灌注することなければ、即ち亦滋榮し開剖することを得ず。此の嚙字を當に觀じて、頂上の骨の縫目の四方の會處に在くべし、字をして正面に之を着けて直く頭に立てしめよ、後に更に(三)秘密の觀法あり、又別なり。字の點を觀じて行者の頭となし、餘をば身分の四支となすなり。問ふ、水は阿字より下りて別の字に流入するや、不や

行者未だ自心を識らざるを以ての故に、方便を以て識らしむるに、先づ蓮華を觀じて、又定の水を以てその心を滌淨し、此の阿字をば明白に徹せしむる時、六根の諸垢

(二) 別品 經の第五卷の布字品及び字輪品等を指す。
(三) 二字 孔丸の二字なり。
(四) 以下百光遍照の觀を示す。
(五) 持明人 悉地の成就の人を指す。
(六) 因位を人と云ひ、因果を仙と云ふ。
(七) 因果二位の如く持明、法佛の二悉地なり。

みな惣て清淨なり。六根純淨無垢なるに由るが故に、心性無垢なること、水精淨月の光の如し、當に知るべし、これを即ち見と名く。見とは即ち是れ成就なり。成就とは即ち是れ體法界に同じ、當に知るべし、この法界は本よりこのかた寂然なり、一切衆生世界の依持する所なり、猶ほ有情は世界に依り、乃至地輪は水に依り、水は風に依り、風は空に依る、空は一切の依止となれども、所依なきが如し。法界も亦爾なり、衆生無明の垢を以ての故に、自ら了すること能はず、今六根淨きを以ての故に、即ち明かに見るなり。未だ見ざる時には更に方便あり、亦(二)別品の中にあり。又た(三)此の(三)二字を觀するのみに非ず、(四)行者自ら觀せん時、更に諸字を以て普く支分に遍せしめよ、明かに是れを作す時、事事明了なれば即ち(五)持明の人と成る。能く自ら直に此の諸字門を用ふるを以ての故に、持明仙と成る。又此の中に見と云ふは、是れ有得の見には非ず、無垢なるを以ての故に即ち能く見る、見は即ち是れ法界の體なり。鏡淨きが故に萬像自ら現る、而も是の如くの分別を作さず、我れ能く彼れを現ず、彼れは是れ所現なりと、亦去來の相をも分別せず、但し縁合する時現るゝが如し。一切衆生はみな亦この法界の體に同じ、若し是の如く之を見る時は、即ち是れ悉地の相なり、

(一) 佛住處 曼荼羅中胎藏の華臺なり。亦これ寂靜法身なり。

(二) 以下「字門の觀を明す。」

(三) 猶未 行人孔見字の觀を爲せども猶ほ究竟して成門觀に入るべきことを示す。

(四) 二字 又字なり。兩眼に置く故に二字なり。

(五) 二義 此二義此の事理の二方便なり。初義は氣を調へて病を除き身を安穩ならしむ。後義は頭を低れ心を守るは智をして開明せしめんが爲なり。これ即ち身心自在の方便なり。

(六) 亂脫 此の氣息を調ふる方便なり。

亂脫

能く普く色身を現じて、無盡莊嚴藏を示す。行者心淨きに由るが故に、ただ妙天の樂を具足するのみに非ず、亦大涅槃微妙の樂を得、亦如來の句を見る、句は是れ諸佛の坐處なり。謂はく(一)佛の住處なり。

(二) 上の如く見る時をば、猶ほ未だ究竟成就の見とは名けず。更に方便あり、謂はく、囉字門を觀するときは、行者兩眼の上に於て、この二字を置き、光明は燈の如くして赤炎光輝あり。行者當に坐せん時は少しくその頸を屈めて、この無垢光の眼を以て、内にその心を觀照すべし。此の囉字に由るが故に、能く心性を見るなり。咽を低れんこと、當に太だ曲げしめず、又太だ直くせざるべし。此れに二義あり、一には即ち身を調へて病苦を生せず、坐する時太だ曲げ太だ直くすれば、即ち四大調和せざるを以ての故に。二には眼根を淨めて、速かに心源に達せんが爲の故に。此の囉字門とは、即ち淨知見の明燈なり、この智目に由りて心蓮臺の實相を觀するが故に、速かに成就することを得。又坐せん時は、舌を又上唇に着け、及び太だ垂れて下に着くることを得され、當に中に處すべし。是の如く淨眼を以て自心を觀するに、亦能所等の相なし、但し因緣具するが故に是の如くの見を得るなり。以上は佛金

六、亂脫

五、亂脫

七、亂脫

(一) 以下は八識の心淨なるを以て、六識皆光を發する所由を明す。

(二) 三緣 根境識の三緣なり。

剛手に去來の相を告げたまふ。此の行は心より生ず、心を照明として、能く如來の道を見る。行は即ち是れ道なり、道とは即ち是れ行及び果報なり。但し我れのみ是の如く説くには非ず、三世の如來の所説も亦また異なることなし。如上に説く所の眞言の方便、乃至この心處は、無垢清淨なること、猶ほ圓鏡の如くして常に現前す。當に知るべし、これは即ち是れ先佛の共に宣説したまへる所の、眞實の心なりと。是の如くの心性は、常恒に安住して變易あることなく、破壊す可からず、即ち是れ諸佛の一般涅槃なり、故に眞實と名く。囉字門等を以てこの心を淨むるが故に、眞實の智慧を生ず、故に即ち古佛の行ひたまひし所の道を見る、謂はゆる秘密藏の眞言門なり。

(一) 行者此の眞言道を見る時、識も亦光を發す、識とは六識を謂ふ。小乗の中に心意識を説くが如きは、ただ是れ名の差別なり。大乘には即ち別相あり、謂はく、六識身はただ是れ三緣和合して、決定して諸法を了知すること能はず、能く分別するものは是れ心なり。心淨きを以ての故に、六識も亦みな光明輝發す。猶ほ大寶珠の體性常に淨くして、塵垢の爲に染されざれども、若し人瑩治して漸く塵垢を去り、乃至轉明すれば、即ち能く無礙に諸寶を降らし、光も色も無比なるが如く、衆生の六識も亦爾な

(二)六自在王
耳鼻舌身意の六自
在王如來なり。

(三)多種 第十五
卷に明す所の五種
悉地並に無上悉地
等なり。

(三)以下も字も字
門の觀を明す。

(四)目 大疏鈔に
は月の字に作れ
り。

(五)覽 字な
り。

(二)阿字 疏鈔に
は字に作れり
十四卷の義釋は
と同じく阿字に
れるも疏鈔所引
の文勝れたるか

(三)若し云云
以下も字觀の功
能を明す。

(三)一切等 此
出世の悉地なり。
(四)下 五神通等
これ世間の悉地
なり。

り、心源淨きを以ての故に、六識も亦純淨なり、謂はゆる(二)六自在王の性清淨なり。彼の持眞言行者、是の如く心性を見る時、即ち是れ正覺兩足の尊を見る、永く邪倒を離るる之を名けて正とす、此の正知見を以て、諸法を現に覺るなり。人天二足の中に尊きを兩足尊と名く。更に經を勘へて釋すべし 所以は何にとなれば、若し此の心性を離れて、更に諸處に於て如來を見るといはば、是の理あることなし。行者この心佛を見る時、即ち悉地の第一の成就と名く、謂はゆる第一の常身を得るなり。悉地に(三)多種あり、或は世間、或は出世間、或は無量の差別あり。今此の成就とは、即ち是れ出世間第一の成就なり、謂はゆる第一の常身を成就するなり。此の常身は即ち是れ諸佛の金剛不壞の身なり。この心を見る時、即ち是れ如來の句を見て、一切の法はみな十喻の如く、不生不滅にして性つねに不生なりと知る、この眞實の智を得て、實相を見るなり。

(三)是の如く説くと雖も、然も行者猶ほ未だ即ち能く究竟じて、明了に心性を見ず。更に明了の方便あり、謂はゆる囉字を轉じて覽字となすなり。前には(四)目の中に於て、囉字を觀ずることを作して心を觀ず、今は更にこの囉字を轉じて(五)覽字と作さしむ。また前の如く小しく其の咽を低れて、太だ曲直せざらしめよ、舌も亦高下所を得

て、心中に(二)阿字を觀ずるなり。此の囉字は是れ相の義なり、上に點あるは是れ大空三昧なり。謂はゆる第一無相の法は、諸相本空なり、一切の相は皆是れ不堅固の法なるを以てなり、此の相當體不生なるを以ての故に、大空に同じ、即ち是れ堅固實相の法なり。是の如く一切空の句を思惟して理と相應するは、即ち是れ不死の句なり、不死の句は即ち是れ諸佛常住の身なり。此の覽字の方便に由りて、一切の相を離るるは即ち是れ常身なり、常身は即ち是れ一切法空不死の句なり。

(三)若し廣大智と五通と、持明悉地の明等と長壽の童子とを成就せんと欲するに、未だ持誦を得ざる者は、乃至是れ隨順せざるなりとは、廣大智身とは即ち是れ如來身なり、謂はく、(三)一切の三乗の功德より、(四)下五神通長壽等の事に至るまで、覽字の無相の門を離れて、得る義あることなし。所以は何にとなれば、若し人心相こころに着すれば、則ち蓋纏を生じて、業に隨ひて轉じて自在なることを得ず、乃至世間の悉地すら尙ほ不可得なり、何に況や五通等をや。五通等すら尙ほ得る理なし、何に況や如來の平等智身をや。是の故に佛、三乗と世間との一切の功德利益は、みな無相の法の中より成辨することを得と説きたまふ。神通に多種あり、若し行者心に相を離れ着なきを

(四)一切世間三種世間なり。(五)甘露生三昧なり。此三昧を修する者は出世間第一の樂を得て、常住不變なる故に甘露生三昧と云ふ。(六)如來現法樂如來の十力、四無畏、十八不共法等の大涅槃の樂を云ふ。此の萬德は法界現前の法にして、而も此法に於て常に自ら樂を受くる故に現法樂と云ふ。(七)女聲、明の梵語、男性には男と云ひ、女性には女と云ふ。今は女性なることを示すなり。(八)中、上に息障品以下成就悉地品に至るまで、支流の三問に答へたるを云ふ。(九)前等、今品に前の九句の問の義を明すなり。

諸患疾苦も除愈せざることなく、身心清涼にして、快樂未曾有を得るが如く、今此の三昧も亦是の如し、若し聞くことを得て、思ひ・修し・行へば、即ち出世間第一の樂を得、壽量常住にして、(一)如來現法の樂を成す。

此の定より起ちて、また一切三世無礙力を説くとは、三世に能く破壊する者あることなし、此の明の力是の如し。一切の無明煩惱の闇を破除するが故に、之を明と名く。然も明と眞言と義に差別あり、若し心口より出すをば眞言と名け、一切の身分より任運に生ずるをば之を明と名く。増長の義に由るが故に、(二)女聲に之を呼ぶ。王は尊位なるを以ての故に、その妃も亦また尊重なるが如し、故に明妃と云ふ。如上に金剛手初め佛に問ひ奉る、佛即ち初より究竟に至るまで、皆この問を答へたまふ、(三)中に他語を問へて間斷す、今佛また(四)前の意を騰げて答へたまふなり。(五)如上に覽字門の義已に略して説き訖りぬ、今前に依りて、佛眞言を修する行者の爲に、衆縁具足して速かに無上道を得せしめんと欲するが故に、また甘露生三昧より起ちて、この明妃を説きたまふ。

伽伽那三迷ギヤギヤナサンマイ等空アバカラサンマイ阿鉢羅底三迷アハシラヂサンマイ之を薩嚩但多揭多サライタタギヤタ問へサライタタギヤタ薩嚩但多揭多サライタタギヤタ一切如來三曼多奴揭底サンマンダノギヤヂ諸の如來と問へサライタタギヤタ薩嚩但多揭多サライタタギヤタ來なりサライタタギヤタ

(五)如上、次上の成就悉地品の終に明せるを字門を指す。(六)之を問へ阿鉢羅底三迷の句義並に字義を問はしむ。

(一)第二 阿鉢羅底三迷の句を指す
(二)第三 薩嚩但多揭多の句なり。
(三)次 第四句なり。

(四)無礙力 第六句の義を釋す。勝願の相なり。
一、三、亂脫

二、五、亂脫

伽伽那三迷とは、伽伽は是れ行の義なり、重ねて行を言ふは、即ちこの行は所有なし、行に即して無行なることを明す。先づ指して次に破壊するなり。謂はく、此の無相無礙の法は、空に於て無量無礙にして、遍せざる所なし。然もまた異義あり、所以は何にとなれば、若し一切の法直ちに空の如くならば、即ち是れ過患もなく功德もなし。今此の中には無相無礙にして、猶ほ虚空の如くなりと雖も、而も一切如來の眞實の功德を具して、備へざる所なし、故に次に(二)第二の句義を明す。この空を擧げて況を爲すと雖も、然も無量無邊の離相の徳ありて、虚空の能く喩ふる所に非ず。此の功德とは即ち是れ如來に等し、是れ一切如來の所至の處なり。第三の句なり (三)次にまた伽伽那三迷と言ふは、萬德を具すと雖も、表示する所なくして大空に同じ、故に重ねて言ふなり。更に句義 この中に(四)無礙力と云ふは、破壊す可からざるの義なり、亦是れ無相の義なり。無礙無相なるを以ての故に、破壊す可からず。(三)佛三昧の中に於てこの明妃を現じたまふ。口に説くを眞言陀羅尼男聲と名け、身に現すを明と曰ふ。三善男子、此の明妃と如來の身と、無二境界なるを以て、五此の力に由るが故に、佛菩薩

大名稱、無礙の法を得て、能く苦を除滅す」とは、言はく、此の明妃は即ち如來の身に同じ、若し此の理を悟らざれば成佛するに由なし。若し無相無礙の理を證するとき、即ち是れ法に於て自在を得て、菩提を成就す。是の如くの無相は、即ち是れ如來の甚深の境界なり、唯だ佛と佛とのみ乃ち能く之を知りたまふ、故に是れ佛の境界と言ふ。十方三世の佛及び菩薩は、此の門に入りたまふに由るが故に、法界に遍じて普門示現し、衆生を成就したまふに窮盡あることなし。是の故に大名稱を得て十方に聞こゆ、故に大名稱と云ふ。得無礙法とは、無障無相無礙なるを以ての故に、能く一切衆生の身口意の苦を除くこと、眞實にして虚しからず、みな究竟して無上大菩提の樂に至らしむ。眞諦を了せざるに由るが故に無明と言ふ、無明に由るが故に即ち諸行ありて、種種の諸苦を生ず。菩薩は地位に入ると雖も、然も未だ如來の甚深秘密の境を了せざるに由りて、即ち是れ微細の無明亦また是れ苦なり。今佛彼れ等の爲の故に、咸く佛の境界を究竟せしむ、故に除一切苦と云ふ。無明の苦を除くは、即ち是れその不思議解脱の諸佛、無量無邊の功德現法の樂を與ふるなり。■妃とは世の女人の能く男女を生じて、種胤をして絶えざらしむるが如く、此の明は能く一切如來の有ら

■、亂脫

ゆる功德を生ずるが故に、義を以て妃と云ふ。行者眞言行を修せん時、如上に種種の方便ありと雖も、然も須らく此の明妃を持つべし、若し爾らざれば衆德具せず。

六(一)時に毘盧遮那諸佛と、我が始初の不生と金剛の執力とを尋念したまふが故に、上首の執金剛に告げて言はく」とは、如來は甘露生三昧より起ち已りて、(三)我が本初不生と一切の佛身と、不生に由るが故に、即ち諸佛と二體なしと尋念したまふが故に、是の如くの本不生の阿字を取りて、自身及び執金剛を加持して、之を告げたまふ、不生を以て之を加持したまふなり。■是の如く思念し已りて、方に便ち上首の諸金剛に告げたまふ。上首とは、ただ秘密主のみに非ず。■一切みな阿字門に入れば、即ち是れ二の體主なし、■十佛刹土の諸執金剛皆これ上首なり。

「諦かに聽け、善男子、字輪を轉ずるを、漫荼羅行品の中に廣と名く、眞言門修行の菩薩は、佛事を作し、能く彼の前に住す」とは、輪は阿字門を謂ふ、(三)此の一字の中に一切の字を入れるときは、一切の法に於て旋轉無礙なり。世人の輪の如きは轉せざるときは則ち已み、轉ずれば則ち窮盡あることなし、其の首尾を尋ぬるに亦了知す可からず、故に輪と名く。又世間の輪の如きは、若し旋轉する時は、能

六(一)亂脫
 (二)上は三世無礙
 力明妃を説きて出
 生功德の義を示し
 以下は轉字輪漫荼
 羅の相を説くなり
 (三)我本初不生
 我字門なり。我字
 門を以て諸佛及び
 執金剛等を加持し
 て無二の體を成ぜ
 しめ已りて、後に
 旋轉無窮に一切の
 字輪を成じ普く色
 身を現す。
 一、亂脫
 二、亂脫
 三、亂脫
 (三)此の一字に
 阿字一字の中
 一切の字を入れ、
 此の字の中此
 字を入るなり。

(一) 下 第十五卷 漫茶羅は如來秘密の徳にして、恰も蓮花の開敷して自ら莊嚴するが如しと釋せる段を指すならん。尚ほ漫茶羅の義は上に第四卷にこれを明せり。

(二) 品廣 悉らく梵本に品の下に廣の梵語あるならん。

(三) 未會の經文を引く。 (四) 金剛 五股金剛杵なり。

く一切の草木の類を斷つ、隨ひて彼の根莖枝葉、此の輪に遇ふときは摧破せざるることなし、何を以ての故に、邊及は利なるを以ての故に。此の阿字の輪も亦また是の如し、能く一切の無明煩惱を除きて、彼の向ふ所に隨ひて摧滅せざることなし。漫茶羅とは是れ清淨の義なり、(二) 下に更に之を釋すべし。(三) 品廣とは、この中の義は能く一切處に遍ぜり。品とはただ是れ一分の名なり。廣の義は輪の斷盡あることなきが如し、然もこの一分の經は亦此の輪を離れざるが故に、以て名とするなり。諸品にみな廣と云ふは、此れに准せよ。即ち是れ言略の故に一分なり。本不生とは即ち是れ阿字輪なり、此の輪に入るときは、即ち是れ諸佛と同體無二なり。佛眞言行を修する菩薩を成就せんが爲の故に、此の阿字輪を説かんと欲して、而も先づその功德を歎じたまふ。若し此の輪を得れば、能く諸の菩薩をして普門示現せしめて、一切衆生所喜見の身を以て、普くその前に住して之を化度するに、大因縁を以て佛事を作したまふ、故に住彼前と云ふ。

(三) その時に執金剛、佛を頂禮したてまつる、金剛の旋下するに相應して、金剛蓮座より下り已りて佛を歎ず」とは、この菩薩は(四) 金剛の上に蓮華臺あるを以て、此れ

(一) 金剛慧 五股金剛杵金剛智印を指す。

を以て座とするなり。金剛とは即ち是れ諸佛の智印なり、此の佛の智印は、大漫茶羅の臺なるが故に表する所あり。(二) 金剛の慧を擲ぐる時、虚空の中に廻轉して地に下るが如く、此の菩薩も亦爾り、佛の更に阿字輪を説きたまふを聞くが故に、歡喜踴躍して即時に此の臺、金剛の上に於て旋轉すること無量なり、座より下りて佛のために禮を作す、下る時に當りて、杵を空中に擲ぐるに廻旋して下ると相似たるが故に、與彼相應と云ふ。此れ亦佛智の無礙を表す。開法の爲に恭敬するが故に、地に下りて敬を致すなり。

(三) 歸命 此句は本有の菩提心を歸命するなり。
(四) 歸命 此句は修生の菩提心を歸命するなり。
(五) 行體 此句は大悲爲根の句を歸命す。
(六) 先造作 此句は方便爲究竟を歸命す。

(一) 「歸命菩提心」とは、即ち是れ一切衆生の心を歸命するなり。上にこの心は是れ菩提心なりと云へるが如し。
(二) 「歸命菩提心發生」とは、又また能く此の心を發生する者を頂禮するなり。即ち是れ淨て明門に入(三) 行體の地波羅蜜を稽首す」とは、次に眞言行の體を歸敬す、行體とは即ち是れ其の地々及び波羅蜜なり。(四) 「先造作を敬禮す」とは、一切衆生には此の菩提心ありと雖も、自ら了すること能はざるを以ての故に、古昔に發心して果を成し、衆生に轉示する者を歸命す、大恩を念するが故に、又更に禮拜するなり。重ねて歸命頂禮と言ふことは、此の義大同小異なり。重ねて言ふことは、恭敬深なるが故に爾るなり。

一、三、附説一

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十二

二、四、亂脫二

一、三、二、亂脫一

四、亂脫二

(一) 未會の經文を引據す。現法の本初なり。我は一切の世の所依と名く。說法等比なく。本寂にして上あることなし。とあり。此偈は實に大日如来が萬有諸法の能造能生して世所

此の如く佛を歎じ已りてまた請ふことは、世人の養蠶は利の爲の故に善く之を養ふが如く、此れも亦是の如し、佛更に深義を説きたまへと請ひて、自利利他せんが爲の故に、先づ佛を歎ずるなり。三空證とは、即ち是れ無相無礙平等の法を證するなり。佛に白して言さく、世尊、唯だ願はくは法王宣説したまへ、我れ及び一切衆生を哀愍したまふが故にとは、法王とは、法に於て自在なるが故に、名けて王とす。願はくは我れを哀愍し、我れを護念し、及び衆生を利せんが爲の故にとは、いはく、法王我れを哀愍するが故に、我れを護念するが故に、衆生を利せんが爲の故に、三説の如く眞言行を修せん者をして、圓滿を得しむるが故に、願はくは佛更に阿字輪を説きたまへとなり。圓滿とは、彼の上中下の行に隨ひ、各性分に隨ひて利益を得て、皆當に妙果を成就すべし。

次に(一)佛秘密主に告げて言はく、我れは初なり、諸の最勝なり、佛は世の所依の稱號なり」とは、將に秘藏を説かんとして、先づ自ら徳を歎ずるなり、此の法は信じ難きを以ての故に、將に(三)法華を説かんとして自ら歎せしが如し。本初とは即ち是れ壽量の義なり。更に世所依とは、一切の草木はみな地に依りて増長することを得

依たることを明し又、本地極位の說法を明す偈文なり故にこれ密教の骨目とす。 (二)法華 法華經方便品にあり。 (一)亂脫一 (二)亂脫二 (三)亂脫三

三、六、亂脫四 (一) 摩訶字の我不可得の義なり。 (二) 此本經に本寂と云ふは不生不滅の本性を云ふ此の字の義なり。故に今此本と云ふなり。 (一、三、二、亂脫一

るが如し、又商人は導師に依り、海に入る者は船師に依り、病苦の者は大醫に歸依するが如し、此れに多門あり、みな當に説くべし、今の佛も亦爾り、一切の依なり。然も更に深義あり、自ら歎ずと雖も、即ち是れ説法の意なり。二梵音に我を云ふが如きは、中に於て即ち阿の聲あり、即ち本不生の義なり、此れ常住不生の體なり、即ち是れ一切の所依止なり。三稱號とは、我れ此の不生を覺るが故に、一切の世人稱號して佛とす、平等法界に是の如くの名あるには非ず。「説法無等比」とは、此の無比の中には、諸の外道の説く所は、皆是れ有上の法なるが故に、有比と云ふ、凡そ一切の内證秘密の法を了せざる者は皆是れ外道なり。佛は此の等比し況喻す可きことなき法を説きたまふに由るが故に、説法も亦無比なり。又此の中の我とは、字なり、又(二)摩訶の不生の義なり、亦是れ歎の「本寂無有上」とは、此の(三)本の字の中に即ち阿の聲あり、即ち不生の義なり、不生なるを以ての故に即ち是れ不滅なり、是の故に本來寂然なり。此の法は第一微妙にして更に過上なし。能く諸根を寂にするが故に、六根常に淨くして諸惡永く滅す、故に寂と云ふ。此の阿字は即ち是れ一切の佛心なり。今佛の偈の中に此の阿字を説きたまふは、即ち是れ自證の法の中の一の語意を説きたまふ中

亦一切の救世者と
す。故に此の種子
下の義相連ぬべ
しと云ふなり。

(二) 種子執持引
生の義なり。執持引
によりて諸字を執
持し、又此を引生
す。

(三) 現上を結ぶ
經文にして、上結ぶ
經文に由りて、上結ぶ
座を現するが如く、
今亦通じて諸徳を
現すことと示す。
而して再治の經本
には此の現の字な
るは未嘗の經文に
あり。

く、現に同じ」とは、如上の世出世間の一切の所作の妙業は、阿字を以て即ち彼の命とす。人の若し命根なきときは一切の作事皆悉く弃廢するが如く、一切の世出世間の功徳定慧等も亦爾り。若し阿字門を離れては、即ち増益し成就するを得ざることを、彼の死人の能く爲す所なきが如し。また阿字は是れ開口の聲なり、若し阿の聲なければ即ち口を開くこと能はず、口若し開かざれば一切の字皆なし、是の故に阿字を以て一切の字の種子とす。當に知るべし、一切の萬行も亦是の如し、阿字門を以て種子とす、若し阿字を離れては亦成立せず。同依處とは、衆生等は若し大地なければ、則ち住處なきが如く、此の阿字門も亦是の如し、若し阿字を離るれば即ち所依處なし。救度亦同とは、當に知るべし、阿字門は即ち是れ一切世間の大救護なり。末後に(三)現と云ふは、如上に佛、菩薩大衆の爲に金剛座を現したまふが故に、此の一切の勝義を皆能く悉く現すなり。

次に即ち此の眞言門を説きたまふ、謂はく、「南謨三曼荼佛陀喃ナラマンサマブツダナム 普通の佛等を敬禮するなり。阿アは正しく是れ阿字の眞言門なり。」善男子、此の眞言は十方の諸佛、法身を以て同じく加持したまふ所なり、諸そ之を修行することある者は、此の眞言を以ての故に、即ち能く諸の佛事を作

し、乃至普く色身を現す」とは、一切衆生界の爲に佛の智慧を開示すること、佛の能く是の事を作したまふが如く、此の阿字門を以て、亦能く是の如く之を作す、當に此れ彼の體は即ち一切の佛身に同なるべし。阿字門を以て一切の法を轉ずとは、此の阿字を轉ずるに由りて、即ち種種の功徳と成る、此の阿字門に従ひて修行して轉ずるなり。更ニ問へ

是の故に祕密主、眞言門の菩薩等、(一)諸佛を見んと欲する者一切の佛の淨法身を見んと欲するを謂ふ。 供養せんと欲する者一切の佛刹に遊びて供養し承事し 菩提心を證發せんと欲する者菩提心を證して心淨からしむるを 諸の菩薩と同會せんと欲する者(二)那羅延菩薩等と等しく共に一處に現法樂を受くるを謂ふ。 衆生を利せんと欲する者毘盧遮那の如く常に一切衆生の爲に大佛事を作して種種に之を成就するを謂ふ。 悉地を求めんと欲する者此の中には最上の成就なる疾く得可し、況一切智智を求めんと欲する者 然も此の阿字門は一切の義利成辨せざるなし、要を以て之を言はば、一切智智を求めんと欲せば亦決定して當に得べし。此の諸佛の心に於て勤めて之を修すべしとは、佛言はく、如上に列ぬる所の事、汝求めんと欲せば更に他の術なし、ただ當に此の阿字の門を勤修すべしとなり。「その時に毘盧遮那佛、此の大悲胎藏生漫荼羅王に、諸の本尊の位を敷置し定むる三昧神通の、眞言の行不思議の法を説きたまふ」とは、(三)如前に已に漫荼羅の位を敷置

(一) 諸佛以下の
七句は五點の功徳
を明す。第二句は
修明心、第三句は
善提心、第四句は
涅槃、第五句は方
七の三句は方便、
竟の徳なり。而して
此の五點總じて
阿字門の功徳を成
ずるなり。
(二) 那羅延菩薩
に在りて、常に天
受くる所の地上の
大菩薩を指す。
(三) 如前に漫荼
羅位を敷置するこ
とを今重ねて説く
何故と問ふなり。

(二) 此れ云云以下上の問に答ふるなり。而して此中に四義を出せり。

(三) 何故等これ重ねて散説の所因を問ふなり。(三) 此れ云云以下は答説なり。この中に二義を出す。

(四) 上 次上の品を指す。(五) 中心 心中なり。

することを説きたまひき、今何を以て更に説きたまふや。(二) 此れに多義あり、更に一類の衆生を開發せんと欲するが故に、前に已に聽聞せる者をして、倍々明可なることを得しむるが故に、前に諸の位地を説きたまふと雖も、然も尙ほ未だ普く周遍せざれば、今更に説きて闕乏する所なからしむるが故に。又前にただその名のみを説きて、なほ未だ多く形状を説かず、今更に説きて具足せしむるが故に。(三) 何故に併せて之を説かずして、更に分析して此の處に於て説きたまふや。(三) 此れに於て亦意あり、乃至深く法を樂ふ者にすら猶頓に爲に之を説かず、珍重の心を發起せしめんと欲して、漸漸に開導するなり。復次に若しただ尊容を圖書するのみを以て用ひて眞實なりとせば、彼の書師等の如きは、亦阿闍梨の功德を成就す可し、然もただ圖書を以ての故に彼の眞言の行を成就することを得るにあらず、當に須らく一一に三昧神通と相應して、方に不思議の行と名く。今佛彼れを開示せんと欲するが故に、三昧等の法を説きたまふと云ふ、謂はく三昧神通と相應して之を説くとなり。

彼の阿闍梨一切智門の阿字に住して、線を取りて一切佛を禮すとは、(四) 上に已に説きしが如し、(五) 中心に阿字を作し、及び眼に囉字を作す等は、前の品に已に具さに説

(二) 運布 運心を以て尊位を布位するをいふ。(三) 調 調とは心の相應するを云ふ。五色線はこれ信、進、念、定、慧の五根なり。定、慧若し調はざれば道に於て妨あるなり。

(三) 以下四方四隅及び十字界道を定め併つことを明す。但し第五卷具緣品破し今この法を明し少ししかれと異れり。

けり。今壇を作さんと欲せば、先づ須らく此の三昧に住して、理と相應せしめ、相應の智を以て、規量を(二) 運布せしむべし。凡そ繩を合せんには、當に所を得しむべし、太だ緩くすることを得ず、若し(三) 調せざれば、師及び弟子をして多病ならしめ、障の爲に惱まざる。若し用ふる時に斷絶すれば、亦損耗を致さしむ。次に當に方所を知るべしとは、先づ審かに方面を定むと謂ふ所以は、若し弟子修せん時に臨みて錯誤して、或は東を謂ひて西とする等は、即ち障者の爲に便を得らるゝなり。

次に一切佛を禮すとは、即ち是れ阿字の眞言の體を禮するなり。(三) 師禮し已りなば、壇の巽の地にありて北に向ふ、弟子は艮の方にて南に向ひて、繩を引きて相對せよ。次に師は繩を引きて轉じて乾の維に至りて東に向ふ、弟子は身を廻して西に向ふ。次に弟子は右に廻りて、坤の維に至りて北に向ふ、師は身を廻して南に向ふ。次に師は右に廻りてまた巽の地に至りて西に向ふ、弟子は身を廻して東に向ふ、即ち四方の位竟りぬ。弟子次に更に乾の維に至りて巽に向ふ、師ともに相對す、即ち乾巽の隅を定め竟りぬ。(云々更) 凡そ四方を定むること、必ず須らく前の如く審諦して、移易することを得ざるべし。若し四隅及び中心の十字の界を定むることは、但し便に逐

(二)前 具緣品を指す。

(三)瞞 其字なり

(三)婆 亦なり。

(四)復た云云 上來は界分を定む以下は彩色を明すなり。

外に若し寛き地あらば、意に任せて大いに作れ、多く地を侵せども妨なし。(二)前の漫茶羅の中に、第二院に釋迦を置き、第三院に文殊師利と云ふ、此れは文を互にするなり。先づ中胎を定め竟りて、直ちに第三院に向ひて之を定むるに由るが故に第二と云ふ、是れ第二には非ず、則ち是れ第三重なり。今此の中に自ら誠文あり、文殊は第二重にあり、釋迦は第三重にあり。阿字を想ひて外院を定め、次に瞞字を想ひて中臺を作る、次に第二院を作すときは文殊を想ひ、或は(三)瞞字を想へ、亦前の如く身分等に遍せよ。次に第三院には當に釋迦を想ひ、或は(三)婆字重疊の婆字を作すべし。經の中に線位を定むる語の竟より、色を定むるに至る以來は、解すること未だ明了ならざるに由りて、未だ記さず。更に之を問へ經に云はく、(四)復次に毗盧遮那を以て我れを加持し、彼の印を以て廣く法界を尋念して彩色を下せ」とは、謂はく、彩色を下す時、阿闍梨當に毘盧遮那如來、或は彼の印を想ふべし、此の印は即ち是れ廣大法界の印なり。その時に當に自身は即ち是れ大日如來なりと想ふべし。是の如く想ひ已りて、先づ白色を下せ。その時に阿闍梨自らの身は即ち是れ法界なりと想へ、法界の體は明白無染なり。是の如く想念する時は、ただ我が身のみ是の如くなるには非ず、一切有情も亦また是の如し、即ち淨除するこ

(二)二種 阿利茶と鉢羅底哩茶となり、今はその第一を釋せり。

と如來に同じ、亦一切の過を離れたりとは、自身如來に等し、謂はく白色なり、白は是れ法の體なり、一切の過を離れたり。然も云ふ所の一切有情みな妙法界に同じとは、當に何の法を以てか之を得べき。然も此れ方便なきに非ず、謂はく、囉字門なり。此の字に入る時、即ち能く己身及び弟子、乃至一切衆生をして、究竟してみな如來法界の身に等しくして、永く諸過を離れしむ、故に次に羅字を想へと云ふなり。其の字の色白きこと車渠シヤコ 或は商佉と云ふ即ち是れ寶貝なり其の色潔白第一なり。の如し。師の云はく、此の中に即ち阿字あり囉字ありと。故に囉字は白色なり、字に炎光を想へ、寂然にして光出づること乳の如し、此の清淨を以て無垢の色を成して、一切の過を離る。及び君陀花とは是れ西方の花なり亦鮮白無比なり。或は皓月の狀の如し、其の字の焰も亦白し、寂然恬定して曜ける光明あり、是の如く想ふ時、又囉字を誦じて百遍に至り、或は千遍して方に色を下す。凡そ色を加持する法は、先づ色の中に於て囉字を想へ、字成り已りなば即ち轉じて佛となすなり。此れに(二)二種あり、阿利茶とは、謂はく、左の手を胸の上に當て拳になして、風指を申べて直く堅つ、右の臂は物を撃つが如くして直く申べて之を擧げよ、その左の脚は前に向ひ、右の脚は去ること三尺以來にして長く引く是れなり。白朱黃青

に皆之を用ひよ、當に佛形を想ひて此の印を作すべし。凡そ印を作すに二種の威儀あり、若し立ちて印を作すには、皆須らく此の威儀を作すべし。四佛を寂然の形に作して、此の印を用ふ。

第二に赤色を下し、之を記すべしとは、明かに言はく、阿闍梨當に審諦すべし、將に赤色を下さんとする時は、當に囉字ラを想ふべし。此の字照明なること、日の初めて出づる色の如し、或は赤或は黄なり、これ即ち赤黄雜れるなり。この光明照らすこと赫奕たり、此の字は即ち是れ寶幢佛の字なり、此は是れ能く降伏する者なし、最勝無比の佛なり、兼ねて自身即ち諸佛に同じと想へ、赤色囉字をば點を安じて之を加せよ。是れ阿字なるべからず、義を以て囉字に點を加ふることを用ふべきのみ。餘の方便は前に准せよ。

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十二終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十三

沙門一行阿闍梨 記

轉法輪漫荼羅行品第八の餘

次に黄色を下さん時は、當に(一)迦字を想ひて眞金色に作すべし、その儀も亦然り、是れ金色の牟尼佛牟尼は是れ佛の都號なりなり。迦は是れ作業の義なり、無作なるを以ての故に、永く諸過を離る。此の三昧に住すれば諸毒を害し、光明一切に遍するなり。當に定に入るには教に依るべしとは、意を用ひて諦觀して意を散亂せざるなり。

次に青色を下さん時は、當に(二)麼字を想ふべし、彼の上に麼字を思惟せよとは、青色の上に於て之を想ふを謂ふ、即ち是れ生死を度する義なり、釋迦牟尼なり。此の佛大菩提座に坐したまふ、一切の佛、此の字を用て衆生の恐怖を除き、諸の魔軍の衆を降すなり。其の字は虹の外輪に青蓮の色あるが如し。西方には虹を名けて帝釋宮とす。その光も亦爾り、餘の方便は前の如し。

次に黑色を下さん時は、(三)訶字を想へ、劫災の大火の時、火極めて盛なるを以ての

第十三卷に際する所の經文は悉く未會の文なり。
(一)迦 作業の義を表する字なり

(二)麼 字なり

(三)訶 字なり

(二)阿閼 阿字に
三昧大空を加ふれ
ば阿字となる。こ
れ阿閼如來の種子
なり。故に今阿字
を阿閼如來と云ふ

故に、紫黒色の光あるが如く、此の字の光も亦また是の如し。此れは是れ(一)阿閼如來
なり、その佛は大慈悲を以て、一切を護り諸障を伏せんが爲の故に、毘俱胝の怒形を
作したまふ、兼ねて印を作して、諸障を作す者を擬る、此の毘俱胝は眉を皺む、前に
説けるが如し。餘の方便は前の如し、此の一段は當に前にあるべし。此の尊をば鉢囉
底哩茶と名く、梵の字なり。此の印は左の手を擧げて、左の脚を申べ、右の脚を屈
す、此れは是れ降伏の通用なり。金剛忿怒の形に作れ、佛形には作るべからず、この
二尊は一切の用に通ずる身印なり。

次に金剛有情金剛執を以て我れを加持せよ、彼の印或は縛字なり、或は内に於て中
臺の漫茶羅に入りて之を置けとは、謂はく、師先づ線道を定め竟りて、中臺に入ら
んと欲はん時は、即ち自ら加持して金剛手と作るなり。然も師は阿を以て己身と作し
て即ち毘盧遮那の佛に同せば、自ら作務する所あるべからず、故に轉じて執金剛菩薩
の身となる。阿字本不生と縛字と相離れざるを以ての故に、轉用することを得る
なり。

是の如く第二の漫茶羅は亦本寂にして、我を加持する力の故に、無二の相應の形と

(二)二分 一院を
初重を阿閼梨通
物の處に第二重を
し、第三重に諸尊
を安置す。今二分
とはその中の初重
養位とを指す。重
行位とを指す。重
第三の位を指す。分
中胎第一院に對し
て外漫茶羅と云ふ
(三)次等 此句は
第一院に色を下し
重の文珠院を越え
に於て色を下し、院
次に復還す。文殊院
に色を下す。文殊院
(四)此句の意は上
の金剛有情金剛執
と云ふより今の處
に至るまで前の處
に在るべしと云ふ
義なり。
(五)三昧 甘露生
三昧を云ふ。甘露生
(六)無量勝三昧書
無量勝とは無能書

佛と空性との形なりとは、次にまた嚙字の徳を歎ず、阿字の義中に入るを以ての故
に、亦また本寂なり、即ち是れ本不生の義なり。無二相應とは、嚙字は即阿字なり、
無二無分にして理常に相應す。本寂なるを以ての故に、如來の形にして亦空にして自
性なし。次に(二)二分の天位を捨て、(三)外漫茶羅の三分を遠ざかり、界道を棄捨して、
東面より線を申ふ等とは、謂はく、一院毎にみな三重あり、第一第二重を捨て、第
三院に於て神位を安するなり。(四)次に第二院を捨て、第三院に於て色を下す。(五)以
上は當に五色の前にあるべし、義なほ未だ了せず、更に之を問へ。

その時に毘盧遮那佛、(五)三昧より起ちて、(六)無量勝三昧に住したまふ。當に定中に
於て、一切に逼して能く害するものなき力ある明妃の、一切如來の境界より生ずるこ
とを説きたまふべしとは、如來前には甘露生三昧に住して、此の上の法門を説きたま
ふこと已に了りぬ、謂はく、眞言を修する菩薩の諸の方便を満足し、具足せしめんと
欲するが故に、また定より起ちて、更に無量勝三昧に入りたまふ。無量勝三昧とは、
無量勝は即ち是れ能く害すること無き義なり。無量勝三昧に住したまふに由るが故
に、感發して此の(七)明妃を生起するなり。(八)此の明妃をば一切如來の境界より生ずると

一、三、亂脫

二、亂脫

開裂は如來加持及び阿字を以ての故に、即ち是れ毘盧遮那如來なり、如來自ら成事を作すことは應せざる所なるを以ての故に。三、嚩字に施願吉祥金剛を并せよとは、是れ文殊なり、次に種子は是れ摩訶字即ち空點なり、用て嚩字に加へて鑲字と爲すのみ。二、更に嚩字を以て加持して、金剛薩埵の身と作りて諸像を畫くなり。當に作さん時は己身に同じと想ふべし。如上に之を説けり。又此の嚩字を誦すること百遍或は千遍等なり。

大悲藏生漫荼羅を書くべし、内漫荼羅に於て安祥せよとは、師是の如く自ら加持し已りて、安祥として起ちて中臺に入りて、徐ろに衆彩を運布して、毘盧遮那の像を作せ。其の像の本形は白蓮華座の上に坐して、髪を以て冠となし、綵飾を加へざれ、極細の絹を用て下裙とせり。更に極細の羅縠の輕紗を用て上服とし、肉色をして相映じて内に現せしめよ。身は閻浮金色に作せ、色の深く、金の極めて光瑩せるものは是れなり。其の佛の身をめぐりてみな光焰を生ず、相合して鬘とし、連環不斷にして身に遍す。漫荼羅の中に此の佛形を造ることを須ふる所以は、彼の弟子をして速かに勝願を生じ、及び加持の力を以て、一切智身を成滿せしめんと欲するが爲の故に、先づ

(一) 下裙 僧侶の腰に纏ふ所の下衣なり。
(二) 羅縠 薄物の綾織なり。

須らく造立すべし。

復次に壇を造るに上中下の法あり、若し弟子財力(一)富贍にして廣く辨ずるに堪能ならば、師即ち當に色像の壇を畫き作すべし、本尊の身印の相を示さんが爲の故に。若し力能く辨ずるに而も字壇を作さば、即ち秘法隱覆の罪を犯さん。若し弟子の心を觀んに、極めて嚴重にして乃至身命をも惜まず、尙ほ能く身を捨て、師に奉るべし、何に況や當に慍む所あるべけんや、然れども資力辨せざらん者には、字漫荼羅を作すことをゆるす、即ち此の佛を置く處に於て、たゞ阿字を畫き作せ、即ち是れ如來の體なり。(二)阿字を置き竟りて、中臺の外院の直東に(三)阿字を作して、大空點を加へよ。又東北の(四)自在の方に於て(五)伽字を置き、此の伽字は即ち是れ(六)虚空眼なり、是れ一切佛及び菩薩の母なり。次に(七)火方の一切佛菩薩には、眞陀摩尼の印なり、或は字(八)迦なを置け。(九)北方觀自在及び彌勒には、賢劫の一生補處の菩薩を以て眷屬とす、(一〇)婆字を置け。(一一)南方の金剛手等には、或は形を作し、或は印(一二)三股拔折羅を作し、或は嚩字を作す。又此の中に字を置くこと、前の壇の方位と或は不同なり、之を問へ。また彼れ三分の位を弃捨して、一切の執金剛の諸印を畫け、或は彼れ字ならば多く三を

(一) 富贍 贍はユタカと訓ず。財力を富みてゆたかなるを云ふ。

(二) 以下は中臺の上方週知院なり。
(三) 阿等 此れ其字に空點を加へたる其字を週知院の中央たる三角位に置くなり。
(四) 自在 伊舍那なり。
(五) 伽 阿字なり。
(六) 虚空眼 佛眼佛母なり。
(七) 火方 東南方なり。
(八) 迦 阿字なり。
(九) 以下は右方觀音院なり。
(一〇) 婆 阿字なり。
(一一) 以下は左方の金剛手院なり。

(一) 期尅 降伏の義なり。
(二) 哈 義なり。
(三) 三世勝 降三世なり。

(四) 阿 看字なり。
(五) 以下四大護院なり。此四大護院は曼荼羅第一重の四門に安ずるなり。四現阿曼荼羅には此四大護院を略せり。これ四門に攝し見る意なり。
(六) 縛 疋字なり。
(七) 博 疋字なり。但し義釋には疋字に作る。

弃捨すること、亦前に釋せるが如くして異ならず、字印ならば併字を作すなり。次に羅利の方西南方には、毘盧遮那の下に於て不動尊を書け、石上に坐して、手に刀及び網索を執らしめよ、遍身に焰鬘あり、一切の作障の者を(一)期尅す。或はたゞ印をなせ、印は羅索及び刀なり。或は字を作さば(二)哈なり。次に風方西北に於て(三)三世勝を作せ、一切の作障の者を害す、頭に光燄あり、貌は大忿怒に作れ、閻摩羅形の如し、形黑色にして恐怖可畏の中に於て、又極めて人をして恐怖せしむ、當に是の如く極めて畏る可き形に作すべし。其の手中には拔折羅此は是れ三股金剛の印なりを轉ず。或はたゞ字長の阿の字なりを作せ。(四)次に四方に於て四大結護を書き作すべし。東方には無畏結護を書き作せ、身は金色にして白衣なり、面を少しく瞋の狀にす、手に棒を持てり。若したゞ印を置かばただ棒の印を畫け或はたゞ字六縛字を置け。北方には壞諸怖大護を作せ、白色にして右の手に刀を持ち、白衣を着て燄光あり。若し印を作さばたゞ刀形を書け、若し字ならば(五)博字を作せ。西方には難降大護をなせ、能く制伏する者無きが故に以て名とす。身は無憂花の色此の間の深紫の蜀葵花の色の如しに作せ、着る所の衣も亦赤なり、然も少し身色よりも淺くせよ。その面は微笑にして、圓光の中に在り、其れ大會の衆を觀ずる狀に作せ、謂

(一) 索 疋字なり

(二) 懺 懺字なり。
但し義釋には乞懺會に作れり、又巳會の現經本これに同じ。
(三) 以下釋迦院なり。

(四) 婆 疋字なり

はく、四方の衆會なり。印ならば但だ其の刀印を作せ、字を作さば(一)索字なり。南方には金剛無勝大護なり、猶ほ金剛の更に勝つもの無きが如し、故に以て名とす。復次に金剛とは是れ天帝釋の別名なり、然も此の大護は勢力また彼の相に過ぎたれば名とす。其の身は黑色忿形にして眉を皺む、衣も亦黒く然も身面の色よりも稍淺し、頭上には但だ髮髻を作せ、自身に燄光あり、手に棒を持つ。若したゞ印を書けば、亦たゞ棒を置け、字は(二)懺字を作せ。上來の四大護はみな須らく並に眷屬を置くべし、眷屬とは即ち使者なり、みな白蓮華の上に坐せしめよ。持眞言者當に是の如く之を敷置すべし。(三)次に外に出て、第三院に向ひて、牟尼王釋迦種姓を書け、袈裟衣を着し、三十二相を具足す、是れ一切衆生の無畏を施す者なり。教法を以て一切を利益してみ其の印は當に鉢袈裟等等とは錫杖の類を謂ふを置くべし。若し字ならば(四)婆字を作せ、此れを最も勝者とす、謂はく、秘密勝上の義なり。

次に外漫荼羅に於て法界自性を以て加持して、菩提心を以て發趣せよとは、法界自性の觀を作すなり。法界とは即ち是れ如來の身なり、自身は即ち一切の佛の法界身に同じと觀す、此の加持を以て菩提心に住するなり。此の發趣は是れ向の義至の義修行の義なり、更に此の一段を問へ。彼れ三

(二)前 第五卷の
彩色の文を指す。

(三) 鑲 其字なり

(三) 染 其字なり

(四) 嚙 其字なり
(五) 鉢 孕 聖花 其
字なり

分の位を捨て三たび禮を作して、佛毘盧遮那を尋念して、前の如く色を調へよとは、謂はく、釋迦を置き已りて、次に第二院にして當に毘盧遮那を禮し奉るべし、(二)前の調色の中の方便の如く圖書せよ。問へ東方には施願金剛童子即ち文殊師利の別名なりの形を作せ、左の手には青蓮華を執る、上に金剛を置き、一切の瓔珞を以て身を嚴り、上妙の細絹を以て下裙とし、極微細の穀を以て上服とす、又下裙よりも細からしめ、身色を映現せよ。身は爵金色に作せ、頭上に五の髻子あり。彼の印は但だ青蓮華を書け、華の上に金剛杵を置く。若し字を作さば(三)鑲字なり。文殊の右邊北邊に於て網光菩薩を置く、一切の身分圓滿せり。左の手には寶網を執り、右の手には鈎を執らしめよ。若したゞ印を置かば、或は印を畫き、或は鈎なり。字ならば(三)染字なり。但し此の印を置くことも得るなり 南方には除一切蓋障菩薩を書け、金色にして髮冠あり。瓔珞なきを云ふなり 左の手に眞陀摩尼珠の蓮華の上に在るを執る。若したゞ印を作さば、蓮華の上に摩尼珠あるを置き。或は但だ字を作さば(四)嚙字なり。北方には地藏菩薩を作せ、色は(五)鉢孕聖花の如し、西方に此の花出づ、此の間の粟穀の色の如し、花房も亦穀穗の如くして甚だ香し。此の菩薩は手に蓮化を執り、諸の瓔珞を以て其の身を莊嚴せり。若したゞ印を作さば、但だ蓮華

(二) 伊 其字なり

(三) 長伊 其字なり

(三) 上下 上の具
縁品と今の品と互
に影現して曼荼羅
の尊位を満たさし
むるを云ふ。

一、三、亂脱一

二、亂脱二

を置き。若し字を置かば(二)伊字を作せ。西方の虚空藏菩薩は亦諸の瓔珞を以て其の身を莊嚴せり、身は白色にして白衣を着す。其の白衣の色は身に映りて肉紅に作せ、身の色と少しく異なり。 身に光燄あり、大刀を執れり。彼の印を作さば、たゞ大刀を畫け。若し但だ字を置かば、長の(三)伊字を作せ。然も此の壇の中に少げたる所の位次尙は多し、即ち造り了ると云ふは、亦是れ(三)上下互に現すなり。

造り了らん時は、阿闍梨先づ門外に在りて坐して、法界兼ねては菩提心に住すべし、梵本に云はく、次に持誦者法界に住せよ、我れ即ち法界性なり、菩提心に住せよとは、此の菩提心は即ち是れ法界の性なり。東方に向ひて金剛印を作せ、壇門は西に向ひて開くが故に師は面を東に向ふなり。 壇を造り了りなば、壇に當りて面を東に向ひて坐して、佛に同じと想へ、佛は即ち是れ法界の體なり。既に諸佛に同ず、然して後に度人の事業を作す。事金剛を作すとは、謂はく、諸事金剛なり、即ち是れ三股拔折羅の印是れなり。凡そ作金剛と言ふは、字と身と印と皆悉く之を作す、作佛も亦爾り、煩を恐れて廣く一に言はず。次に供養を慇懃に作せとは、更に行人を戒む、戒に應じて慎みて之を作せ、次第を忘るること勿れ。二梵本には當に金剛の印を結びて、次に金剛の事業を作し、

二、亂脫二
 (一) 運心普通・淺行の阿闍梨は運心して漫茶羅の諸尊を普く觀じ、深行の阿闍梨は親り諸尊の現前するを見たり。
 三、亂脫三
 (一) 次等 以下加持教授の作法を明す。
 (二) 亂脫四
 (三) 二種 不動、降三世二尊の眞言なり。此二尊は諸尊召請に通用す。
 (四) 捷疾 慧阿闍梨の智辯速疾なるを云ふ。
 (五) 亂脫五
 (六) 三歸 入佛三昧耶と法界生と轉法輪との三印明なり。即ち入佛三昧

懺悔に供養し、一切の佛教世者の三昧耶を現すべしと云ふ。又印三昧耶等を現すとは、三昧耶の印衆多なり、故に等と云ふ。供養及び作事等にみな三昧耶を作し、誦すること三遍せよ、事を作すに用ふる處多きが故に等と云ふなり。此の法を作すに由りて、即ち此れ所作に隨ひて、心能く一切の方面に遍するを以て、一切如來を警覺す、佛の本願に由るが故に、即ちみな警覺せられて加持を作したまふ。先づ遍一切所を念せよとは、謂はく、漫茶羅の中に於て、方面の一切の諸尊に隨ひて(一)運心普通すべし。若し深行の者ならば、即ち是れ漫茶羅の諸尊の悉地の方に三昧耶を示す。
 (二)次に外に弟子を喚びて、彼をして護淨せしむとは、弟子は先より門の外にあり、之を喚びて、諸尊を請する法は、(三)二種の使者の成辦諸事の眞言を用ふることに即ち得るなり。若し最も(四)捷疾の慧ならば、一一に本眞言の印を用ふ、別請すること亦得。六門に近づき壇に向ひて立たしめよ、又當に先づ彼を教へて如法に潔淨せしむべし。此れ即ち尊を請するのみ。次に結界し乃至廢遣すること、みな供養法の中にあり、准じて用ふること即ち得。既に結護し已りなば、爲に(五)三歸を授けよ、此の三歸とは(六)印法を謂ふなり。(七)初の印は身を護り、次の(八)法輪印は諸の身分を護る、次に更に(九)一印あり、下に當に之を説くべし。初の印を以て頂を印し、次の印を以て支分を印せよ、上に金剛有情と云へり。此の三印に由るが故に、即ち是れ菩提心に住するなり。法界法輪印を作す時には、彼れ當に一心にして自體に作すべしとは、謂はく、行者心を運びて此の法界を作す時は、即ち自身は法界に同じと觀せよ。印を結ぶ時は、彼の印の自體に同ざるなり。先づ法界自性の印を結びて、彼の法輪印をば次に結ぶべし。先づ弟子の髻の中に阿字ありと想ひて、然して後に法界性の印を以て之を印せよ。印を以て之を按じ、次に眞言を誦せよ、三遍或は七遍なり。
 (三)次に當に衣帛を以て其の面を覆ふべし、師當に大悲心を發して、之を感念すべし、彼をして永く生死を度し、佛知見を開かしめんが爲の故に、其の弟子は、その時に亦當に自ら殊勝の無上願を發すべし。不空の手を作して、菩提を圓滿せしむるが故にとは、謂はく、彼の弟子に無上菩提を速かに圓滿せしめんと欲するが故に、(四)上中下の力分に隨ひて辨じ、其の所有に隨ひて、諸佛本尊等を供養せよ、或は寶華等を持ちて之を獻するなり。時に師、弟子を結護せしめんと欲するが故に、耳語して之を教ふとは、謂はゆる、菩提の心に住せしむるなり、(五)別に説處あり。彼れ既に菩提心

耶は佛實、法界生は法實、轉法輪は僧實なり。此三印の加持によりて三實に歸依するなり。
 (一)印法 印即法なり。
 (二)初印 法界生印なり。
 (三)法輪印 轉法輪の印なり。
 (四)一印 或説には入佛三昧耶なりと云ひ、又或説には密印品に説ける金剛薩埵の印なりとも云ふ。所詮なれども決定し難きに似たり。
 (五)以下弟子を引入する作業を明す。
 (六)上中下の力分に從ひて、上は七寶の妙花を供養し、中は彩色莊嚴の花を供養し、下は時花を供養す。
 (七)別 具緣品に法輪法螺を授けりて正しく説けり又金剛頂念誦法を指すとも云ふ。

(一)以下正しく灌頂壇の作法を明す

一、三、亂脫

二、亂脫

四、亂脫

六、亂脫

(二)彼等上の弟子の投華得佛の尊法を指す

五、亂脫

を發さば、一心に誠仰して住せよ。師自ら印を作して、其の頂上に向ひて之を着けよ。
何の印なるか
を更に問へ。然して後に花を擲げしめよ、當に彼れ何の尊の處に墮つと記すべし、一處の本尊の身に就て、又上中下左右の殊あり、彼の墮つる所の處に隨ひて、彼の相應の印眞言を授くるなり。弟子の法教是の如く三昧耶を作すが故に、一切與と云ふ。更に問へ
(二)爾の時に執金剛具徳、又また此の佛に灌頂の法を問ひたてまつる、願はくは佛自ら説きたまへとは、佛の自説を請ふなり。時に佛、法界性の中に住して、金剛手に告げたまふ、諦かに一心に聽け、三我れ此の法を説きて修行者をして、此の法の中に於て自在を得しめん、謂はゆる、勝上の教法を得しむるなり。此の自在とは亦是れ速得の義、又是れ攝持の義なり、上に云ふ所の多財を自在と名くる義と同じからず。二我れ一切の諸の法教を説かん、謂はゆる最上自在の攝とは、謂はく、心に願ひ求むることあれば、悉く能く攝受して、自在に願を満たす、即ち一國に於て自在に爲す所を必ず成すが如し。阿闍梨如來の本形の意を以て、加持して彼の印を作すとは、六(三)彼の上中下の法に隨ひて、或は如來と作り、或は蓮華金剛部等をも、彼の主る所の壇に隨ひて、彼の形を作して灌頂をなすべし。五如來の本形を以て加持すと云ふは、謂はく

(一)彼印 五股印 或は塔印なり

八、七、亂脫

九、亂脫

(三)生一切支分印 金剛薩埵の印なり

(三)開字 丸字なり
(四)囉字 叉字なり

阿闍梨如來の性を以て、自身を加持するなり、如來の性は即ち是れ本體なり。或は(一)彼の印を用ふと云ふは、謂はく、印を以て加持して、自身阿字を以て支分に遍せりと想ふなり、此の阿字は即ち是れ法界の體性なり。此の莊嚴に由るが故に、即ち佛身に同ず、八方に弟子を喚ぶべし。七若し是れ定を得たる阿闍梨、或は已に法驗を得たる者ならば、作す所任運に成就す。若し是の如くなること能はざる者は、當に印及び想を用ひて作すべし。

九次に弟子を引きて將て大華王漫荼羅謂はく壇の外に先づ灌頂壇の處を作すなりに向へよ、四寶を以て大菩薩加持の大瓶を作せとは、是れ中臺の四大菩薩の加持したまふ所の瓶なり、菩薩の寶を以て用ひて莊嚴す。次に(三)生一切支分の印を作して、弟子の頂上に於て之を灌ぐべしとは、凡そ灌頂の時は此の印を作せ、結び已りて瓶を取りて、爲に灌ぐ。若し此の印を以てせざれば、則ち法式具せず、彼の弟子をして、菩提心に住すること能はず、則ち退轉あらしむ、空しく香水を灑ぐと殊なることなし。又また未だ灌頂せざる前に、弟子の頂の十字の縫の上に於て、(三)開字を想ひ作せ、其の心中に極想して阿字を作せ、又胸の上に(四)囉字ありと想へ、亦はただ阿字を想ひて、一切處に遍じ用ふべし。

金色に光れる髮冠あり、白蓮華に坐すとは、謂はく、彼の弟子の心中に、白蓮華の開敷し、圓滿せるを作し、毘盧遮那如來その上に坐したまふと想ひて、然る後に之を灌げ。經に仁者と云ふは、即ち是れ毘盧遮那如來なり。若し此の法を以て灌頂する者は、即ち是れ十方の諸佛の、灌ぐに法水を以てし、法王の位を授けたまふに同じ。爾らざれば徒らに灌ぐのみ、能く爲すことなからん。

密印品第九

爾の時に毘盧遮那佛、諸の大會衆を觀察したまふとは、佛已に略して灌頂の儀法を説きたまふこと了りぬ。將に更に説く所あらんと欲するが故に、隨ひて十佛土の微塵等の大會を觀察したまふ、因縁なきに非ず、謂はく、將に如來の身密の印を説かんとしたまふなり。

次に即ち金剛手に告げたまはく、印あり、名けて如來の莊嚴の具に同じく、法界趣の標幟に同じと爲すとは、言はく、一切の佛、此れを以て莊嚴としたまふが故に、如來法界の身を成すことを得。若し衆生ありて此の法を行はば、印を以て加持するが

(一) 密印品 此の品は初入佛三昧のより終茶吉尼の印言に至るまで密言八十七種を説き、故に密印品と云ふ。密は秘密なり。印は法界漫荼羅の標幟なり。凡そ眞言行者口に眞言を誦じ、心に本尊を想念すとも若し密具足せずれば三密の果を得ること能はず。故に今第八轉法輪漫荼羅行品に次ぎて密印品を説くなり。

(二) 灌頂等 具縁品及び轉法輪に明せることを指す。

(三) 印等 本有の佛體を加持するなり。

(一) 法界 六大法界法爾の本體なり。

(二) 法界 本有の法界なり。

(三) 迦羅 説法の時に二種あり、迦羅と三昧耶とこれなり。三昧耶は正説經の時に約し、迦羅は感應嘉會の時に約す。法華經方便品の如し。

(四) 無害身力 一分一體なる義なり。

(五) 三明 入佛三昧耶、法界生、轉法輪の三明なり。此の眞言を三等無礙の眞言と名く。

故に、亦如來の法界の身に同じ。此の印とは即ち是れ法界の標幟なり、此の印を以ての故に、法界の體を標示す、即ち法界幢と名くるなり。諸佛は其れ此れに由りて身を嚴るが故に、一切の大會の中に於て、此の無上大菩提の標幟の幢を建てて、能く八部等の衆の惡邪の者をして、遠く之を去けしむ、善根性の者は親近し、奉教し修行す。

汝諦かに聽き、極めて善く作意す可し、吾れ今將に之を宣説すべし、世尊今正しく是れ時なり、佛今正しく是れ時なりとは、此の兩語には意あり、初には迦羅の時を説く、意は言はく、今此の四衆、支葉あることなく、純ら是れ眞實なり、大法を受くるに堪へたり、如來の機に應じて説きたまふは、正しく是れ其の時なりと。次には三昧耶の時、即ち時分の時なり、今正しく是れ時なりと云ふは、説法の時なり。

爾の時に世尊、無害身力三昧に住したまふとは、佛この願を満さんが爲の故に、また三昧に入りたまふ、此れは即ち是れ如來無量の身、自在の力あるが故に、能く害するものなし。此の三昧に住して、三明的眞言を發したまふ、その明をば無礙無害無等力と名く。此の三昧耶に由る諸の學者聽聞することを得れば、正法に入ることを得、

(一) 身淨等 身淨とは口密、所願満足とは意密なり、即ちこれ三密具足し三身圓滿するなり

若し作さざる者は、即ち入壇すべからず、亦秘教を聴くべからず。若し此の明を修すれば、即ち能く(二)身淨語淨を得、所願満足して三身に會ふ、故に名けて三明とす。三力とは、三世力を謂ふ、或は是れ三平等力なり。無等力とは即ち此の三力なり。其の明は次に當に之を説くべし。

南摩三曼多、佛陀南、阿婆迷ナラマツマダ、ゴダナン、アサシイ無等チリサシイ三等サシマヤチ即ち三昧ソワガ醫發耶なり

阿婆迷とは、此の中には即ち阿字を以て首とす、即ち諸佛の法身に同じく無相離相なり、當に知るべし、此の法身は是れ與等比なしと。三迷とは佛の三身を謂ふ、法報化を合して、一身として、衆生を教化す。亦體阿字の門に同じく、無相離相なるが故に等と言ふなり。三昧耶とは、是れ不可越の義、是れ無等三等なり、諸の如來の同じく説きたまふ所なり。佛三昧に住して此の明の無害無等力を説きたまふ、此の明に由るが故に、能く三昧耶に入る。此の三昧耶は即ち是れ誓願なり、猶ほ勅の如し、是れ三世の佛の本より要誓したまふ所なり。此の法門は信じ難く入り難く、聽聞することを得難し、法に遇ふ可からざるに由るが故なり。是を以ての故に三世の佛、同じく此の眞言を説きたまふ、この三昧耶の眞言の加被を以て入り聽聞し、この法を修行すること

一、三、二、亂脫

亂脫

(一) 先づ云云以下入佛三昧耶の印を釋せんと欲して先づ十二合掌の相を説く。これ此の十二合掌は諸種の印契の根本印母なるが故なり。

(二) 穹隆 空廣の貌なり。

を得。尊の教の如くして、遠越す可からず。若し聞かざる者は即ち入ることを得ず。亦聽聞することを得ず。娑訶と云ふは是れ警發の義なり、此の眞言を以て諸佛を警發す。此の明を説く時、諸佛即ち警發して起ちて、行人を加持したまふなり。此の明の力の故に能く諸地を滿じ能く修する者をして、三法を現すことを得しむ、謂はく、成就するに三法あり、謂はく、本尊の身・眞言及び印なり、此の三法界を即ち成就することを得るなり。

三次には手印の相を説く。二不越三法道界とは、この界は是れ結大界の界なり、馱都には非ず。界道に於て、中に當りて行ふが故に、不越と名くるのみ。今此の中に、(一)先づ十二種の合掌の名相を説くべし。凡そ諸の印法には、此の十二極めて要なり、宜しく明かに記すべし。第一の合掌は中心に當つて堅く相着け、十指の頭稍相離して、少しばかり之れを開けしめよ、此れを龜尾拏合掌此には堅實心合掌と名く。第二は次に十指の爪を以て相當て齊等にひて、指の頭を以て相合せて、掌の中心少しく相着けざるを三補吒合掌此には虛心合掌と名く。第三は又次に十指の頭を以て相合せて、指も亦齊等にして、然して掌内を空しくし、稍穹隆せしむるを屈滿囉合掌此には未敷蓮の如しと云ふと名

(一) 金剛合掌の如く、如くともあるも、實にこれ金剛合掌なり。に説けるに例同し、てかく記されしものか。
 (二) 微鉢哩哆、此合掌は轉法輪の如し。の反さるる時の如し。
 (三) 吽鉢哩曳陸、此印は金剛持の印なり。
 (四) 此印は金剛持の印なり。
 (五) 此印は金剛持の印なり。
 (六) 此印は金剛持の印なり。
 (七) 此印は金剛持の印なり。
 (八) 此印は金剛持の印なり。
 (九) 此印は金剛持の印なり。
 (十) 此印は金剛持の印なり。

く。第四は次に二地指二空指以て相着け、餘指を稍開敷せしむるを僕擊合掌此には初割蓮と名く。第五は次に又た兩掌を以て仰げて相並ぶ、俱に上に向けて、正しく相並べて之を鋪かしむるを、嚙多那惹合掌此には顯露と云ふと名く。第六は次に又た兩掌を並べ仰げて、前と相似て諸指を相就かしめ、稍屈して之を合せよ、人の水を掬む狀の如し、大いに屈せしむる勿れ。此れを阿陀囉合掌此には持水と云ふと名く。第七は次に又た十指の頭を相又へて、みな右の手の指を以て、左の手の指の上に加へて、(一) 金剛合掌の如くならしむ。此には歸命合掌と云ふ梵音には鉢囉摩合掌と名く。第八は次に又た右の手を以て左に加へよ、掌を反して十指の頭を以て相まよふ、亦右の手の指を以て、左の手の指の上に加ふるを、(二) 微鉢哩哆合掌此には反又合掌と云ふと名く。第九は次に又右の手を以て左の手の上に仰げ、左の手を以て覆せて右の手の下に在け、坐禪の人の手の相加ふる形に相似たり、これを(三) 毘鉢囉哩曳薩哆合掌此には反背五相着合掌と云ふと名く。第十は次に二手の掌を仰げ、二手の中指をして頭相接ぎて之を仰げしめよ、啼哩曳合掌此には横柱指合掌と云ふと名く。第十一は次に又た俱に二掌を覆ひ、亦二手の中指を以て相接ぐを、阿駄囉合掌此には覆手向下合掌と云ふと名く。第十二は次に又雙べて兩手を覆せて、二大指を以て並べて相接ぎて、十指の頭を外に向けよ。亦同

一、五、亂脫一
 (一) 今此等以下正しく入佛三昧耶の印を説く。
 三、亂脫二

(二) 頭の指 大指
 六、亂脫三

八、亂脫四

十、亂脫五
 (三) 然等、この一節は法界生の印の功德を嘆ず。

名なり。亦は覆手合掌(一)今此の三昧耶の印は、先づ三補吒掌を合せよ、先づ手を以て相違けしめて掌内を稍空にするものは是れなり。二空指を以て並べて直く之を豎て、大いに低れしむること勿れ、大いに傍に側むること勿れ、正しく二空指をして上に向かしむるなり。其の五指の中に、無名指を水とし、中指を火とし、頭指を風とし、大指を空とす。左の手をば定とし、右の手をば慧とするなり。亦云ふ可し、左の手の小指を檀度として、次を以て上に向ひて之を數ふるに、(一) 頭の指を定とす。右の手の小指を慧度として、次を以て上に向ひて之を數ふるに、頭の指を智度とす。此の三昧耶の印は、若し初めに修行して諸の善品を作さん時、若し先づ作さざれば、諸法を作すべからず、ただ此れを作すのみに非ず、亦須らく前の眞言を誦じて作法すべし。先づ三摩耶の印を以て、頂上に置きて前の眞言一遍を誦せよ、其の印を右の肩に置き、次に左の肩に置き、次に心の上に置き、次に喉の上に置く、置く時毎に各明一遍を誦せよ、凡そ五遍を誦じて五處を印せよ。(三) 然らば此の眞言に何の功德かある。此の眞言を以ての故に、能く宿障を除きて以て自身を淨め、身をば淨からしむるが故に、外障も亦淨し、外障淨きを以ての故に、諸障みな入ることを得ず、此れを即ち大護となすなり。此の不思議、能護に由るが故に、福任運に増長し、罪自然に除きて、諸佛警覺して其の所

九、亂脫六
(一) 又次等 法界生の眞言を説く。

(二) 其等 法界生の印を説く。

願を満てたまふ。

九(一) 又次に法界生の眞言に曰はく、

南謨三曼多佛陀喃、達摩駄都法界なり薩嚩婆縛性な俱哈我な

達摩駄都は是れ法界なり、法界とは即ち是れ佛身なり。下の句に我と云ふは、言は

く、我は即ち是れ法界なり。又此の行者は未だ即體眞性なること能はずと雖も、但し

此の印を作して眞言を誦すれば、亦即體法界に同じ。(三) 其の印は二空指を以て掌中に

内れ、左右の手の地水火の三指を以て壓して拳に作し、二風を豎てて直からしむるなり。
両手各別に拳に作して風指を豎つるなり 先づ二風指を豎て、胸に當てしめて、即ち裏に向けて轉ず、

兩手の指をして頂の兩邊より、各左右の頬頰に近づけて、裏に向けて曳きて之を稍下

して曳け。謂はく、初は指を豎て、稍指の頭を下に向かしめ、指の背を裏に向けて、

頬頰に近づけて、漸漸に指の頭を下に近づくるなり。心に至りて即ち手を散ずるなり。

七、凡そ眞言を誦じ印を作すこと、喩へば耕牛の二牛、同じく進みて前後することを得

ざるが如くなるべし。

十二(三) 次に更に印を作せ、先づ反背手合掌を作して、二地指を以て反して相勾へよ、

七、亂脫七

十一、亂脫八

(三) 次更等 以下轉法輪の印明を釋す。

(一) 上 第九卷の金剛薩埵の眞言の釋を指す。
(二) 次等 以下大慧刀の印明を明す

(三) 上 次上の十合掌の中の第七の歸命合掌は今の合掌の印母なり。
(四) 上 第四卷香水眞言の歸命の句の釋を指すならん論釋第三の二三二頁参照。

右をして左の上に加へしむ。餘の水火風の三指は、次を以て亦反して相勾へ訖れ、末後には二空指を縦て、掌の内に至らしめて相拄ふるなり、此れは是れ轉法輪の印なり。此の印を作すに由るが故に、彼れをして身心清淨ならしめ、能く現に十方の佛の轉法輪を見る。眞言に曰はく、

南謨三曼多佛陀喃、伐折囉金、怛麼俱哈

此の眞言は(一)上に已に之を釋せり。

(三) 次に刀印を作すとは、刀をば利智に喩ふ、能く除斷せしむるを義となす、謂はく、惡見の山峰を除くなり。大山の峰の線亂として甚だ多きが如く、煩惱も亦爾り。

今此の刀印を作す、此の印に由るが故に(三)上に之を説けるが如し。即ち二風指を屈して、指の頭を相

對せしめ、二空指を以て並べて之を壓し捻して、大刀の形の如くならしめよ、即ち是

れなり。其の眞言に曰はく

南謨三曼多佛陀喃如上

大刀無垢の法は、現に俱生の身見を截斷して、如來の信解を生じ、無貪の法を生ず。此の眞言は梵音に之を誦せよ、經の中にあり、此れは已に義を註すること竟り

(一) 上 次上の註解を指す。
(二) 五 此の五、五空點の中の第五の空點を指す。

(三) 最初 信解の義は第一卷に如來信解の句を釋せし時に詳かに釋せることを云ふ。論釋第三の第九頁已下參照。
(四) 畔 但し下に「傍に長の阿點あり」と云ふ。然らば「とすべし」か、而も未だ「か」の字を見ず。
(五) 阿 訶。

ぬ、(一)上に説けるが如し。此の眞言は初の摩字を以て心とす、是れ我の義、又是れ(二)五の空點の字は、即ち是れ遍一切處の義なり。今此の中の意は、正しく此の我見を害せんと欲するなり。當に知るべし、此の刀印は即ち是れ諸佛の大智なり、能く諸見を斷絶するが故に、刀を以て煩惱の根を截り、却て無垢の法現るゝことを得。身見俱生の類は即ち是れ垢なり、今この垢を斷じ竟りぬれば、即ち邪を休息す、未だ休息せざれば更に勝法あり、謂はく、是の垢を除き已りて、當に如來の信解を生ずべし。
此の義は(三)最初に解せるが如し。如來の信解とは、是れ何の法をか謂ふ。無貪等の善根を謂ふなり。此れに由るが故に、次に(四)畔字を生ず、是の中には(五)訶字を因とす、是の因を除かんが爲の故に、傍に長の阿の點あり、即ち是れ一切の法本不生なるが故なり。下に(六)廓ありて三昧とす、上に點あり、大空とす。此れを誦ずるときは、能く行者をして三種の身を満足せしむ、此の字の中に三義あるを以て、即ち是れ法身現るゝなり。(七)三藏の云はく、西方には尤も印法を秘す、作す時は又極めて恭敬す、要す尊室の中及び空靜清潔の處に在りて、當に澡浴し嚴身すべし。若し一一に浴すること能はずば、必ず須らく手を洗淨し口を嗽ぎて、塗香を以て手等に塗りて、方に作すことを得べし。又作す

(八) 鄒 鼻のへを指す。これ三字なり。

(九) 亂脫九

(十) 三藏 善無畏

(十一) 亂脫十

(十二) 吉祥商法印 大法螺印なり。商法は螺貝の梵語なり。

(十三) 空中合掌 虛心合掌なり。

(三) 暗 其なり。

(四) 開剖蓮 開敷蓮華の印に作るなり。即ち此華座の印なり。
(五) 鐸形 現流經には鐸とあり。これ鐸の梵語なり。大鈴なり。五重塔などにこれを釣れり。

時は須らく威儀を正しくし跏趺等にして坐すべし、爾らざば罪を得、法をして速かに成就することを得ざらしむ。

次に次に(一)吉祥商法の印を作せ、先づ(二)空中合掌を作し、二空指を屈して、二風指を以て之を壓して商法の形の如くならしめよ、印を作し已りて、即ち口に近づけて之を吹け、螺を吹く法の如し。此れは是れ一切の願を満す吉祥法螺の印なり。此の印を作すに由るが故に、即ち一切の善願を満し、大法を宣説して、能く十方をして普く聞知することを得しむ、此れは即ち是れ寂靜涅槃の印なり。其の眞言は、歸命は前に同じ、薩嚩哆(三)暗、此れは是れ眞言の心なり、一切の法は本來不生なり、上に又點あり、即ち是れ大空遍一切處なり、是れ大寂涅槃の體性なり、万法寂然にして一切處に遍するなり。

次に金剛不壞の座の印、法は先づ二空指・二地指を以て、皆相並べて餘は舒べ散じて(四)開剖の蓮の如くせよ、經には(五)鐸形の如くならしめよと云へり。次に即ち改めて地及び空指を以て相捻し、中間の六指は並べて舊の如く舒べ散ず、其の中の火風指をば相合せ、水指をば單に立てよ、即ち是れなり。此れは是れ蓮華の座なり、亦是金剛座

(一)阿毘
(二)阿毘

二、亂脫十一
(三)この一段は十
二合掌の釋段の次
に來るべきなり。
四種の拳を釋す、
謂はく一は蓮花
拳、二は金剛拳、
三は外縛、四は内
縛なり。此等の拳
も亦諸密印の印母
となるものなり。
(四)第一等 蓮華
拳を明す。
(五)次等 金剛拳
を明す。
(六)二等 外縛
拳を明す。
(七)次等 内縛拳
を明す。
(八)亂脫十二了。
(九)次等 金剛大
慧の印を明す。こ
れ外五股印なり。
(十)餅字なり

と名く。此の座に坐するに由るが故に、能く諸佛を生ず、諸佛は皆この座に由りたまふ、即ち吉祥の座と名く、故に金剛不壞の座と名く。眞言は歸命前の如し、(一)阿、此れは是れ眞言の心なり、此の長の(二)阿字を行となす、傍の二點を三昧とす、此の法を堅固ならしめんが爲の故に、故に後に點あり。

二(三)然も拳を作す法に其の四種あり、(四)第一は常に拳を作す法の如く、大指之を立つる、此れ是の一なり。(五)次に空指を以て掌中におきて之を拳るを金剛拳と名く、第二なり。(六)二手を又へて合せて拳に作して、十指をして外に出現せしむ、此れを指在外拳と名く、第三なり。みな右の指を左に加へよ (七)次は十指を以て相又へて、みな十指の頭をして掌内に在らしむ、此れを二手拳と名く、第四なり。亦右の指を左の上に加へよ

(八)次に金剛印を作せ、二手みな水指を屈して掌内に向け、二風指を以て火指の背を捻して、相合せしむ、此れ即ち金剛印なり。二空二地指並べて立つるなり 此の金剛印に由りて、能く無智の城を壞す、一切のもの壞すること能はず。其の眞言の歸命は前の如し、呪の體はただ(九)餅字あり。義は(一〇)上の如く准じて之を説け。

次に佛頂の印、先づ(一)指向内拳に作して、即ち二中指を申べて相並べしめ、次に二

(一〇)上 第十卷普
通眞言藏品の聖觀
自在菩薩の眞言の
中に餅字ありて釋
せり。今これを指
すか。論釋第三の
五四〇頁參照。
(二)指向内拳 内
縛拳なり。
(三)背 中指の背
の中節に加ふるな
り。
(四)智手 右手な
り。
(五)拳 蓮花拳な
り。
(六)毫相 白毫な
り。

(七)如來鉢印 釋
迦如來の鉢印なり
印相は法界定印の
如くにして鉢形を
表はすなり。

風指を以て、中指の(一)背に加へて屈し、二空指を相並べしむる、即ち是れなり。其の指向内拳とは即ち是れ指の頭を内に向くるなり 此の大印を佛頂と名く、此の印を結ぶ時は即ち仁者に同じ、仁者とは如來を謂ふなり。謂はく、此の印を作せば、即ち諸佛の身に同じ。此れ是の眞言は亦是れ三昧解脱の義を具す、初を因とし、後を果とす、因は是れ如來の行、果は即ち是れ佛なり。合して頂上加ふ更に問へ

次に如來豪相の印、(二)智手を以て大指を出す(三)拳になして、眉間に置く、即ち是れなり、此の印を作す時は、即ち如來に同じく、(四)豪相具足するなり。其の眞言は歸命前の如し、(五)行な(六)因な(七)生な(八)此の不生の行を以て、一切の因を淨むるなり。闇とは生不可得を謂ふなり。

次に(九)如來鉢の印を作せ、左の手には兩衣の角を持つ其の法は袈裟の手に近き尖角と及び肩に廻らし入れ二の角をば 仍ほ二手を以て相重ねて、右を以て左の上に加へしめよ、坐禪の手の如く、引き上げて齋に當てしめ、稍屈して手を重ねて鉢を承くる形の如くする即ち是れなり。此の印を作すときは即ち如來に同じ、此の袈裟を持つは諸佛標幟の備なり。亦能く一切の非器の衆生をして、みな法器となるに堪へしむるなり。眞言は歸命

(一) 婆 花なり

(二) 次等 釋尊の大鉢印を説く。
(三) 拓 手を以て物を承くる也。
(四) 瑜伽 金剛頂の四佛の中の不空成就佛の印を指す

(五) 滿願印 又與願印とも云ふ。
(六) 瑜伽等 金剛頂の五佛の中の寶生尊の印と同じ。

前の如し、(一) 婆は是れ有の義、即ち三有なり、本不生なるを以ての故に、即ち三有を離る。三有本來不可得なり、此の三有を除きて如來眞實の有を得、謂はく、諸佛の法身なり。

(三) 次に施無畏手の印を作せ、左手は前の如く、衣の二角を持ちて舒べて齋に當て、右の手の指を上に向け、而も外に向けて之を舒べて、物を(三) 拓く像の如くせよ。
(四) 瑜伽の中の釋迦の印の如くなる即ち是れなり。若し此の印を作さば、能く一切衆生の種種の怖畏を除き、愛恚即時に皆息じ、亦彼の未來の種種の大可怖畏を除くなり。その眞言は歸命前の如し、薩囉他^{サロ} 囉^ラ 誓^シ 那^ナ 誓^シ 那^ナ 勝^シ 婆^バ 也^ヤ 那^ナ 奢^シ 那^ナ 除^ク 是^レ 怖^シ 遍^ス 是^レ 普^ク 義^{ナリ}、即ち是れ遍一切處なり、一切處方便の中に於て、最も勝れたりとす、皆能く彼れに勝る。初は異生等の煩惱を離れ、次は二乗の煩惱を離る、故に重ねて之を言ふ、即ち是れ勝の中の又の勝なり。如來は此れを以ての故に、能く一切處に遍じて、普く一切の煩惱を除くなり。

次に如來(五) 滿願手の印、左の手に亦衣の角を持ちて、之を展ぶること前の如く、右の手は外に向け舒べて下し垂れよ、(六) 瑜伽の中の寶生佛の印の如し。此の印を作す時、即ち如來の力を以ての故に、一切の佛其の所願を滿て、みな成就することを得し

めたまふ。眞言は歸命前の如し、嚩囉^{ワラ} 馱^タ 與^ユ 折^セ 囉^ラ 恒^コ 麼^マ 迦^カ 我^ガ 意^イ は云はく、願はくは諸佛、我れに金剛の身を與へたまへとなり、亦是れ我れに大願の身を授けたまへとなり、此れは即ち是れ其の所願を滿つるなり。

(二) 次に一切の障を爲す者を怖れしむる印、右の手を以て(三) 拳 大指を出すになせ、風指を舒べて之を堅てよ、眉間に當て、指の頭を以て眉間を拄ふるなり。等引と云ふは、(三) 毘俱知の形を作して、其の面忿怒の如くして、心を一境に住めて動かざるを謂ふ。此れは一切佛の大印なり、能く如來の威猛大勢の力を現じて、一切の障難を爲す者を恐怖し、其れをして降伏せしめ、亦能く一切衆生の所願を滿てたまふ。行者此の印を結ぶ時、障を爲す者、四方に向ひて馳散せざることなく、乃至大力の天魔の軍衆も亦自然に退散しぬ。如來菩提の道を證したまふ時、此の印を以て即ち能く諸魔を伏したまふ。眞言は歸命前の如し、(四) 摩訶嚩梨 大力伐底囉奢嚩梨 十力馱婆吠 摩訶彌底囉也 發^ハ 大^タ 慈^ジ 也^ヤ 此の眞言は諸佛の大力なり。此の大力は是れ何等ぞや。即ち是れ如來の十力なり、一切の力の中に最大自在なり、如來は云何が此の十力を得たまふ。謂はく、大慈より此の十力を得たまふ、故に此の力は大慈より生ずる所なりと言ふ。

(四) 摩訶等 經文には今の疏文の次に(發の義)の三字あり。

(二) 次等 以下怖魔の印明を説く。
(三) 拳 蓮華拳なり。
(三) 毗俱知 梵語なり續と翻譯す。

發すより、乃し成佛に至るまで、其の中間に於て間斷せしめず、生死に復らず、菩提を退せず、即ち是れ大界の義なり。眞言は歸命前の如し、麗三昧嚕の二乘の相なり不可得なり。第一義なり。第一義離垢離縛作な離相なり。此れ等は皆是れ三昧なり、如來は此の諸の三昧を以て莊嚴として、更に過上なし、此れは是れ諸佛の大界なり。

次に大護の印を作す、前の如來藏の印に准せよ。二水指を申べて、指の頭をして相拄へて峰の如くならしめ、其の二火指の頭も亦相拄へて稍屈して、微しく連環の狀の如く、又二空指を開きて、相去ること二寸以下にする、即ち是れなり。眞言に曰はく薩嚩怛他揭帝弊命一切如來等に歸薩嚩婆也微葉帝弊能一切の怖障等を除くなり、亦毘濕嚩目契巧みに種種の功德門を現じたまふなり。薩嚩他一切の場所に通ずるを謂ふ。哈欠訶は是れ因の義、因を淨む、又また空とは此の空も亦空なり囉乞叉諸佛は此れに由るが故に、有情を捨てず常に佛事を作し、休息あること無く、麼訶麼囉如來十種の智力なり、即ち是れ薩嚩怛他揭多なり奔拏也寧囉社帝言はく此の力は如來の功徳第一は其の障を恐怖せしむ、第二は佛の三徳を滿てしめん、恒囉吒恒囉吒内外の障を伏し又佛の法身を成ぜしめんが爲なり阿鉢羅帝訶帝是れ無害なりの故に重ねて之を云ふなり。阿鉢羅帝訶帝無障の義なり此れを無堪忍大護と名く、なほ彼の威光猛盛なること、初生の小兒の烈日の光を視

るに堪へざるが如く、此れも亦是の如し、一切、堪忍して敢て之を映奪すること能はざるものなり、故に無堪忍大護と名く。此れを以て眞言の行者を護るなり。次に如來普光の印、二空指を並べて、屈して掌中に入れ、二風指直く豎てよ各相着け堅てよ。二火指の頭相合せて、其の節を稍開けて鈴鐸の形の如くし、餘指は前に同じ、即ち是れなり。眞言に曰はく、歸命は前の如し、闍嚩羅闍とは生なり、嚩は縛なり、羅は義と同じ、無摩羅摩は是れ我なり、長の阿の聲あり、履は是れ相なり、但他揭多此れは是れ如來の光なり、相不生なり。摩履羅羅は物想の義なり、有觀無觀を離るるなり但他揭多如來の光は無相無觀等の義の中より生ずるを以てなり。

次に如來甲の印、三補吒合掌に作して、二風指を以て中指の背の上に傍へ置き、並べて之を列ぬる是れなり。其の眞言は之を闕く、更に本を勘へよ。如來舌の印、亦之を闕く如來舌の眞言に曰はく、歸命は前の如し、但他揭多、誓訶囉舌な薩訶囉薩訶囉は達摩法な鉢囉底瑟耻多性な如來とは即ち是れ如實なり。如來舌の如きは常に如語・不誑語・不異語を作したまふ、是の如く眞實なるを以ての故に常住なり。

次に如來語門の印、前の印に准せよ、即ち三補吒合掌に作し、即ち水指風指の頭を以て、掌内に聚め合せ、二空指を以て並べて之を壓す、其の二地指二火指は並に直く

二 闍嚩等 經に 此次に 喉旨を 此の二字あり 此の二字を 加へて釋せるものなり

して、頭相並べて尖れること峯の形の如くする、即ち是れなり。眞言は歸命前の如し、摩訶嚩迦但囉此れは是れ毘濕囉若那種種巧摩訶駄耶大廣謂はく、此の語は如來の無量門の巧慧によりて作したまふ、此の智は廣大にして無量なり。

次に如來牙の印、三補吒合掌に作して、二風指を屈して掌内に入れ、指の節をして背け並べしむる是れなり。眞言は歸命前の如し、但他揭多、能瑟吒囉牙囉婆囉婆味なり、味の中の味なるが故に重ねて揭囉博迦但他揭多毘奢也境界三婆囉此の勝上の味は如來の境界より生ず。

(二) 揭囉 經には揭囉の次に參鉢羅の三字あり。
(三) 四辯 法、義、詞、樂説の四無碍辯なり。

次に如來四辯の印、三補吒合掌に作し、二風指を以て勾曲して、二火指の背の上に當て、頭相着くること勿れ、即ち是れなり。如來この印に由るが故に、衆に處したまふに無畏にして、人の爲に正法を演説したまふ、乃至一字の中に於て無窮の義を含めり、此の辯才窮め盡す可からず。眞言は歸命前の如し、阿輸鞞那步多奇特曷魯婆語の分段なり、亦嚩迦三曼哆普至なり、佛一音を以て法を説きたまへば、普く一切衆生の前に至る、其の是れ奇特なり所至の處各各に自ら、佛は我が音に同じて我が爲に法を説きたまふと謂へり毘輪陀清淨囉囉音なり、發する所の言は語業施惡等の過を離れて微妙清淨なるに由りて人をして聞かんことを樂はしむ、故に清淨言音と云ふ。

次に如來十力の印、地空指を屈して掌中におき、頭を聚め合して相拄へしめよ、餘

(二) 許 裏
(三) 摩 此れ參鉢羅の寫誤なるべし。
(三) 闍 水

(四) 前文 十二合掌の釋段を指す。

指は三補吒合掌に作す是れなり。眞言は歸命前の如し、(二) 許は是れ三德なり、(三) 摩は是れ空なり、點は是れ三昧なり、(三) 闍は是れ來の十力を持つなり、此の三字は合して句の後に於て、大本の中の如し 馱舍囉蘭伽十力の身分なる上は是れ十力なり、即ち此の蘭字は長の阿陀羅持即ち此の智印の力に由りて、能く如來十力の支分を持つなり。

次に如來念處の印、三補吒に作せ此れは是れ未割の蓮の如くして中を極めて空にする合掌二空二風を以て聚めて相捻する即ち是れなり。其の捻する法は、常に四個の指をして指の甲を相到らしむべし。眞言は歸命前の如し、但他揭多、悉密囉底念なり、如薩埵係多衆生利益弊庾駄揭多起なり伽伽那三摩虚空生阿三摩無等言はく、此の念と虚空と等しくして限量す可からず、然も又虚空は比とすることを得ず、故にまた無等と云ふなり。然る所以は虚空は無所有の性なり、一切衆生の爲に大利益を作すこと能はず。

次に一切法平等開悟の印、三補吒合掌に作す、二水二空指を以て、聚めて相捻する即ち是れなり。眞言は歸命前の如し、薩囉達摩三曼多一切法平等鉢囉補多至なり得なり、但他揭多如來なり、正義奴揭多隨なり如なり、諸の如來に隨ふを謂ふ、彼是の如く開悟を得るなり。

次に如意摩尼普賢の印、普賢と名くる所以は、此の菩薩所有の三業普くみな賢善な

るを以て、諸佛菩薩の讚歎したまふ所なるが故なり。其の印は三補吒に作し、二風指を以て、轉じて二火指の背後に加へよ、節に當て、圓ならしむる是れなり。餘は常の如し。眞言は歸命前の如し、三曼多奴揭多平等至吠囉闍無垢なり達摩涅闍多法生なり、首は法より摩訶摩訶此の義を重言することば此れ猶ほ天中の天と言ふが如し、諸菩薩等は佛を供養し、佛は轉して生ず摩訶摩訶じて普賢を供養す、普賢の身は三世佛と等しきに由るが故に、此れ即ち大中の大、供養の中の供養なり、故に重ねて言ふ。

(二) 乳等 善無畏 三藏 彌勒 菩薩 種子 以て 梵字 なり 義釋 には 三藏 の説 として 梵字 を 出せ 子に 即ち 此 菩薩 の 種 子に 二種 ある なり

次に慈氏の印、三補吒に作して、二風指を屈して、指の頭を火指の根下に至らしめ、二空指を並べて之を壓す、餘は常の如し。此の印の窠都波の形の如くなることは、一切如來の法身の塔を持つを以ての故に、猶ほ觀音の佛身を持つが如し。眞言は歸命前の如し、阿瞞擔古くは阿逸多と云ふ、此れは其の名を呼ぶなり、其の義は無勝なり、社耶得勝なり、無勝の中に於て、薩嚩薩埵一切衆阿世耶性なり、奴揭多衆生起なり、起は即ち是れ知の義なり、一切而も其の勝を得るなり薩嚩薩埵生なり阿世耶性なり奴揭多衆生起なり、起は即ち是れ知の義なり、一切云はく、此れは是れ彌勒の種子なりと。

次に虚空藏の印、虚心合掌にして二空指を以て、並べて屈して掌中に入る是れなり。眞言は歸命前の如し、阿迦奢空なり三曼多等なり、虚空に奴揭多得なり、前には知の義、起得の義と云ふ、亦瞞質修此の廢は即ち是れ點なり、瞞字の上に囉囉囉瞞質多は是れ種種の義、瞞質多は是れ衣の義なり

若なり、種種の衣を着するを謂ふ、虚空の色なくして能く種種の形を現すが如く、此の菩薩も亦爾り、猶ほ虚空の如くして、能く種種の形を現じ、衆生を利益するなり。

次に除蓋障菩薩の印、三補吒合掌にして、地水指を以てみな屈して掌中に入る、餘は常の如し。其の地水指は甲を合して相拄ふるなり眞言は歸命前の如し、阿薩埵係多阿は是れ能除の義なり、係多は是れ利益の義なり、衆生を利益す瞞也囉揭多是れ除の義なり、亦是れ其の善性相囉囉囉上の如し、謂はゆる除とるを謂ふ瞞也囉揭多を開發して顯現せしむるなり相囉囉囉は其の何事をか除く、謂はく四垢を除くなり、凡夫の愛見の垢は一なり、聲聞の垢は二なり、緣覺の垢は三なり、菩薩の垢は四なり、衆生の垢を除くが故に聲聞の位に入り、聲聞の垢を除くが故に緣覺の位に入り、乃至菩薩の垢を除くが故に清淨の位に入る

次に觀音の印、初は(一)開剖合掌に作し、空指地指を以て聚めて相捻せよ、餘の六指は之を散せよ、其の火風指は皆並べて相着けて水指を獨立する即ち是れなり。薩嚩但他揭多如來阿瞞盧羯多觀觀なり、如來迦盧拏悲なり、言はく大悲を以て體とす、囉囉囉囉三垢解此の解字は行・解脫・大空を三とす、闇は未是れ生の義、謂はく從緣生の法なり此の中の如來觀とは、言はく、菩薩は未だ成佛せずと雖も、而も見は佛に等同にして、(三)蘊性を見るに由るが故に觀の名を得、唯だ悲を以て體とす、此の悲は三毒を離るゝに従ひて、無貪等の三善根を得て、三解脱を生成す、故に三の囉字あり。

次に大勢至の印、三補吒合掌に作し、十指を屈して相拄へて周圍ならしめ、未剖の

(二) 開剖合掌 二合掌の中第四初 割蓮華合掌なり。

(三) 蘊性 五蘊の 本性なり。

(二) 瞻
(三) 安
(四) 世間等 此句は婆字の説明なり細註となすべきなり
(五) 指向内相又掌内縛なり

(五) 向内作拳合掌内縛なり

(六) 上 第十一卷の釋を指す。三解脫の義なり。

運の如くす。此の未開の蓮は即ち是れ如來の寶篋なり、開敷し已りて却つて合するが故に。眞言、(一) 瞻ゼン生シヤク是レは(二) 婆ハ是レは等智トクな(三) 世間の生を離る、又菩薩の生を超えて平等智の中に住するなり。

次に多羅菩薩の印、先づ(四) 指向内相又拳合掌に作して、即ち二風指を豎て、頭相合せて針の如くせよ、二空指並べ豎て、之を壓す即ち是れなり。眞言に曰はく、多囉タラ彼れを呼ケル多利尼タリニ渡ワタなり、猶ほ人を河より渡ワタ迎ムカ囉ラ擊ツク悲ヒなり、此の菩薩は悲より生ずるにぶなり、由りて、亦衆生を悲處に渡すなり。

次に毘俱知の印、前の如く(五) 向内作拳合掌にして、其の二風指亦之を豎てよ、但し參差して相壓せ、右の指をして左を壓さしむる即ち是れなり。其の形勢は大いに多羅に同じ、但し指を參差するを殊とす。眞言、薩囉婆也サハラハ一切恐怖イツセツホ但囉薩囉タラサハラ亦是れ恐怖な怖の中に於て、又恐怖を以て之を恐怖して彼れを退散せしむるなり、もし調伏せられざる者を見ては、又剛強の威勢を以て之を降伏して、非をなすことを得ざらしむ。餅ウシ三義サンギ上ウヘ汗アツ吒也タ是れ破壞の義なり、彼の諸怖をして退散せしむるなり。此の眞言は毘俱知持誦母者なり、諸の持誦の中に於て、猶ほ母の如く功能最も尊し。

次に白處菩薩の印、二水指を雙べ屈して掌に入れ、其の二空指も亦並べ屈して相到らしめよ、餘は三補吒合掌に作せ。眞言、但他揭多肥舍耶タテガキタヒセヤ如來の境ニヤミ三婆囉サンパラ生シヤクなり、言コト界ニヤミなり、はく如來の

境界より生ハシ鉢曇摩里底ハツトモリヂ德トクを生じて以て莊嚴として、法身を莊嚴す。

次に馬頭の印、三補吒を作し、二風指を屈して甲を合せて、空指の根下を去ること一麥許りにして相着けず、其の二空指並べ豎て、其の甲の頭を稍仰ぐる是れなり。眞言、佉駄耶タダヤ噉チ食シキなり、言コトはく諸シヨ畔ヘン閉ヘン薩破吒也サハクチャ謂イハレはく、此の諸障を打撃して四方に散ぜしむるなり。

次に地藏菩薩の印、向内相又合掌に作して拳に作し、地水指を申べて頭をして相合せしむ峯刃の如。二空指は直く並べて之を豎てよ。眞言、訶訶訶カカカ三因サンインを離る、謂イハレはく聲聞・緣中エダカの諸言シヨは皆自ら本尊の德行を説くなり、蘇哆奴ソダヌ故コトに妙身ミョウシンと名く、即ち法身ホウシンなり、謂イハレはく、行者是の如くの印を作すなり。

次に聖者文殊の印、先づ三補吒に作して、二火指を以て反して二水指の背を壓せ、二風指は之を屈して空指と頭相捻する、即ち是れなり。眞言、係係ケイケイ此の中の訶の聲は因離るるは即ち是れ二乘の境界を超度クワダ俱摩囉クモラ童子コウジなり、諸魔を破壊す、毘目底ヒメヂ解脫ゲダツなり、言コトはく、亦是れ呼召コウソウの聲なり、謂イハレはく二因をにか住する、謂イハレはく解ゲ薩末囉サマラ念ネン薩末囉サマラ念ネン鉢囉底惹ハツラヂゼン昔シヤクの所願ソクワンなり、いま昔の所願を念ずるなり、即ち今當に昔の誓を憶ふべきが故に。

次に光網菩薩の印、左の手を以て(二) 拳に作して、風指を申べて第三の節を稍屈し

(二) 拳 如來拳なり

て、鉤の形の如くならしめよ、空指を堅て火指を壓す、即ち是れなり。係係俱未羅
釋は前の摩耶揭多摩耶は幻なり、揭多は知なり、一娑嚩婆嚩性な悉體多と了知するが故に、即ち諸法
の實性本性の中に住するなり。

次に無垢光の印、左の手の一切の指を舒べて、皆第三の節を稍屈せしむる、即ち是
れなり。空指も亦堅て並べて少し、眞言、係呼な俱摩羅如の肥質多囉なり、掲底の行を謂ふ
俱摩囉謂はく本誓願なり、當に普門を以て種種の身を示現し、種種の行を以て一切を利した
昔の所願を憶ふなり、聖者昔佛前に於て此の願を立つ、願はくは當に之を憶念すべし。

次に繼室尼の印、先づ右の手を以て拳に作して、火風指を申べて、並べ合せて直
く堅てしめよ、其の空指も亦堅てて相並べよ。眞言、係呼前の俱摩梨難童子なり、女聲
亦是れ文殊の三若那なり、薩摩囉昔を捕囉底然本願なり、此の意は言は、尊者が文殊の處に於て
三昧なり、若那なり、薩摩囉憶ふ、捕囉底然得る所の勝願と、本所願の妙願とを、今亦我れに授
與するなり。

次に那波繼室尼の印、先づ右の手を拳に作し、直く火指を申べ、其の火指も亦之を
堅てよ。常の如く、大指を外に向ふの拳なり、眞言、頻駄耶穿な惹那智なり、前の句の末に阿の聲あ
り、言ふ意は妙慧を以て穿つ、係呼な俱摩哩難童女なり、亦是れ三昧なり、
此の無智、實相に達す。

次に地慧幢の印、先づ左の手を以て拳亦是れ大指を外になして、地水二指を申ぶる即
ち是れなり。係呼な薩末囉憶念若那此の智を憶ふべし計都輪なり、此の妙慧幢に由るが故に
諸魔を摧く、今當に憶念して我れ
をして亦爾らしむ。

次に召請の印、以上よりこのかたの五菩薩は、皆文殊の使者なり。ニ右の手を拳
亦是れ大指を外におく者なりに作し、風指を屈し、圓に屈して鉤の如くならしめて、空指の頭と少し
許り相到らざる、即ち是れなり。眞言、阿迦里灑耶れ鉤にして此に來至する義なり皆是
薩婆俱囉一切作なり、一切取與する等皆是れなり、謂はく尊者阿然勅此の聖者の
身を指す。矩忙囉寫此の聖者の
身を指す。

次に諸奉教者亦是れ文殊の奉教者なり、使者と少しく異なり先づ向内相又合掌拳に作して、二風指を申べ
て頭相合せて第三の節を屈せよ、二空指も亦堅て並ぶなり。眞言、阿行なり、傍に
點あり忿怒形
を示す微三昧耶皆滿すことを得しむ、此の聲は即ち此の尊者を指すなり。

次に憍都揭羅菩薩此には譯して除疑と謂ふ、或は除垢なり、大衆人の疑懼する所の事ありて、決了す
る能はざるが如きは、此の菩薩即ち其の所に往きて、其の疑網を斷つ、能く不請の
友となりて一切衆生の疑惑を斷つ其の印は向内相又合掌に作し、二火指を申ぶ、頭相
合せて第三の節を屈す、即ち是れなり。二空指は常の如く外にありて堅つるなり肥末底無慧なり、謂はく
了知せざる所なり掣駄迦義なり、無知を截斷して智慧を生ぜしむるなり、亦是れ決斷の
義なり、亦是れ斷壞の義なり、猶ほ能斷金剛般若の義の如し。

一、三、二、亂脫
光、計設尼、地慧幢、烏波
召請童子これなり

甲、亂脫
乙、諸奉教者 不
思議童子なり。

丙、以下は除蓋障
院の聖衆なり。

二、拳 金剛拳な
り。

三、そのまゝ今
の文にそのの二字
なし、經にあり。

施無畏菩薩の印、施無畏手に作せ、瑜伽の中釋迦の印の如し、臂を申べて上に向け、掌を外に向はしむる、即ち是れなり。此の印は五法を行ふことを示す。地を信とし、水を進とし、火を念とし、風を定とし、空を慧とす。諸佛菩薩は身口を以て法を説きたまふ。今此の印は即ち是れ此の五根力を表す。眞言、阿婆演駄駄、即ち是れ無畏施なり。何の法を以てか無所畏を施す。謂はく阿字門に住して一切の生を離るゝなり。尊者は所願已に満てり、我れ等は未だ得ず、願はくは我れ及び一切衆生に施したまへと。

次に除惡縛の印、即ち前の如く手を舒べて、掌をして上に向はしめ、上に向ひて之を擧げしむる、即ち是れなり。眞言、阿驪馱囉拏摩訶薩埵馱都衆生界、此の義は、一切衆生は無始より以來、無明を以ての故に常に三惡趣の中にあり、今聖者は已に是の如くの五力を得たまへり、願はくは之を擧げて清め昇ることを得しめたまへ、所以は何にとなれば、尊者は已に自ら能く拔出したまへり、亦當に一切衆生界を擧ぐべしと。

次に救護慧菩薩の印、前の如く手を舒べて心に置く、當に掌を以て身に向けて心を掩ふべし、大指は稍立てて上に向ふのみ。眞言、係難因なり、又は呼摩訶摩訶大中の大、尊中の尊

りな薩末羅鉢囉底本願なり、本願を以て一切の苦を除く、苦を除くを以ての故に救護と云今彼の名を呼びて、本所願を憶はしめて、一切を救護するなり。

次に大慈生菩薩の印、前の無畏施の手の如くして、空風指を以て相捻せよ、人の花を持つ狀の如くして、餘の三指は立てて上に向ふ、即ち是れなり。眞言、薩嚩囉心なり、特掲多謂はく自性清淨の心より生じて、大種の心より生ぜず、故に自心生と名く。

次に悲念菩薩の印、前の如く手を舒べて掌を覆せて心を掩ひ、中指を屈して心に當てて之を拄ふる是れなり。眞言、迦盧拏界なり、末盧更に問へ尼多上念此の意は言はく、尊の本願は一切の苦を除かんとなり、今當に憶念すべしと。然も此の菩薩を悲念と名くることは、意猶ほ未だ盡さず、其の意は言はく、此の菩薩は悲に繫屬するなり。人の他の執持を被るが故に自在を得ざる如し。此の菩薩の身心も悲に繫屬して、悲のため持せらるゝが故に自在を得ざるなり。又人の王に役屬して自在を得ざるが如く、此の菩薩も亦爾り、常に悲のために牽かれて、自在なることを得ず。此の義によるが故に、當に本願を念じて、一切衆生を救ふべしと。

次に除一切熱惱菩薩の印、與願の手に作す、即ち是れなり。謂はく、右の手を舒べ、掌を仰げて之を垂れ下す、瑜伽の中の寶生佛の印の如し。眞言、係係上の嚩囉馱尊中の尊

是れなり。前と異なり。頤喇るは極忿怒の義なり。餅なり。泮吒しむるなり。

次に金剛針の印、向内相又拳に作し、二風指を豎てて、頭相着けて針の状の如くならしめよ、其の二空指は並べ屈して掌中に入れよ。眞言、薩嚩達摩一切法、涅憍達爾一切法、

穿なり、金剛針の針を以て、伐折囉素脂金剛針なり、何物を以て之を穿つ、謂、

一切の法を貫達するなり。伐折囉素脂はく金剛智の針を以てするなり、

を得たり、亦當に一切衆生をしてみな諸法の源に達せしむべし。、

次に(二)金剛地棒の印、向内相又拳に作して、二空並べ豎て、拳になし、二肘を並べ

て相近づけ、稍高くして之を豎てよ、以て槌の形に像るなり。擧げて右邊に向け、臍り打眞

言、薩普吒也散なり、金剛慧の槌を以て三番の、三婆吠生なり、誰れか能く此の事を作す、謂は

次に(三)難勝金剛の印、右手を拳に作し、風指を豎てて心の上に當て、左手を拳

皆大指を以て直く臂を舒べ、拳をして稍高く頭と齊しからしむるなり。一切の魔、

外に在くして作して直く臂を舒べ、拳をして稍高く頭と齊しからしむるなり。一切の魔、

燒亂し勝つこと能はざるを以ての故に、名を得。眞言、杜達里沙降伏し難、摩訶盧瑟擊大忿

り、何の法を以てか衆魔を伏す、法陀耶食なり、一切の煩惱等、薩嚩他揭多阿曳然一切如來、俱盧奉な

謂はく一切如來の教を奉じて、

次に(三)相向金剛、難勝と相對して門を狭むに由るが故に、名を得。其の印は(三)上の

(二)金剛地棒
釋には金剛地棒
と云へり。

(三)難勝金剛
釋は守門の聖衆なり
經には無能勝と云
へり。

(三)相向金剛
釋は亦守門の聖衆なり
經には阿吽目

法なる梵名にて出
せり。上の難勝と
共に四大護院の聖
衆なり。
(四)上。難勝の印
を指す。即ち相向
の印は難勝と左右
の兩手相反するの
み。
(二)以下は釋迦院
の聖衆なり。

(三)次に等。釋迦
聖相を明す。印は
如來身會の如來毫
相の印を用ふ。

(三)以下の諸尊は
眞實の普通眞實藏
品の中に説くもの
を用ふべし。

如し。唯だ右を繞じて、孫上の阿吽目、相向摩訶鉢囉戰茶、極大暴惡法駄耶、食緊只羅曳

細何ぞ急速なり、三昧耶本誓、摩奴薩末囉憶念なり、もと一切如來の前に於て三昧耶の誓を立て一切の煩惱

一切煩惱なり、利纏の直く下して、薩嚩達摩一切法、嚩始多自在、鉢囉鉢底得なり、謂

於て自在を伽伽那三摩、虚空に等し、此の法を以て煩惱を攝るなり。

次に前の毫相の印の如し、即ち釋迦の毫相の印なり。

次に右手の五指を以て、聚めて之を捻じて頂上に置く、此れ即ち一切佛頂の印な

り。眞言、鑿鑿鑿の音は縛なり、二縛は煩惱所知の、餅餅餅三因を離れ、三空を

次に左手を拳に作して風指火指を舒べ、空指を以て地水指の甲を壓して刀鞘にな

せ、其の右の手も亦是の如し、之を刀に爲して刀鞘の中に内るる、即ち不動尊の印な

り、其の鞘の仰げて刀の手を覆するなり。降三世の印は、五股金剛の如し。更に

次に佛眼の印、三補吒に作して、地水を雙べ屈して掌に入れ、二火を豎てて針の如

くならしめ、二風指を轉じて二火指の第三節の上を捻せよ、なほ眼の形の如し、二空

指並べ豎て、稍屈して二中指の下に當て、指の頭をして豎眼の形の如くならしめよ、

即ち是れ三眼なり。其の地水指は向内合掌の法の如し。前の如きは名けて佛母の印とす、此の中には佛頂の印と名け、亦は佛菩薩母の印と名く。

(一) 刀印 大蓮刀の印なり。

(二) 五股 外五股なり。
(三) 蓮花 八葉印なり。

次に白傘佛頂の印、左手を散し舒べて、指頭をして相去ること各寸許りならしめ、以て傘とす、右手は拳に作して風指を豎てて柄とす、柄を以て左掌の心に挂ふる是れなり。凡そ拳を作すと云ふは、皆大指を 眞言は前の如し。次に勝佛頂の印を作せ、前の(二)刀の印の如きは是れなり、謂はく、三補吒に作して火指を豎て合せ、風空を相捻する、即ち是れなり。次に最勝佛頂、前の轉法輪の印の如き、即ち是れなり。次に除業佛頂、前の鈎の印の如き、即ち是れなり。謂はく、向内相又合掌に作して、右手の風指を屈して鈎形の如くならしめ、二空は亦右を以て左を絞ひ壓す、今は單手なり、即ち右の手を拳になし、風指を豎てて上節を稍屈す。次に火聚佛頂の印、前の佛頂の印に同じ。廣生佛頂の印は、前の(三)五股金剛の印の如し。次に發生佛頂、(三)蓮華の印即ち前の觀音の印なりを作す。無量音聲佛頂、商估の印を作す、前の説の如し。謂はく三補吒にして二空を變へ風して風を以て並べて之を壓す。次に毫相の印、右手を以て拳になし、便ち風指を以て眉間に於て之を挂ふ、眞陀摩尼と名く、即ち是れ毫相の印なり。

佛眼の印、前の佛母の印の如く之を作す、是の中に少し許り異なりとは、謂はく、風指を開きて火指の背を去らしむること、一麥許りにして相着けず、五股の形に似たる、即ち是れなり。

(二) 前 第十二卷に阿梨茶を明せる所を指すか。即ち左脚を前に向け、右脚相去ること三尺許りとすなり。

(三) 次 一天子等一なり現流經には此天子を説けり、案するに三藏翻譯の初梵本に之を脱出せし故にかく釋は再治の時に加へ給ふか。

次に無能勝明王の印、右の手は蓮華を執る印風空指の頭相捻し、火指垂れ屈して、中に當て、地水指正しく堅つる即ち是れなりの如く、直く左手の五指を舒べて、上に向ひ外に向ひて之を托せ指の頭を舒べ、其の手を稍頭より高からしむる即ち是れなり。其の立つことこの前の鉢栗底哩の如し。次に内相又拳に作し、其の二空指相並べて拳になし、極めて相離し開きて之を屈せよ、其の節は鈎の如くせよ、此れを名けて口狀とす、即ち是れ無能勝明妃の印なり。次に右の手を舒べて右の頬を托せ、頭を稍側だてて手を就けて少し許り相去る、即ち是れ淨居天の印なり。此れは是れ思惟の手なり、一には自在天と名く。次に前の自在天に同じ、右の掌を舒べて其の中指は頭を稍垂れて裏に向け、頭指と共に稍列る形に作す、即ち普花天子の印なり。手を胸の前に當てて之を側だてよ。(二)次に一天子の印を脱せり。次に亦前の如く右の掌を舒べて、風空を以て相捻して花を持つ形の如くす、即ち滿意天子の印なり。餘の三指は相並べて之を合す。以上は並に淨居天子なり。

一、三、亂脫

二、亂脫

(二)此等此文意は亂脫の相を説く

四、亂脫

一七二

次に地天の印、先づ合掌して、其の十指の頭を並べ、屈して相捻して圓かに之を屈せしめ、空指を掌内に入れしむ、其の形瓶子の如き即ち是れなり。次に前の施無畏の状の如くして、空指を垂れ屈して掌中に當てしむ、即ち是れ請召火天の印なり。次に兩手各空水を以て頭相捻して、餘指の端直く雙べて兩耳を掩ふ、遍音聲天の印なり。火風指の頭を以て兩耳を掩ふなり。(三)此れは地天の前に在るべし、謂はく、其の聲、衆をして普く知らしむ、亦是れ淨居天なり。淨居天の印に併せて、合して五天とす。施無畏の手に作し、空を以て地指の第二の節を捻せよ、即ち一切仙の印なり。此れより下は經と別なり。第二は此れは是れ普く一切仙なり、先づ大指を以て小指の第二の節を捻せよ、其の三指は豎て並ぶるなり、其の次第の如く、先づ頭指を開き、次に中を開き、次に水を開き、地と少しく相離れて、次に即ち五指を放散す、此れは是れ五大地仙なり、經の次第に依る。

次に閻羅の印、三補吒に作して、二風二地を屈して掌に入れ、頭をして聚め合せしむ、二空を以て二風の背の節第二第三の節を捻せよ、其の空指の頭稍屈して合せしめて、二空を以て火指に當つる是れなり。是れ壇茶の印なり

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十三終

國譯大毘盧遮那成佛經疏卷第十四

密印品第九の餘

沙門一行阿闍梨 記

二 嚙捺羅后 摩
薩首羅后的異名なり

三 器物 三載なり

次に右の手の指を舒べて、鐸形の如くして下に向けて之を垂れしめよ、閻羅後の印なり。次に左の手を以て地水指を握りて掌に入れ、火風相並べて之を申べよ、其の空指は尋常の如く拳に作せ、これは黑夜天の印なり。閻羅王の后なり。次に前の印相の如くして、但し頭指を屈して、大指の頭を以て、頭指の第二の節を捻せよ、二 嚙捺羅后の印なり。自在天后の印なり。更に次に左の手を以て、蓮華を執る形の如くせよ、梵天后の印なり。謂はく、掌を舒べて空風を以て相捻せよ、其の中指をば、屈して掌の内に當つ、圓の中には直く申ぶるなり。梵天は無欲なるに、反つて人等の身の如く、云何が后と言ふや。此は是れ梵王の明妃の印相なり、義を以て妃と云ふ。次に左の手の掌を舒べて、地水二指を屈して掌中に入れ、風指を廻して火指の背に捻し着け、空指も亦稍勾屈にせよ、即ち是れ嬌末離燦底の印なり。燦底とは是れ二器物の印なり、圓は之の如し。此は是れ大自在の子を羯底迦と名く、此の嬌末離は是れ其の妃の名なり。次に

左の手を以て、地水火の三指を申べて、各舒べ散せしめ、風を以て空を捻せよ、此は是れ那羅延後の印なり。持花の印胸に掩ふ、今此の印は外に向けて握るなり。次に左の手を以て拳に作して、空指を直く申べて上に向けよ、是れ閻王七母等の印なり。七母にみな之を通用するを以てなり。次に左の手を舒べて、曲げて鬚髯を承くる狀の如くならしめて、胸の前に當て之を仰げよ、是れ遮文茶の印なり。左の手の空を以て、地水の甲の上を捻じて、火風を申べて之を並べ立てよ、即ち涅哩底の刀印なり。次に左の手を以て、單に舒べて之を散せよ、前の轉法輪の印の如し、但し單手にして相勾め絞はざるを異とするのみ。此れは是れ那羅延天の印なり。次に十指を舒べ散じて之を覆せ、二空を以て相絞へ、即ち一切龍の印なり。因りて即ち右を以て左の上に加へよ、是れ難陀龍なり。左を廻して右に加へよ、是れ小難陀なり。前の九頭龍の印の如く、直く四指を申べて分ちて羽となす、是れ金翅の印なり。凡そ地居は多分、單手にて作すなり。次に左の手を舒べ立て、指の頭をして相着くること勿らしめ、即ち空地を以て相捻せよ、小指の甲を捻するなり、是れ商羯羅是れ骨鍊天なりの印なり。前の印の如くして、三指を並べ合せよ、即ち是れ烏忙那の印なり。是れ商羯羅の后なり。二印相似せり、前は頭指を少しく屈す、此れは直く立てて

(一) 社耶 勝と翻す、日天后なり。經文には社耶毗社耶とあり、今は毗社耶(無勝)を略せり。(二) 風印等 風天の印を明す。

(三) 索印 如來繩索の印を指す。(四) 縛囉擊 水天なり。水天は諸龍の主なり。

散ず。左の手を半蓮華の印に作せ、一に觀音の印を作す法の如くせよ、此の不同はただ一手を以て之を作すのみ、此は是れ梵天の印なり。次に顯露合掌にして、乃ち二風指の頭を屈して、火指の第三節の背の上を捻して、其の二水指の頭と相到らしめ、其の二水指も亦中指の第三節の背にあげ、其の月天の印は一に梵王の如くして異なることなし、但し白色ありと想ふを異とするのみ。次に合掌して風地を屈して掌に入れて聚め合せよ、其の火水指を團圓ならしめ、屈して弓の如くせよ、此は是れ日後の(一)社耶の印なり。(二)風印は前の如しとは、須らく左の手を申べて掌を側め、地水指を屈する是れなり、此は是れ風幢の印なり。先づ左の手を仰けて鬚に當て、琵琶を承け把る狀の如くせよ、右の手の風空を捻して餘は之を散じ申べよ、身に向けて運動して、絃を弾く狀の如くす、是れ妙音天の印なり、此れは即ち乾闥婆等を攝す。此は是れ天の后なり、亦言はく乾闥婆の類なり。次に前の(三)繩索の印の如し、謂はく、内して風指を申べ、鉤屈し但し左の手を以て之を作せ、即ち是れ(四)縛囉擊龍王の印なり。次に左の手を以て音樂天の印の如くせよ、圖の中には、右の手を以て風指を屈して、大指の甲の上に加ふ、餘は皆之を散じ舒べて、掌を覆せて左の手の上に臨むべ

(一) 内掌拳 内縛なり。(二) 本部の三昧耶 八部衆の本誓なり。

(三) 尾狀 尙ほ經には此次に(四)の二字あり。

し、阿修羅の印なり。其の眞言に、伽囉邏演と曰ふは、伽は行なり、行不可得なるを以ての故に、囉とは是れ無垢の故に、邏とは離相の故に、演とは無所得の故に、上に點あるは大空なり。乾闥婆は(一)内掌拳に作して、水指を並べ舒べて頭相到せ、是れ本部の三昧耶なり、若し事業の印ならば、即ち單に作せ、謂はく、大指を三指の甲の上に加へて、直く水指を申ふる、是れ乾闥婆の印なり。眞言に曰はく、肥輸駄清淨なる音なり。義を以て清淨の音を出すなり。薩囉囉言ふなり。みな世間の三昧なり。を屈して鈎の如くして、空指の頭と少しばかり相着けざれ、一切夜叉の印なり。亦合して眞言に曰く、藥乞叉藥は是れ乘なり、句義は自在なり、一切の煩惱を食ふに於て作す可し眞言の義なり。是れ敷食の義なり。濕囉囉自在を得るが故に以て名とす。左の手の空指を以て、地指の甲の頭を捻して、水火を申べて、風指を以て大指の節の上を捻せよ、一切藥叉女の印なり。亦合して眞言に曰はく、藥乞叉食なり。尾狀明なり。句は藥叉持明と云ふ。尾は是れ縛の義、此の縛を敷食するを謂ふなり。次に左の手の空指を以て三指の甲を捻せよ、即ちただ中指を申ぶ、一切毘舍遮の印なり。亦云ふ可し、但し拳を作す形の如くし眞言に曰はく、毘舍遮揭底は趣なり、第一義には趣不可得の故に。次に亦前に准じて中指を稍屈せよ、毘舍支女の印なり。眞言に曰はく、毘只毘只毘は是れ第一義、遮は是れ生死を離るの義なり、第一義を知るを以ての故に生死を離る、重ねて呼ぶことは、極めて生死を離るるなり。次に二手合

舉動止住もみな是れ印なりとは、若し阿闍梨明かに瑜伽を解り、深く秘密の趣に達すれば、能く菩提の心を淨む、心淨くして秘密の法に通達するを以ての故に、凡そあらゆる所作は、みな衆生を利益し調伏せんが爲なり、施爲する所に隨ひて、佛の威儀に隨順せざることなし。是の故に一切の身のあらゆる舉動施爲は、是れ印にらざるはなし。何ぞただ身業のみならんや、乃至一切のあらゆる語言も、亦またみな是れ眞言なり。

(二)是を云云以下越三昧耶の罪を明す。

(二)是を以て秘密主、眞言門に於て修行する菩薩は、已に菩提心を發しなば、當に佛地に住して漫荼羅を作すべし、若し謂はく、今末世の諸の眞言行の菩薩等は、越三昧耶の罪に同じ、決定して惡趣に墮ちんとは、謂はく、今末世の諸の眞言行の菩薩、已に大心を發しし者は、當に佛地に住して、然して後に漫荼羅を造立すべし、若し此の如くならずして擅はしに作らば、即ち佛を誘るになるなり。是の故に上來の説く所をば、阿闍梨當に彼の印眞言等の法を知り、一一に善く軌則に達すべし。又當に久しく瑜伽の行を修して、身口意業を淨め、平等の三業法門の行を體解すべし。此の瑜伽、及び眞言、並に身印等に加持せらるるに由るが故に、即ち是れ諸佛菩薩等の身に同じ

(二)字輪品第十を明さん。佛位に同じ。此の相應の三昧を以て、事理相違せずして圓壇を建立し、乃至方所色像等、一一に理に稱あひ、又錯失せずして善く次第を知らば、當に知るべし、必定して大利を獲て虚しからず、若し爾らずば、即ち越三昧耶の罪を得んと。三昧耶とは、是れ自誓なり。一切如來のもと立てし所の誓願は、普く一切衆生のために、佛知見を開かして、悉く我が如くならしめんと欲するが爲に、方便を以ての故に、此の法を立てたまふ。是の故に猶ほ世間の大王の教勅の、過越す可からず、もし越する者は必ず重責を獲るが如し。是の故に當に菩提心と相應し、佛地に住して之を作すべし。教に順はざることある者は、徒らに功夫を費し、虚しく光景を弃てて、終に成す所なく、徒らに罪咎を招きて、益する所なし。是の故に行者當に審かに經法を求め、又明師の開示を訪ひて、自ら誤をなすこと勿かるべきのみ。已に廣く印品を説き竟りぬ。

次に(二)字輪品第十を明さん。

佛また金剛手に告げたまはくとは、前には金剛手の問ふ所を、佛已に次第に之を答へたまふ、前の文に未だ周あからざる所あるをば、今更に爲に説きたまふ、故に告げて

諦聽せしめたまふ。

法門あり、遍一切處と名く、彼の菩薩の字位に住する時、一切の所作みな成就することを得とは、即ち此の字輪の法門は、是れ遍一切處の法門なり。菩薩若し此の字輪の法門に住すとは、始め妙菩提心を發してより、乃至成佛まで是の中間に於て、あらゆる一切の自利利他の種種の事業、此の法門に入るに由るが故に、一切皆成就することを得て、罣礙あることなし。又(二)上來の所説に、阿闍梨は佛地に住すとは、義猶は未だ了らず、謂はく、此の中の字門即ち是れなり。最初の阿字は即ち是れ菩提の心なり、若し此の字を觀じて、而もともに相應するは、即ち是れ毘盧遮那法身の體に同じ。謂はく、此の阿字の輪を觀ずること、猶ほ孔雀の尾の輪の光明圍繞するが如く、行者その中に住するは、即ち是れ佛位に住するなり。更(三)此の字輪は當に(三)三重に作して、中に阿字を置き、餘字をば眷屬として外におくべし、更(四)又此の阿に五種あり、(一)阿・阿長暗・惡・惡長なり。又字輪の初め毎に、先づ三重の歸命、三寶の眞言の心あり、謂はく、阿字・娑字・嚩字なり、即ち此の三字は三部の義を顯すなり。阿字は是れ如來部、娑字は是れ蓮華部、嚩字は是れ金剛部なり、三部毎に(五)五字輪に隨ひ

(二)上來の經の具
思惟して佛室に住
印品には一當に密
來地に住して曼茶
羅を畫すべしと
云ふ今これ等と
經文を指すならん
(三)三重 孔對
の三字を指す
(四)別對孔對等
五字を除きて四第
に於て各字輪を出
生ず
(五)五字輪 五字
と云ふも實には四
字なり、第五字は
嚩字部に於て一字
別輪なし。故に切

て轉ず、義に隨ひて相應する相なり。前には漫荼羅と言へり、今は輪と云ふは、即ち是れ漫荼羅の義なり。前には壇法の中心は是れ大日如來とは、即ち此の中の阿字に同じ。北邊に蓮華及び諸の眷屬を置く、皆一處におけとは、即ち是れ此の中の娑字なり。南邊に執金剛及び諸の眷屬を置けとは、即ち是れ此の中の嚩字なり。今阿字より更に四字を生ず、即ち是れ大悲胎藏の葉なり、一字より多くの字を轉生するが故に、名けて輪とす。第一の阿字は即ち是れ菩提心の體なり。次に(一)迦^ア佉^カ伽^ガ等^ガの五音あり、みな四字を取る。各第五の次に(二)也囉^ヤ乃至乞叉^カを取る、皆是れ男聲なり、悉く阿字輪に入る。行者已に菩提の心を發さば、當に如來の行を進修すべく、故に次に(三)阿^ア長^カ字輪を明す、是れ行なり。其の三部とは、阿娑嚩の三字是れなり。次に迦字乃至乞叉に、亦是れ傍の角に點を加へて、用て長聲の字輪となす。既に已に如來の行を具足すれば、則ち菩提を成すべし、故に次に(四)暗^ア摩^カ鑊^ガ字輪を明す、此れ三部なり。此の阿の上の點あるは、是れ大空の義なり、此の菩提の心に由りて、一切の諸相を離る、即ち諸佛と名く、是れ成菩提なり。次に迦字乃至乞叉に、みな上の一點を加へて暗字の輪となすなり。已に菩提を成すれば、當に何れの所にか至るべき、謂はく大涅槃なり、

(一)迦等 阿佉伽
の五音あり
(二)也囉等 迦囉
乃至乞叉
(三)阿字 梵字な
り

(四)暗摩鑊字
なり

(二) 定慧空、定とは多量なり、慧とは少文なり、空とは般若等の字なり

是の如く秘密主、字門道は善法なり、真言道の住する次第なり、諸佛神力の加持したまふ三藐三佛陀の道なり、菩薩の行儀なりとは、經に是の如くと云ふは、即ち上の字輪を指すなり。上來に説く所の定慧空等の如きは、即ち是れ佛道の門なり、能く正覺を成ずるの道なり。若し字義を了知するときは、即ち能く真言の道に住す、其の中の次第法則・證入の相・階位の差別、亦悉く曉知すべし、明かに通塞を達して疑滯あることなかれ。然も此の悉曇の字母は、乃至世間の童子も亦常に修習す、何ぞ能く頓に是の如くの事を辨せんや。然も此の諸字は、皆是れ如來加持神力を以て、如來内證の體性より之を流出したまふ、故に能く是の不思議の業用あり。若し人明かに此の中の意趣方便を解すれば、即ち是れ三菩提の道を通達するなり。善能通達とは、謂はく、一切衆生の諸根性欲に通達す、當に何の法を以てか道に入ることを得べき、當に何の門よりしてか曉悟することを得べき、是の如く等の無量無邊なるを、皆能く了知して、衆生に隨ひて妙法を授與し、みな如來の地に至ることを得しむ。儼とは、世人の儼するが如く、大衆の中に於て、種種の身業を動かして、屈申俯仰し、又種種微妙の巧便の音曲を出して、衆生の欲し樂ふ所に順ひて、彼の大衆をして、或は歡喜せし

め、或は悲思せしめ、或は恐怖せしむ。一の身口より出す所の方便を以て、諸の衆生をして、益する所同じからざらしむるは、彼れ善く去就を知り、能く衆生の心に順ふに由るが故なり。菩薩も亦爾り、種種の威儀を現すに、印を成さざることなく、種種の妙法音を出す、皆是れ真言なり。圓應無方にして、皆大利を得るが故に、菩薩の儼と名く。

三世の如來、みな是の説を作す、已に説き、今説き、當に説くべしとは、是の如くの字門真言淨道は、十方三世の諸佛の道同じくして、皆是の如し。普く色身を現じて、種種の門を以て佛道を開示したまふ、彼の儼伎の曲、人の情に順ふに同じきなり。彼我なしとは、我れ佛眼を以て、遍く三世一切の佛刹を觀するに、同じく此の門を説きたまふ。一切の佛と我れと異なることなく、一切の佛と彼の諸の如來と亦また是の如し、異説あることなきが故に、彼我なしと云ふ。此れ即ち一切の佛教なり、當に是の如く之を修すべし、若し此れに異なる者は、方便即ち具せざるなり。

是を以ての故にとは、是れ如來彼の義を結成して、金剛手に告げたまふ。若し金剛手に告げたまふは、當に知るべし、即ち是れ一切の大會に告ぐるなりと。謂はく、彼

一、三、亂脫
 (二)阿等 丑 梵丸
 梵丸なり。
 (三)迦等 體文五
 類聲の二十
 中各第五の
 前に擧ぐる
 (四)後分 類聲の
 八字及び五
 中には前に
 伊益等の五
 以て後分と
 ち合して廿
 五字あり

の眞言行の菩薩、若し速かに古佛の法を得んと欲せば、當に是の如くの遍一切處の法門を修學して、懃心に聽聞し、思惟し修習すべし。此れに由るが故に、或は能く一生の中に、一切如來の種種の儼戲歌詠を得て、衆生を悦ばしむ。三初中後相加ふとは、謂はく、(一)阿等の五字を初とし、(二)迦等の二十字を中とし、囉等の八字は皆是れ傍の點なり、此の諸字は皆是れ字義を助成するが故に(三)後分とするなり。凡そ迦遮吒多波等は、みな阿字門に屬す、阿字は是れ菩提心なり。此の中に初中後相加ふれば、阿字の如きは單なる是れ菩提心なり。若し傍の角に畫を加ふれば即ち是れ行なり、此れは是れ菩提心に行を并すなり。若し上に點を加ふれば、即ち是れ菩提心に、大空の一切の相を離れて菩提を成ずるを並するなり。若し阿の傍に二點を加ふるは、即ち是れ菩提心に并せて、一切の障を除きて涅槃を得るなり。他はみな此れに倣へ。轉た相加ふるに、或はただ一義、或は二義、或は三義なること知る可し。或は阿字あり、上に點なしと雖も、而も其の次に字あれば是れ重字にして、其の仰・壞・擊・羂・羂等の聲あれば、此れを以て前に連ぬれば、即ち是れ暗字なり。爾る所以は、此の仰等は是れ點なり、用て前に加ふれば、即ち阿字暗の音と成るなり。或は阿字に點なけれども、其の次に重の字

五、四、亂脫

あり。
 五迦佉俄伽の重加の四字の如きは、仰字を用ひて點とす。遮車闍社^ニの字は、壞字を以て點とす。他は之に倣へ。囉等の聲あれば前に配するを以て、即ち囉字と成るなり。然る所以は、也囉等は皆是れ傍の二點なり、今前を連ぬるを以て、阿は即ち囉の聲と成るなり。更に審かに問へ

キ、亂脫

夫れ法體は無言にして、諸の分別戲論を離れたり。復能く一切如來、自在加持神力を以ての故に、此の字輪を成ずるが故に、能く如來の事を作して群品を利益するなり。

ニ、亂脫

ニ迦遮吒毘跋三昧品を以て、菩提心の行を證し、佛受與し、並に涅槃す、此れ等の説ける字等相加ふれば、眞言教と初中後俱なることありとは、此は是れ經文なり、已に文を釋すること竟りぬ。

六、亂脫

是の如く知りて隨意に持誦する者、意を決して一一の句に之を用ふ、知覺せば當に句の無上殊勝なるを授與せらるべしとは、是の如く知るとは、即ち是れ一切智智の名の差別なり。若し行者、是の如く字輪の義を了知すれば、即ち能く欲する所みな成就することを得。要を以て之を言はば、謂はゆる一切みな意に隨ひて成るとは、如來の

一切の事業を成すを謂ふ。若し此れを成す者は、即ち是れ法王に同じく、一切の法の中に於て自在を得、亦本の願ふ所に隨ひて、一切衆生の爲に淨知見を開きて、佛慧を得しむることを得。何人か此の利益を得る、謂はく、理の如く縁を具して善く持誦する者なり、故に次に持誦者と云ふ。誰れか此の決定の意を得る、謂はく、有慧の人、善く字輪の義を覺了し識知するが故に、阿等の諸字に於て、一一の字門に修行する所に隨ひて、決定して悉く皆菩提の果を得、疑惑を生ずること勿れ。此の中には何の法をか覺知する、謂はく、阿字の如きは是れ菩提心なり、點を加ふれば即ち是れ菩提行なり、大空を加ふれば即ち是れ成佛なり、若し菩提心清淨にして、一切の蓋障を除くは、即ち是れ大般涅槃なり、更に他の義なし。是の如く等を一一に通達し了知するときは、即ち是れ無上殊勝の句を受得するなり。無上の句とは、即ち是れ成佛なり。此の無上菩提の心は、即ち是れ諸佛の自然の智なり。實には能く之を授與する者あることなし、但し行者方便具足して、善く字輪の義を知るとき、自然に之を得、即ち是れ無上菩提を授與するなり。

是の如く一輪より字輪を輪轉するを、知れる持誦者は常に世間に明かなること、世

尊毘盧遮那の如し。輪轉すとは、世間の輪、若し旋運する時は、是の始終の際を知る可からず、邊際あることなく、窮め盡すべからざるが如く、當に知るべし、此の一一の字輪も亦また是の如しと。阿字より旋轉して、一切の諸字を出生す、此の字輪は、即ち一切の眞言の名字の中に遍じて、廻轉し惣持して、邊際あることなく、原を盡す可からず、一切處に遍ぜり、即ち是れ百千萬億の旋陀羅尼なり。行者若し能く是の如く字輪の義を了知すれば、則ち能く此の常明を以て世間を照す。常住の明とは即ち是れ大日如來の體なり、彼の毘盧遮那に同じくして法輪を轉ずるなり。此の中の常明とは、即ち是れ大慧の日なり、此の日は即ち是れ菩提の心、阿字の體なり、無生無作にして變易あることなく、造るに由りて成るに非ず、是の如く常住實相の慧なるが故に常明と名く。若し行者勤功し久しく修して、懈退あることなくば、決定して之を得るなり。

然も(三)上來に説く所の漫荼羅の、方軌法用・散華・灌頂・乃至、或は授くるに明鏡を以てし、もしは金鐸を以て其の眼膜を決くる、是の如く等は、皆創めて菩提心を發す者の爲に、方便加持の次第法用を以て、彼れが堅固の心を成して、佛法に入るの階

(二) 以上經文を解
釋し畢りたるを以
て自下に餘義を述
ぶ。
(三) 上來 具緣品
所説の七日作壇及
び入壇傳法の儀式
を指す。